

# 川柳塔

平成七年十二月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷八二三号



日川協加盟

No. 823

十二月号



十一月発行

頒価三千円

(送料三百十円)

序 視野無限 この言葉に尽く

麻生路郎

恋人の膝は檸檬のまるさかな

労働歌蟻が歌えば凄かるう

睡蓮は万丈光の源よ

亡母の闇この世は雨が降っています

走馬灯花も犬ほど走るなり

老いてしずけし淫の字も姦の字も

蹈躡踏む阿形畔形人間座

富士山の藍に一礼してしまふ

発行所 沖積舎

101東京都千代田区神田神保町一―五二

電話 〇三・三三九一・五八九一

振替 東京 三―一七七六三二番

(川柳塔社でも取次ぎます)



Pierre Parthen



Daniel Monshell

泣いて笑って……  
夜を通り過ぎたら  
また陽がのぼっていた  
男のロマン

オーエスケーの  
紳士服



株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 941-8018

# 平成七年

## を顧みて

### 橘高 薫風

平成七年の荒ぶる年も十二月になり、人皆今年の出来事を顧みる時期になった。社会全般では、先ず阪神大震災の発生であり、オウム真理教に関する一連の事件である。これらに比べると激しい梅雨による被害も物の数ではないように扱われる、まことに不仕合わせな年であった。震災では被災地の僚友柳社に義援金を送り、全国の柳社や連盟、本社系列の各川柳会から厚い友情を受けた。同人誌友の地震の被害もさきまで、作品も多数詠まれたが、

罹災再び割れない亡母の碧い壺

亀岡 哲子

一月十七日 晴 街はつぶれた

小林 一夫

の二句が、それぞれ路郎賞準賞第一席と各地柳壇賞を得た。亀岡哲子さんは家屋全壊の被害、小林一夫君は地震直後、被災地の同人へ給水のボランティアを続けた。

川柳塔社では、西尾某名誉主幹の急逝が特筆される。昭和六年から六十有余年の川柳生活、作句と旅をたのしまれた。麻生路郎先生の遺志を継いだ初代主幹の中島生々庵氏の後を受け、川柳塔に和の精神を植え付けられた。多数の同人誌友をはじめ全柳界が遺徳を偲び、厳肅に御魂をお送りしたことは、まだ印象に新たである。

十月には新企画の第一回川柳塔まつりを開催、川柳塔の活性化を図ったが、九月三十日の前夜祭、一日の総会と句会、ともに予想外の成果を挙げた。来年は更に工夫を加え一層充実したものになりたい

ので、積極的な意見をお寄せ頂きたい。

十一月四日には高野山霊園にある川柳塔碑に、今年度の物故者十一名の御霊を合祀、ご遺族とともに四十八名が参列して法要を営み、ご冥福をお祈りした。

終りに私事で恐縮であるが、古稀を記念して五冊目の句集『古稀薫風』を発刊した。生前の路郎先生が常々、

「還暦や古稀という人生の節目を記念して句集を上梓する作者はいるが、五十年に一度句集を発刊する作家が川柳界にも居てほしい。それも内輪での出版でなく、全国の書店にも配布出来る出版社から発行するような川柳界にならなければいけない」とおっしゃっていたのを実現したかったのである。詩、短歌、俳句の書を多く手掛ける学芸出版沖積舎から川柳第一番目の句集の出せたことをありがたく思っている。

古稀の感謝を明日への活力に致したく願っている。



座右の句

これが遺書「平平凡凡」四つの文字

私の句

レモンティー澄んで嬉しい友が居る

小糸昭子

(薫風)

# 川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 平成七年を顧みて……………橘高薫風 ……(1)

駅の花……………小出智子 ……(2)

川柳塔 (同人吟)……………橘高薫風選 ……(4)

自選集……………東野大八 ……(46)

川柳の群像 中島国夫……………(48)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十七〜二十八丁)……………(48)

大空のこころ (59)……………橘高薫風 ……(41)

水煙抄……………西田柳宏子選 ……(52)

秀句鑑賞 [同人吟]……………田中正坊 ……(50)

水煙抄……………岸野あやめ ……(75)

〈同人特集〉「私の句」(4)……………(76)

## 駅の花

小出智子



JR環状線の桃谷駅と寺田町の丁度中ほどに住んでいる私は、両方の駅を都合のよいように利用させてもらっています。寺田町駅

では改札を通って階段が左右に分かれていて真ん中辺りに柱があり、その前に大きなガラスのケースが置かれています。そこには何時も四季の花が活けられています。多分、駅の近くで花道を教えている社中の方の作品ではないかと思いますが、夏の暑い日など、暑さに弱い花は三日と持たないと思いますのに、花は絶やすことなく活けられていました。この駅の花は、花材は極く僅かですが、花器との調和のとれたセンスのよい小品で、侘び寂びの趣のある日もあるれば、シャレた洋風向きの作品など、行き帰りの人をホッとさせる心の行き届いた活け方がされています。何時も出掛けにこの花を見るのが、楽しみでもあります。ある暑さのとくに厳しい日の午後のこと、改札を入ると珍しくこの花の姿が何時もと違うことに気付きましたが、急いでいたので見直す時間もなく、階段を駆け上りながら、は

澎湖抄	小出智子選	(80)
茴香の花	八木千代選	(83)
各地柳壇(佳句地十選/井上喜醉)		(85)
「寺」	宮尾みのり選	(98)
一路集「度忘れ」	林 瑞枝選	(98)
「植える」	松川杜的選	(99)
初歩教室「飾る」	吉岡美房	(100)
旧満州を往く	田中正坊	(102)
十一月本社句会		(104)
柳界展望		(108)
大往生の増田竹馬さん	林 荒介	(110)
十二月各地句会案内		(111)
■編集後記		(112)

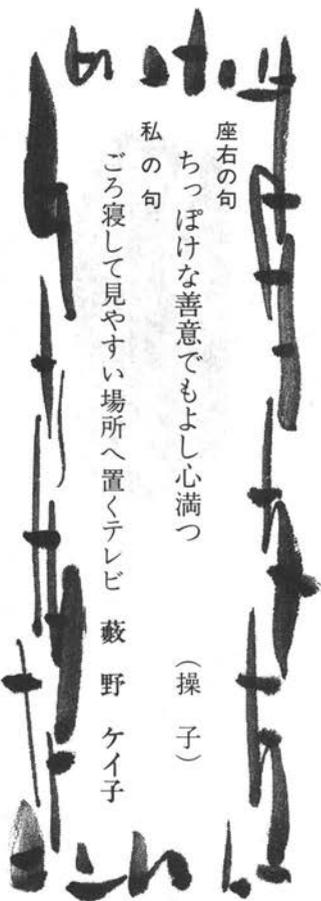
座右の句

ちっばけな善意でもよし心満つ

(操 子)

私の句

ごろ寝して見やすい場所へ置くテレビ 藪野 ケイ子



て?今日の花は、横斜めに活けてあつたものか、暑さのために水上げが悪く倒れたものか、そんなことを考えながらブラットホームに上ると、運よくすぐに電車が入って来たので、そのままこの花のことは忘れてしまっていました。夕方になって駅に降り立って花のことを思い出し、ケースの置かれた正面に回って眺めると、花は直立体に、いとも涼しげに活け直されてあり、この花を受け持っている人の並々ならぬ花へのこころ配りのほどを嬉しく感じたものでした。

花は生きものですから、物に触れることがなくても、花自体が動き、位置など変ります。その日、その日の気温にも敏感ですから、決められた日だけ花を活ければよいというものではない訳です。寺田町駅の花に関心を持つようになつてから、他の駅の花も気を付けて見るようになったのですが、その都度納得したり、がっかりしたりしています。

天王寺駅では、改札の横の目目に付きやすい場所に花が置かれてありますが、ラッシュユの混雑を考慮されたものか、何時の頃からか取り除かれて見当らず、大阪の玄関口である梅田駅では中央改札の横に、立派な格調高い横の流儀が活けてあるのを見ました。

花を活けるにしても、川柳の作句にしても、心を尽くすということの大切さを忘れてはならないことをつくづく感じさせられます。

# 川柳塔

## 橘 高 薫 風 選

弘前市 高 瀬 霜 石

人生に上手も下手もないだろう

ライバルのテールランプはよく光る

DNA重いつづらを背負っている

追いついてからは素早い亀の足

賛成も反対もない寒い部屋

子が巣立ち妻とジャンケンばかりする

鳥取県 新 家 完 司

秋短日いのちぼろぼろそばぼうろ

六十億の一人に出逢う秋の道

死んだ人を忘れぬための笛太鼓

樹のことは鳥のことは難しい

風が倒しに来る執拗に確実に

倒されてやっと安心して眠る

尼崎市 田 中 薫

黒猫の生まれながらに影を曳く

さんまの眼この世の雨の硝子を磨く

天気図におんなが描く秋の文様

にんげんの数ほど正義 柿熟れて

足二本歩道橋の矛盾を昇る

昇天のおんなの手足 曼珠沙華

竹原市 小 島 蘭 幸

宗数は莊嚴 稚児の列続く

長女より早く寝る日が続くなり

一番風呂にとても明るい父がいる

面白い男を一人借りてくる

野良犬の子がコスモスの中にいる

若乃花ポニーテールが好きと言う

松山市 宮尾 みのり

ポップコーン自我がはじけてゆくように  
介護する方もされたいほどの齢

よく出来た人と言われてなるものか  
右へならえして小姑のかましい  
ちちははの墓を身近に置いている  
生きてきた月日がつくる影法師

竹原市 岩本 笑子

切り取り線 御免御免と切つてゆく  
振り向けばみどり足跡だけ続く  
カード一枚の薄さで金をためている  
良くも悪くも忘れた方が勝ちですよ  
まゆ紡ぐ生き抜くためにそれだけに  
借景のガラスとともに古里よ

米子市 林 荒介

朝の虹はつきり今日を意識する  
落ち葉して街が明るくなりだした  
明日を繋ぐ郵便ポストも駅  
逆上がり人生観を問いかける  
仁王立ちむかしの父に逢いに行く  
逆らってみても一人の力瘤

米子市 政岡 日枝子

忘恩を責めてるような駅の風

なにゆえか女が転ぶ四番ホーム

脱け殻の私に似合う無人駅  
値ぶみなどしなから駅の人を見る  
住民票と共に出てゆく始発駅

一枚のハガキを駅で書いている

島根県 堀江 芳子

真夜中の往診 神の背を拝む  
脈拍は生命の波ぞ確と打て

とうさんも海老も酔うてるいい日だな

こんな奴と酔うた機嫌で言われても

五日寝て湯気吹く鍋の懐かしさ

愚痴を聞く雨もしよぼしよぼ降り出した

香川県 池内 かおり

啼く声は助けたガラスかも知れぬ  
灰皿の使い道など考える

嫁さんが遠隔操作してはるな

さりげなく夫のペンダコ見ていたり

人込みに紛れて探す夫の手

胸ぐらを掴んで揺するものが欲し

熊本市 永田 俊子

核実験強行 赤い月が昇る

官官接待 家ではコロッケ食べている

夫婦別姓 大反対の道祖神

呼び水を左遷の月に待つている  
相撲四十八手利用してます欲の道  
やさし過ぎる男へモナ・リザが笑う

堺市 藤井 一二三

是々非々を通す小さな風を抱く

曼珠沙華 色褪せにけり旅の果て

秋野ゆく佳人の傘の匂うなり

決断のまだ生け垣の続くなり

さざ波の音聞こえたり秋の湖

首の牽引 末路はこんな姿かも

和歌山市 田中輝子

人間不信おもいがけない転びよう

プライドの高さへ氷河まだ解けず

高速を奔る振り切るものの数

ごくごくんと水飲む音のする出合い

ずぶ濡れの中で通じてきた心

雑音はもう届かない深い秋

廿日市市 林野甦光

北はもう大雪ネコが膝に来る

リゾートの辺りに住んで人が来ず

ネットワーク広げアメリカ節を聞き

一人では寂し二人じゃ気が合わず

酒樽を洗うしぶきも酒どころ

配置替え一息風が吹き抜ける

弘前市 佐治 千加子

ポケットにメモが溜って生きている  
キラキラと塩がこぼれて秋ひとり

この道はいつか来た道 亡夫と来し

ゼブラゾーン都会の人は失語症

月見草 無月の夜もひたすらに

弘前市 中山雅城

ロウソクはいざという時立ち上がる

ロウソクは夏の暑さに耐えている

ロウソクが消えてめでたい歌になる

ロウソクを灯して天使生まれます

ロウソクの灯 恋しいネプタ絵師

黒石市 千葉風樹

夕焼けの中に父との橋がある

花置けば花温める父の墓

犠死者が累々という核の道

一寸先の闇に銃砲店がある

おしくらまんじゅう酒がだんだんますぐなる

五所川原市 斉藤 菖

台風が逸れてりんごと乾杯や

あくまでも案山子一本足がよい

まんどろな月に溺れて立つ岬

平板土偶 哀しくも可愛くも

語り合う手話の十指にりんご熟る

青森県 田中叶

想う人あり猫がゆく窓の下  
よく食べる女で僕が好きという  
強くなった女に一礼して帰り  
またただの中年となる父になる  
脱ぎすてた私のズボン子のズボン

富山市 舟渡杏花

曲解を生む合鍵の美しい  
石臼と実りを約すそばの花  
憎いひとと待ってる萩の三分咲き  
無花果の葉が究極の芸をする  
まむし酒 欲の一つが醗酵す

大阪市 榊本路児

することもなくて自分の脈をとる  
老婆と回転木馬に乗っている  
作務衣着て終日テレビ見えています  
音無しの構えで今日を呑んでいる  
蜥蜴の子 好きで生れたわけでない

大阪市 河井庸佑

妥協よりここは順応すると決め  
飲みに関連世代感覚学び取る  
潮時を見て退却も策に入れ  
言うべきか言わざるべきか時計る  
二兎を追う失敗談で諭される

大阪市 西出楓楽

映画館ほど感激はせぬビデオ  
平凡な日々形状記憶シャツを着て  
昼寝から醒めるとあの世かも知れぬ  
足跡を多めにつけておく余生  
万策の尽きたところに父母がいる

堺市 桑原道夫

どしゃぶりの雨に格子のありにけり  
水割りの水が我慢できず鳴り  
円柱に凭れて居しや無頼漢  
二階から虹が見えるよ秋の虹  
末の世の電光ニュースの文字ひらひら

箕面市 岩津ようじ

じゃこ飯が減法うまい今日の幸  
ただ一つの遺言ご会葬辞退  
こおろぎを聞くごきぶりの嫉妬心  
虫カゴの虫の夫婦も倦怠期  
松の廊下 連想させるパンタロン

吹田市 古川喜美子

喜多さんは夏負け弥次さん一人旅  
飛行機に乗ると遠くへ行く気する  
ふところ工合似た友とゆく遍路みち  
すんなりと秋来たように錯覚し  
五十回忌の君よ私は生きてきた

茨木市 井上森生

秋風に揺れて弾んでいる芒

ポップコーンを孫が一つぶずつくれる

もうそろそろゆったり歩く時だけど

世紀末と違う余震が止まぬとも

銀杏が熟れて平和な地に落ちる

高槻市 川島 諷云児

吹けば飛ぶ肩書ついて縛られる

とぼとぼと歩けば影もとぼとぼと

子におもね嫁に遠慮の余生かな

地図にない港を探す夫婦舟

感情のしこりが溜まる喉ぼとけ

守口市 結城 君子

リゾートマンション空の広さよ海の広さよ

むかしのままの波の音なり安眠す

台風雲の切れ端 塔の島

目的地へ着かない前に買う土産

帰阪の日 稲架日和とは皮肉なり

寝屋川市 岸野 あやめ

未亡人 職人さんに無理を言う

わが城があつて世間のことが見え

世が世ならですな 道具屋そつがない

夫逝つて本気で語る報恩講

乳牛が老いてるような私です

交野市 福岡 しげお

てっぺんへ登る気のない蝸牛

万歩計 倍に数えて山登る

骨董の徳利の出番来る

生き残り五十年目のかばちや汁

老友の酔いにふとんをそつと掛け

藤井寺市 吉岡 美房

勝つ間合い負ける間合いが見えてくる

柿のある景色にもどり旅終る

マンションで聞く豊作の笛太鼓

頼られるだけで恋人にはなれぬ

抗議団 握手一杯して帰る

羽曳野市 榎本 吐来

口軽の財布は堅いものと知る

さあ二次会だ 万歳の声はずむ

シナリオがどう変ろうと俺お前

微笑みの胸にニヒルを抱いている

器用に変わる姑の顔母の顔

羽曳野市 吉川 寿美

歳月や開き直りがうまくなり

こともあろうに味方に梯子外される

仕合せのバズルが解けぬ手暗がり

言いわけの下手な男の冬帽子

他人ではないと知ってる箸袋

八尾市 宮西弥生

富田林市 池森子

北向きの地藏が通う傷だらけ

ほどほどのくらしで欲は別にあり

青春切符 年齢制限なく走る

いくつかの途中下車して生きている

結んでひらいてそして時どき足洗う

八尾市 片上英一

大戦前夜 紫けむる新雪の

闇市の時代よ遙かザ・めしや

朝吉が貞やんがいた八尾のまち

梅田新道 道路元標ひっそりと

主の鯉まだいるだろか泥の河

八尾市 高橋夕花

夕茜 母のこころはあり余る

あえぎつつ私の汽車が走りだす

グラビアの赤いコートが目痛い

師の絵から消えないように一行詩

ラベンダー詩人にさせて母の部屋

八尾市 山下美津留

割勘の友情老いてなお続く

本の虫 酒飲む虫をあざ笑う

百日紅 未練な人へ咲き続け

秋刀魚焼く男を猫がのぞき見る

同居でも良いと言う嫁待ってます

籠には青い思想が置いてある

美しく焼きあがったよ秋のパン

あきらめも肝心 腹式呼吸して

うふふ傘のしずくを切っただけ

こころ対心で母が勝つゲーム

富田林市 片岡智恵子

諍いの溶けてしまった熱い燭

厚着して魂の汚れを隠す

血の濃さよ修司の詩に母の陰

孫それぞれ個性の見える靴を脱ぐ

楊貴妃の恋にわたしも血が騒ぐ

尼崎市 春城 武庫坊

温もりを追っかけている下駄履きで

入歯抜け口一杯に秋になる

棟方志功の天女と語る秋日和

人間の弱さに染みる胡弓の音

平均寿命 肴に二人飲んでいる

尼崎市 春城 年代

膳本から消えぬ息子は独り者

独身の息子哀れむ血とは何ぞ

訣れても親子は切れぬ悲が絡む

弟のさだめ鬱うつ業なるや

ひとりになれば踊ってる歌ってる

伊丹市 山崎君子

孫に買う振りして買った縫いぐるみ

花鳥わたしの孫の優しさよ

かぶと虫 森に残した児を思う

無造作にかけた眼鏡は画になって

青い空 何処が一番平和だろう

西宮市 門谷たず子

いつまでのふたつを洗うめし茶碗

仮設横目にきしむ公園のブランコ

わたしにも待つ人がいる赤とんぼ

黒白をつけると傷つく人がいる

日暮れ坂ひとり芝居がうまくなる

和歌山市 牛尾緑良

もう寒くなりますみかん送ります

夢錆びて少し私も太り気味

再会へ少年少女たらんとす

自由席 一緒に旅をしませんか

深夜まで夕焼けを見る五十以後

和歌山市 西山幸

勇氣出そうと朝の鏡に言うのだが

紅筆も自己顕示欲だけはある

月並なことばかりなりそぞろ寒

糸底を磨いてひとを待ち続け

愛憎のさむさを泣こう冬近し

和歌山市 宮口克子

最高の夜だ良い酒 良い友と

それからの絆を結び直す旅

酔うほどに燻る消したはずの恋

愚かさをつくづく空が着すぎる

恥かいてかいてわたしの人生譜

和歌山市 木本朱夏

葬列を見送っている曼珠沙華

破れ蓮の累々として死後の国

ひび割れて月もわたしも置き去りに

幼馴染みの椅子が時々いけずす

小便小僧の肩のあたりへ目を逸らす

和歌山市 福井桂香

月を観るつきとおんなじ彩を着て

月が出て私の好きな海になる

雑念に負けてしもうた昼の月

返り花 実の成ることは考えぬ

たくらみは決して持たぬパンナイフ

倉敷市 田辺灸六

くすぐって笑わぬ人の冷たい眼

無い袖を振って親爺の面をつけ

花好きの妻が明るい朝の庭

縁あって結んでひらく人生譜

もう一度うしろ姿を見て別れ

倉敷市 小野 克枝

ぼつぼつがいそぐと鉤かけ違つ  
たつた一段上の幸せ掴めない  
大きな目の皿によるこび盛り合わす  
振り向かぬ過去美しい玉手箱  
北風を避けて通れる齡となり

岡山県 二宗 吟平

花束のようにひい孫渡される  
ひい孫を抱けばパチパチ カメラ攻め  
二十一世紀 任しなさいという笑顔  
アメリカの父へオギャーを乗す電話  
民謡で歩調とりつつ犬の綱

米子市 田中 亜弥

秋は見事でもいつもガラスを拭いている  
合点をしたいが首がまがらない  
陽は真上わたしの影は昼寝かな  
過去半分は笑いの中で育つた  
群を出て泳ぐ事まで忘れだす

米子市 澤田 千春

花たちが揃って唄ういい朝だ  
海を見るテトラポットに兄がいた  
赤鬼も私の友の数のうち  
風の旅ふとよぎるのは万が一  
唄つたい歩けばやがて海に出る

鳥取県 江原 とみお

回り舞台くると切れ番がくる  
葦刈りの爺さま葦のなかで死ぬ  
満月をバックに人を誑す  
落し穴の上は涼しい風がある  
倒した樹の跡から寒い風がきた

鳥取県 土橋 螢

ふくらはぎからすこしずつ太りだす  
花が枯れている危険な曲がり角  
愛ひとつ菊の蕾は三つずつ  
いのちの音が秋を惜しんで早くなる  
雨の日は休日にして感謝する

鳥取県 岩崎 みさ江

夫が打つ釘は背伸びをする高さ  
野の花と遊べる齡を手に入れる  
枝切りをしてから風が光りだす  
梨むけば豆をつまめば亡母思う  
光らない石に苔むす味が出る

鳥根県 堀江 正朗

けんめいに歩く 歩くと何処へ行く  
人さまは見えているから出る言葉  
書いて消す訳にはいかぬ足の跡  
陽は沈む險にぬくみいだいて  
戦盲の悩み雀は無邪気だね

島根県 松本文子

祭笛 亡父もどこかで聞いている  
おばあさんの洗濯をする川がない  
振り向くと悲劇になってしまふ旅  
最後の旅は優しい人に会えるよう  
孫と手をつなぎ倅せ満ちてくる

今治市 野村京子

自分史に煮こぼれがあるしみのあと  
輪の中にいて高からず低からず  
思いつきり淋しい花だ曼珠沙華  
病んでゐる小指マニキュアまっかつか  
酸欠の街で踊っているマンボ

高知市 北川竹萌

八十三 秋 夢が見たくて目の手術  
目の手術 妻を七日の一人ぼち  
地声知る乾杯音頭指名され  
受け渡しいざござ代価台の上  
秋七日やつと無用の日が続き

福岡県 横地東川

庭の柿見るものなりや柿を買う  
久々の通話戦友の耳も老い  
図書ずらり手垢全然ついてない  
心まで老いたか妻が杖となる  
見おろされてるのでないが孫の肢

唐津市 田口虹汀

茶に誘い紅茶に誘う友の居て  
生真面目な銀杏もやがて丸裸  
四苦の中 三つの味は解つたが  
頭まで中途半端で染め直す  
心配が無いので風に揺さぶられ

唐津市 久保正剣

巢立つ子のスーツに母の子守唄  
月皓々人間界は核に病む  
再会の髭が俺より偉く見え  
紫陽花のサブリミナルは不倫だろ  
錯覚の虹がボトルの中に浮く

唐津市 仁部四郎

人間を信じることを努力中  
秋の夜を留守番電話の子へ語る  
お化粧が早く才女の資格あり  
虎の尾を踏めば拍手はもらうはず  
物語あふれる父の砂糖水

唐津市 山口高明

税金の高い列島住み飽きた  
不確かな愛を信じておんなです  
良い名だと刑事字画を褒めてくれ  
通信簿渡すと孫はとんで逃げ  
人間は悩みトンビはピーヒョロロ

唐津市 浜本ちよ

肥後ダイに招かれまたも久住の旅  
一時雨二しぐれ朝の露天風呂

にらの花からつに生けて雨の午後  
夫亡くし夫のフルネームかかけてる  
亡くしたら良い夫となり日々供養

香川県 川崎ひかり

いつの世もつきぬ女のこぜりあい  
終の時 私はなんと言うだろう

家族の和カニがそろそろ煮えてきた  
ダイコンと同じ軽さで首を切る  
梯子段 策士が降りてくる気配

松山市 白石春嶺

駅長の指が尾灯へ向くチエック  
家計簿が内出血で病んでいる

カーブから入り打ち取る反抗期  
どの子にもすがらぬ余生だから貯め  
詮索をすれば嫉妬になる迷い

米子市 新正子

どうぞどうぞとみんなで少しずつ動く  
疑えば垣がずんずん高くなる

秋ですな噂話が着ぶくれる  
真実は八分きれいに書く日記  
結末が幸福な本ばかり読む

米子市 青戸田鶴

大樹逝くあとの秋空深くなる(義兄逝く)  
屍が還る白萩散る家に

姉の背の重みを少し支えよう  
手さぐりの路へ炎えてる彼岸花  
醉芙蓉 忘れたい事多くなる

米子市 野坂なみ

ぼた餅は大口あけて召し上がれ  
夏ばての創に毒薬少しすつ

余生幾許ときに自分を甘やかそう  
友だちだね創よ伸よく手をつなごう  
見えがくれするその塔へ漕ぐばかり

鳥取市 春木圭一郎

子規と湯に感動 道後妻と行く  
文学と城と湯のまち夢を織る

紅葉に子規も歩いた道辿る  
手づくりの茶菓のもてなし疲れとれ  
旅空に自分の位置と姿見え

鳥取市 岩原喬水

噂通り危険な美人に騙された  
競争のチラシまとめて捨てられる

片隅の机密談ばかり聞き  
男なら度胸をすえてついて来い  
懐が寒いと度胸定まらぬ

米子市 石垣花子

乗客の居ないバス停ばかりだな  
鳥取県 土橋はるお

終りまで聞いてくれたがことわられ  
残つてた未練 命を引きもどし

絵日記の笛が鳴らなくなっている

ロウソクが静かに炎を上げる午後

アカンベーして引き返す福の神

娘をつなぐ紐はやさしい色で組む

依怙蟲履しない首振り扇風機

頑固だから大黒柱守り抜け

ふる里の口座に五円残がある

米子市 寺沢みどり

鳥取県 土橋睦子

変化球このごろ子等に見抜かれる

紅葉を眺め竜胆は背のびする

身に覚えのないに猫に唸られる

快気祝に輸入松茸届けられ

どたん場にすれば真つ赤な旗を出す

追い抜いてそれからひどい風に逢う

円卓の包容力に甘えてる

柿を取る腰の構えを子が笑う

荒海を漕ぐには權が長すぎる

縁側に母が忘れたはだか銭

米子市 林瑞枝

鳥取県 鈴木公弘

元気の気いたたく森の千年樹

手を打った後から痛むときがある

ひと握りの夢を果たしてリラが散る

波止場から腕組みをするお父さん

石碑の答は真つ盛りの野菊

死して塩振るにんげんの薄情け

梨を煮る匂い浮き浮きしてしまふ

焼いて煮る魚に恨まないけれど

ナンバーツーで終る雑務の山といふ

ひとめぼれ刈る蒼天のコンバイン

鳥取県 松下たつみ

鳥取県 林露杖

背伸びしたシャクトリ虫に行き止まり

遠足の子の声弾け山紅葉

花に水やるとき心澄んでいる

初咲きの鉢の白菊供華にきる

晩秋の空ひきしめる柿の赤

三八式担ぎし肩に鍬をのせ

ネクタイを少しゆるめるいい話

老いを織ることの悔しさ淋しさと

花一輪お慈悲のように咲いてくれ

明けてオウムずうつとオウムで十二月

鳥取県 谷口次男

団地ではちよつと有名飲んで

国家とは無名の民が主役なり

仲間から外れる癖が治らない

警官も仲間に入れた大丈夫

実直な寡黙の嫁を応援す

鳥取県 石尾かつ乃

気がつく仕事着のまま救急車

私を見舞う孫は花束しかと抱き

窓ごしの山の笑顔にはげまされ

成るように成るから朝を待っている

退院はまだかと赤い服が待つ

鳥取県 さえきやえ

しおんが咲いて古き佳きこと思い出す

化粧せぬわけなどきいてくださるな

能登の人 元気が雲にきいてみる

いい人にもらわれていくチャリン梅

ボケたかな 母が時計をおがみ出す

鳥取県 西原艶子

お祭りの空気 夢心地にされて

弓引いた人も祭の席にいる

一本の葎が逆らう風もあり

教えてもわからないから背をみせる

人恋えば母という字も揺れてくる

鳥取県 石谷美恵子

生意気を吐くがとつても親想い

伯耆富士ひとり占めする窓がある

情報の海に溺れてよく転ぶ

そうかそれから温い言葉へ堰がきれ

葉だと思ふ苦言へ畏まる

松江市 舟木与根一

芸術の秋テレビは付けぬことにする

日めくりはもう分からない農繁期

川のぼる鮭の涙を知ってるか

ライバルに塩を送って引き分ける

いい夫婦見せて疲れて五十年

松江市 柳楽鶴丸

浮いて沈んで浮いて六十七になり

ジャンケンに弱い男でもっている

知らぬ振りしても妻は知っている

言葉から心が透けて見えて来る

零で生れて 0で死にたい

出雲市 園山多賀子

積み重ね師の薫陶が実る秋(受賞の喜び)

卒寿ともなれば人柄枯れてくる

元他人嫁からベアのプレセント

持ち時間など考えぬ余命表

こぼれ萩夢二の女おいて見る

出雲市 吉岡 きみえ

芋粥が無性に食べたい日のゆとり  
買い溜めをしては腐らす癖がある

デイスカウント安いお酒を買いに行く

秋まつり縁談決まった娘もまじり

ひとり相撲いつも仕切りのやり直し

出雲市 小白金 房子

藁集荷 日暮れを急ぐ牛の声

こしひかりあの娘この娘へ味送る

豊作を綴る日記の字があふれ

趣味一つ老いて心の灯に生きる

七草を活けて女の城守る

出雲市 尼れいじ

青空を映して川が病んでいる

人口がまた一人減り柿熟す

木枯しが吹いて民話がまた生れ

軒下で寒を待ってる干大根

燻ってばかりの火種玩ぶ

出雲市 久谷 まこと

過疎だけど未練が残る父母の里

追伸でまだ書き足らぬ親心

ジェスチャーで本当らしく思わせる

おにぎりも豊年らしく大き目に

念入りにお化粧してる夜の章

島根県 小砂 白汀

秋の月 上がりかまちへ腰をかけ  
サルビアについ騙されて冬に入る

科学的りくつはどうあれ月夜茸

片ちびりきりきり舞をするばかり

実力の差ですよなどと取り合わず

島根県 藤原 鈴江

老いてなお人恋しさは何だろう

老いなりに会いたい人あり秋日和

病院で十年來の知己の如

病室の花は枯れないうち変わる

紙風船どこまで飛んで行ったやら

岡山市 井上 柳五郎

下手な字を理由に長い電話くれ

この白紙なにか出そうだ炙ろうか

空見上ぐ対岸さぬき水不足

肚の底から笑ってみたい小春日よ

枝たわわ去年の木守柿もどり

岡山市 時末 一灯

優しいさの安売り男がまた一人

喧嘩して本音じんわり焙り出る

平和と空気がタダだと思う人のいて

けしからぬ死ぬるまでをば余生とは

さよならの愛の後味たしかめる

笠岡市 松本忠三

私まで引合いに出しどうする気

年寄りの冷水でありほっとかれ

じいちゃんは実りの秋にからず番

苗字まで似ている関係ありません

さっぱりと色好い返事かえらない

岡山県 萩野 鮫虎狼

神妙な顔です今日は喪服です

秋の空 雲を追う眼も暇である

旅帰り夫婦茶碗がまた割れる

郵便が来た年金の通知かな

失恋を癒すお箏の音が低い

岡山県 小林 妻子

切り札の積りのままで持ちくされ

鬼の目の涙も頬を伝いおり

慟哭へ清め塩なぞ用はない

大正の眼鏡買ひ変えねばならぬ

本当の土産は裏口から届く

岡山県 山本 玉恵

風は秋 老いしを責むるペンの先

濡れ衣が乾かぬままの北の窓

睡蓮の昼寝横目に龜の首

今朝もまた両の轍の不揃いで

風の子が少なくなつた畦の道

岡山県 矢内 寿恵子

少年の大志 天地の応援歌

軽々と言うまい昭和史の重さ

歳月に金の指環もやせてくる

節操も理性も人の世も狂い

輪の中で和顔愛語がずれてくる

岡山市 森井 菁居

退院ができて苦しい日を忘れ

青春のドラマは妻に言うまじき

木の葉ひらひら旅人になるもよし

結納は二回目おさらいだけでよし

結納が来ていっぺんに秋深む

竹原市 石原 淑子

秋の陽へブラリブララ茄子の紺

考えた末に明日は白い旗

市場籠いっばいにして買ひ忘れ

一年の重さ軽さよカレンダー

御長寿の通夜心なし明るかり

広島県 藤解 静風

世論無視フランスパンに耳がない

半世紀ドームの鳴咽まだ止まず

万年筆乾く夏バテ後遺症

お芝居は完璧でした鬼の面

がむしやらに生きた昭和がいと嬉しい

宇部市 平 田 実 男

賞状も桶もずつしりに重し(路郎賞受賞)

ハネムーンは僕フルムーンは妻リード

衰えぬ亥年生まれの妻の牙

ネーあなたと妻は上手にねじを巻く

侵略の二字で日の丸まだゆがみ

柳井市 弘 津 柳 慶

悪友の相談最後は飲む話

窓際の椅子へ遠慮の声をかけ

ワープロで筆不精から便り来る

あいまいな返事に心のぞかれる

同権を認めて席をゆずられる

美禰市 安平次 弘 道

万雷の拍手ピエロになっていた

ライバルが笑いみじめになってくる

腹がへって独り芝居が続かない

証言に立つと悪戯したくなる

これからが勝負まあい絵を描こう

下関市 石 川 侃 流 洞

無理言つて見ようか父はいい機嫌

ひらかなの話が嫌い法学者

二で割った答えが何故か負に回る

よれよれのお札汚い金でなし

平成の猫も苦手な雑魚の骨

神戸市 木 村 貴 代 子

小さいままきたないままにうまい店

あやとりを教えファミコン習う仲

虫の音にあわて取り出す秋の装

孫たちの便りは月から宇宙から

金食い虫なのにうれしく飼っている

神戸市 山 口 美 穂

コスモスに想い出がある揺れている

好奇心の塊 小犬の鼻動く

もう少し胸を張れよと影法師

生かされた感謝と愚痴が表裏

本当の辛さは今も話せない

芦屋市 黒 田 能 子

家族皆帰り台風待つばかり

まだ大変は続いているいつ終る

水吸った山やさしくて恐い顔

窓少し開けて大人になっていく

トランペット吹くという若い僧

西宮市 奥 田 み つ 子

崩れ落ちた鳥居に聞かす祭り笛

地震後遺症 木犀香ること忘れ

曼珠沙華 無念の友の命かも

口紅をつけてと孫も女の子

一つ成れば二つ犠牲にする覚悟

西宮市 林 はつ絵

父の背にお不動さまの姿見る  
手の節に老父の履歴が書いてある  
お経ならよく諳んじている凡夫  
おおまかに予定を立てて老い楽し  
デザートのラムネ一本ちようどよい

西宮市 亀岡 哲子

紅葉映える池に紅葉のこぼれ落ち  
夢を見る時計ゆっくり回り出す  
吊橋のしがみつかれたまま渡る  
円卓へ四角い椅子が納まらぬ  
交配の純白と言う百合の花

西宮市 池田 善守

夜目遠目わが女房に惚れなおし  
波風を立てて好かれる人気者  
自分史を書けば父母夢枕  
台風はアポイント取ってやってくる  
永遠の幸祈って書いた荷目録

宝塚市 丸山 よし津

床に臥す夫の悲しいほどの嵩  
何も彼も複雑になり住みにくい  
幼い日の堺の潮湯なつかしい  
起き抜けの老人顔と対話する  
ふと解けた謎ににんまりバスの中

加古川市 吐田 公一

人生の秋 夕焼けの美しく  
ネクタイの歪みを直す朝の妻  
再職へ妻の笑顔を送り出す  
音痴だが唄えば人を樂します  
新しい器に心入れ替えて

京都市 松川 芳子

家事多忙 妻のスペアが欲しくなる  
親の手をするりと孫はとづくにへ  
ロボットが人間まびく不況風  
ブランドを着て約束の喫茶店  
乗車証いまさら年を意識する

京都市 都倉 求芽

騒音の音域だんだん広くなる  
見た目には何も変らぬ昨日今日  
靴裏について離れぬ重い悔い  
思い出はみんな楽しい日向ぼこ  
ふり向いた目には信号 裏ばかり

京都府 稲葉 冬葉

早秋へもう山茶花の深呼吸  
幸せの日々だから言葉を選ぶ  
煮凝りが好きなかあさんだったなあ  
少し早いが脳の指令が遅れがち  
妻が支えとぬけぬけと申すなり

奈良市 宮口 笛生

七十ともなればしんどいコンバイン

暑い夏でしたお米は豊作で

呑む方は負けない自信持っている

早う日が暮れて早う寝てしまい

呑む事が重なる曆 十二月

奈良市 天正 千梢

さみしきもののひとつとも見る丸い背な

いいわけはみじめ甲羅はしている

背のびはよそうお茶漬おかわりし

集団自決こわい言葉のひとつです

小賢しい知識つらねて宗教家

奈良市 米田 恭昌

孫が去に虫籠ひとつ老いの部屋

辛酸を舐めたオモニの底力

退院も近く毒舌出はじめ

断ち切れぬ煩惱にらむ達磨の目

石室の蝙蝠 寝込みおそわれる

奈良県 上田 翠光

国辱をバラ撒く戦後五十年(戦後五十年国会決議に思ふ)

村山さんいつまで土下座する気なの

侵略といわれ地団駄踏む八十路

靖国の戦友よ辛から口惜しかろ

衆院も政府も社党で年が暮れ

和歌山市 垂井 千寿子

冗談と思いたくないコンバクト

また妥協 納得出来ぬ核ボタン

御近所へ五感澄ませている転居

小公園 孤独へ枯葉纏いつく

雑草も同じ返事の水を撒く

和歌山市 堀端 三男

昇進らしい何時もの愚痴がなくなつた

生かされて恥の上塗りしています

気短になってわが身の老いを知る

握り寿司のワサビ程度と言うスリル

こだわりは捨てよ捨てよと心経繰る

和歌山市 福本 英子

枚方は近くて遠い菊日和

行く末にも過去にも逢える秋桜

退屈をさせず一日棒に振る

着痩せして愛しい人と遠くいる

狼煙を今か今かと雑魚の群れ

和歌山市 青枝 鉄治

空きびんに小さな秋ある無人駅

間引き菜の命リストラ重ね見る

ネクタイを外すと酒に味が出る

署名簿の厚さへ重い腰を上げ

教之子に礼をつくして二度の職

和歌山市 山田 高夫

一生を母は黒衣に徹し切る  
晩学という人生の暇つぶし  
くされ縁 灰になっても縄のまま  
終の幕 回り舞台もこれつきり  
アドリブで夫婦漫才しています

和歌山市 池 永正雄

郷愁のまま建っている道しるべ  
上席はお義理が揃う披露宴  
空き腹に一番旨い握りめし  
ゴミ籠もカメラに入る観光地  
板子一枚 豪華船でも変るまい

和歌山市 玉置 当代

雀の声 賑々しくもおらが町  
もう時間ないが道草したくなり  
逢いたさが募り 南京焦げている  
手を上げた責任とつてくれますか  
震災に明けてオウムで暮れる年

和歌山市 山口 三千子

かりの世のことと修羅場もくぐりぬけ  
ジョークだと軽く相手に躲される  
人間のエゴが浮いているシジミ汁  
定年後やっと夫に慣らされる  
屋島寺 貴重な遺品見てまわる

大阪市 津守 柳伸

山葵抜きファミリィで混むまわりずし  
いらっしやい声が度胆を抜く鮮度  
生け簀から海老がウイंकして困る  
休館にあう月曜の城めぐり  
盆梅の街 黒壁に四季を盛る

大阪市 板東 倫子

ファッションもここに極まる膺ルツク  
辛い辛い大根おろしは妻の棘  
まんじゅしやげ老残にまだ妬心あり  
白萩に女犯重ねるファンタジー  
心技体 田村亮子はまだはたち

大阪市 北 勝美

一筋を歩いた道に自負がある  
生涯を借家住いで子に恥じる  
諦めを悟りに変えて老いの幸  
もう慣れて節くれ指が妻介護  
平凡に生きてはすまぬ詩心

大阪市 川端 一步

口あけて電車で眠る戦士たち  
こめかみの皺に梅茶がそつと出る  
失業が働く七十けなりがる  
反抗の孫は脱皮でもがいている  
古本が夫婦ゲンカの種となり

大阪市 上田柳影

冬枯れの街 身の程を知らされる

アパートの鍵だけはいつている財布

良い事がありそう茶柱ぐつと呑む

恩受けし人つきつぎと思う秋

コスモスが揺れる軽い話なら

大阪市 本間満津子

貴女が来るとバツと明るい灯が点る

良い返事してからやる気湧いて来た

先端医療 私絶対お断わり

会ってよかったあとでしみじみ思う人

胸の秋風 酸漿いとし頬よせる

大阪市 玉置英子

余るほどあつても米の輸入義務

薔薇いっぱい心貴族ですごす夜

真実を知らない人の後ろ指

道に迷いいい瀬戸物屋みつつけた

預金する預かり料はまだとらず

堺市 山本半銭

子育ては遠い日のこと夜店の灯

寝そべって親子の会話深くなる

ほほえみも涙も生きて咲いている

潮待ちの港であげるお念仏

老獣が群れを追われる風の音

豊中市 田中正坊

爾靈山 戦いすんで九十年 (旅順)

風雪やヤマトホテルは今もあり (大連)

霧晴れて朝日に映える瑠璃瓦 (瀋陽故宮)

血ぬられし歴史見つめよ記念館 (ハルビン)

悠久の流れたゆたう松花江 (ハルビン)

豊中市 井上直次

試供薬 風邪はひと夜で治りけり

帰りきて旅先の恥語るまじ

高度一万こまかい事はみな忘れ

袖の下重くてリズム狂い出す

あの日からリズム合つて三世代

豊中市 三宅つえ子

諍いをうち捨てて見る宵の月

空蟬の血を騒がせるジャズピアノ

天高く秋の恐さの中にいる

秋の琵琶爪音高く悲を溜めて

車椅子肩に置かれた掌のぬくみ

豊中市 江口明光

天作と言う割算は消えてない

ポチと言う僕が犬とは知らなんだ

老人を助ける音が聞えない

イカの耳つまんで皮をむく料理

親切が他人行儀となる都会

元四平陸軍戦車学校跡を訪ねて

豊中市 湯浅馬洗

追憶よ山川草木語りかけ

入日光背 金色の像仰ぐ

茨木市 堀良江

我武者羅に走った軌道の跡が消え

參觀日派手な母さん恥ずかしい

老兵の視線をたどる基地の兵

母に似たひと連れてくるひとりっ子

楊木林小さな駅に大きい夢

こわかった子どもの頃の仁王さん

振り返りもう一度見る丘の波

謎解けぬままひたひたと来る時効

豊中市 稲葉眞郎

茨木市 島元ふみ

名に似合わず賑やかに咲く彼岸花

故郷を出てから何処も旅心地

煙草止めて宝くじをと言う理屈

人の世の旅の終りのぎょうぎょうし

勇将には補佐の卒なく末あわれ

十年を見ぬ間に枯れた男の背

旅に出て別の生き方に触れて来る

年上の妻の手をひく敬老会

遠火花 極楽の空見るような

デイズニーのコップ病夫の枕もと

吹田市 山本希久子

茨木市 藤井正雄

夫婦茶碗のいと底にある或る不信

兄嫁が里の秘伝で漬けた梅

二人だけの祭りに雀寿司買うて

順番に爪切り回る風呂あがり

祭りすんで夏も男も遠くなる

腐れ縁などと言いつつ友と酌

本当の姿を見たり旅三日

共稼ぎやめる糸口子の寝顔

哀しい歴史見ていた大連の夕陽

いい婿と言うてはいるが飲めぬ酒

吹田市 茂見よ志子

高槻市 井上照子

気配りが徒労に終る世代の差

来し方も未来も愛は君一人

吟行へ再度なつかし舟着場

胡蝶蘭 日なたぼっこの夢の花

人間性 明るい方の輪が膨れ

抜け出そう孤独の殻の戸を開けて

何事も祭りとつけば賑やかし

サハリンもこの満月か出生地

領域は荒せぬ書架は夫の巢

棧橋でまたねは遠い昔です

守口市 森川 まさお

だんじりに去年と同じ人が乗り  
神主の顔を初めて見た祭

蓑虫はやぶれかぶれでぶら下がり

ポケットが空で見るもの美しい

足温器 考え方が甘くなり

寝屋川市 江口 度

何時まで続くか夜に反抗する都会

等間隔にアベックのいる中之島

老妻の寝息確かめテレビ消す

吊皮から早くめくれと覗かれる

葬列へ爆笑続く彼岸花

寝屋川市 平松 かすみ

人生のふしめふしめに亡母憶う

五十年忌 母の肉筆まわし読み

ナツメロはあの日あの頃 父母の顔

わたくしの強い味方は紅の筆

旅の恥かき捨て歩くエキストラ

枚方市 前 たもつ

菊人形仕舞い淀川冬の風

何食わぬ顔でコーヒー飲んでる

面の掌で清水を汲むは無心なり

無防備に蛇口の水を飲んでる

蟻の列 未だにボスを見ていない

枚方市 海老池 洋

マンションの眼下 台風荒れまくり  
残念のあまり真直ぐ歩くカニ

その靴は合わないうちのシンデレラ

猿だつていやな日もある一輪車

潮騒と友の寝息に更ける宿

高石市 浅野 房子

わたしにはできないことをするあなた

ガラス玉とは露知らぬくすり指

怠け癖へ次々とんでくる礫

被害者が加害者となるめぐりあい

ぎっくり腰ここにもあつた蝶番

東大阪市 森下 愛論

イヤホンはシヨパン ラーメン吸ってる

これからは余禄の余生酒の日々

酒豪には終止符なんておまへんな

はみ出して盃が来ぬ軽い飢え

朝酒をミルクのように嚙んで飲み

松原市 小池 しげお

牧水に酌いでもらつた秋の酒

叱つてはならぬ明日でも遅くない

針の山 亡父の話をしてくれる

夏休み終つて川はラムネ色

高い筆ばつかり売れる書道展

松原市 玉置 重人

土砂ぶりの中をクーポン券が行く  
すうどんはネギもカラシもたつぷりと

コーヒーは濃いめ充電しています

イチローの真似できそうもない息子

妻の旅ひっそり食べるゆであずき

藤井寺市 田中 透 太

少年は父の拳に飢えている

ときめいて垂直に竹つ少年よ

正義感 煙が少し目にしみる

空缶の転がる街で生きている

晩成の男もやがて黄昏る

藤井寺市 中島 志 洋

忘年会何度やったら気が済むの

心友と信じ切ってるお人好し

ご鼻眞の招き見惚れる京女

木枯しに飛ばされそうな千鳥足

まあまあ的一年でした晦日そば

岸和田市 寺田 甚 一

ヌーボーは飲まない核が恐いから

いまはもう紫色は見るも嫌

頂点で大過なく済むむつかしさ

食い放題 飲み放題に齡忘れ

朝型の暮しに変えて恙ない

岸和田市 古野 ひで

頂点に立つ欲びと空しさ  
中傷の噂に弁解届かない

残照へ胸熱くなる亡父憶う

ふところの小銭はなさず持つて老い

欠けてゆく月のあわれに魅せられる

岸和田市 島崎 富志子

歴史探訪 夫婦で奈良を二泊する

悪いとこ見つけてもらいに医者へ行く

目をつぶるまでは主婦です米をとぐ

人生のここがお山か下り坂

十二月 今年も無事に日記閉ず

岸和田市 原 さよ子

二つ三つ楽しい秘密持つ夫婦

冗談も言えて気楽な嫁姑

不意うち指名眠気がすつと消え

納得をするまで辞書を引く頑固

昔なら言えぬ言葉がでるも歳

岸和田市 田中文 時

狭心症ニトロ口を入れた首飾り

肝臓にだけは定年来ぬように

天高く閣僚の名も知らぬ秋

陳情の返事タダ酒飲みながら

十二月しこたま酒が這入る月

和泉市 西岡 洛 醉

合掌へ太らせる欲 捨てる欲

大阪府 榎山 隆

凡夫婦たとえ明日は朽ちるとも  
浅漬けを刻む女に邪心無く  
雑草のある日謀反を考える

古都の秋 枕ことはを尋ねゆく  
廃坑へ月は律義に顔を見せ

背骨が少し曲った五十年  
失業者 点々として安定所

健康会すぐに決ったグループ名  
おくやみは語尾に悲しみ溜めている

八尾市 高杉 千歩

年の瀬やホメラレモセズ帰り花  
結び目もたまむしいろに年おくる

引き際を知らぬブライド崖つぶち  
ポンと帯たたき苦情の客へ出る

大阪府 八十田 洞 庵

体中反乱 宇宙遊泳に身を任せ  
幻覚かフオークダンスがまだつづき

一太刀は切らせてもよい勇気持つ  
躪いた石に恩師の声がする

千十円 医者の子で冬に入る

また会おうもう会えぬかも戦友会

八尾市 吉村 一風

花鉄はしゃぐな花が驚くよ

荒波に揉まれた老いの手を洗う

静岡市 安本 晃 授

じやんけんは妻に何度も勝っている

立ち話 番傘似合うこぬか雨

聞き役に回ると酒の味もいい  
雑談のうまい花売り秋に来る

貧乏神と打ち上げ花火見て暮らす  
目覚めたら夢の形がそこにある

富田林市 松本 今日子

雑巾が乾き井戸端茶菓の会

東京都 山口 新子

定年が三人増えて秋祭り

キャベツ満開 十三七つの娘のような

派出所は留守番電話のある所  
はす池に咲けない花が二つ三つ

細胞分裂 父の病巣静止せよ  
救急車網戸を蹴って鳴りやまず

コスモスの影を突き刺す月明り

再会へ女の膝は磨かれる

母の名はまだそのままに標札よ

待ち合わせドアと対角線に座す

町田市 竹内紫鏘

喜寿祝い支えをいなみ壇を降り

撃ちかたも手入れも祖父は知っており

検査待つ病衣と背広となりあい

十年日記に交替 辞書もお疲れで

君見ずや大封筒の底にふみ

仙台市 川村映輝

老人の呼称かえれば倅せか

転ぶから外出止めて老い進む

水涸れた川 寝たきりによく似たり

ノーマント心の中がゆれている

五年前の鉛筆役立つ国勢調査

弘前市 一戸ツネ

鱗いちまい老いの流れを変えました

振り向けば埃だらけの影がいる

津軽よされ朝露夜露 草を刈る

地獄から誘いの便り彼岸花

荒れ寺に徳利と寝てる山頭火

弘前市 蒔苗果林

泣くよりも小鳥の真似の口笛よ

団子より花より紅いりんご愛で

孫娘来ると胡坐の狭い父

名刺にも書けぬ肩書き温かい

徒話 妻としていて気を晴らす

八戸市 島田昭治

頭金打たれたような嫌らしさ

思いやり金で買われぬ有難さ

ここ一番 男そのとき燃えに燃え

癌告知受けた妻だが明るくて

癌の妻 僕にとときき気合かけ

十和田市 小笠原敏人

青い空 記念式典僕も居る

挨拶がピーアールだなどは後のこと

席順で流れが変わる祝賀会

居眠りが講演主催者にも及び

菊人形本物よりも冴えて見え

青森県 諏訪柳々

狸にも人を見る眼があるらしい

くもの糸 何本あるや曼珠沙華

煩惱を千手で包む彼岸花

寝ていても仏頂面は剥がれない

格子戸を遊女の涙朱に染める

砂川市 大橋政良

五十冊積んだ日記の光と影

がたびしの椅子で自慢を聞いている

目の奥で曼珠沙華が咲いている

タバコ臭いストレスを吐く縄のれん

剥がされた鱗のあとが痛ましい

弘前市 小寺花峯

五時からの男が飲んだ白自剃  
まだ軽い石だが僕は持ち続け  
秋刀魚から貰う背骨が丸くなる  
樟脳をまぶした服に雪ちらり

弘前市 岡本花匠

障子貼る刷毛のリズムに父の詩  
ダイエット一膳憾むとろろめし  
さりげない夫婦芝居の愛と憎  
国勢へ無職と書いて夫婦旅

黒石市 相馬一花

積年のライバルが読む名弔辞  
断酒会済んで出かける地酒会  
動物の辞典に鬼の欄はない  
へべれけになるまで吞ませ本音聴く

十和田市 阿部進

スキャンダル盛って売り込む週刊誌  
建前の裏で本音が見えかくれ  
金だしても買えない古希の好奇心  
ああ言えばこう言う倅反抗期

横浜市 菱田満秋

眼が見えてきた悪人が罪を知る  
入院が犬の安否をまですたずね  
同級に医者と坊主と葬儀屋も  
膝頭見ではいけないのが見え

静岡市 渥美弧秀

富士は神 下界はオウム解脱せず  
落書きをゆつくりと読むバス待つ間  
満月だ一杯やろうぜ亡き友よ  
刻も水も流れの中の命哉

静岡県 蘭田猿杵

諍いの後のさんまを焦がしてる  
生涯を律義に生きてお茶が好き  
草を刈る爺よりましな案山子のシャツ  
老骨が出掛ける疲れたとは言わぬ

富山市 島ひかる

花ことばおぼえた遠き恋ごころ  
癖までも魅力にさせる恋の虫  
同じように夫婦茶碗が欠けている  
虹色で白紙に描く明日が来る

富山市 酒井輝

古里に欲しい轍と語る道  
躓いた足跡もある集印帖  
機械より包丁がいい母の味  
占いの凶を逆手に拓く運

羽咋市 三宅ろ亭

真に受けて返した言葉を忘れ得ず  
蕉翁の琴線撫でたこの夕陽  
返り血を浴びてから度胸つく  
留守居して石崎女の小鯛買う

大阪市 清水利武

イヤリング耳ちぎれそう重たそう

亡き父にだんだん似てる後ろ影

布団大鼓 河内の秋をかけまわる

一年が早くて老いの年の暮れ

大阪市 渡部さと美

信心なら星に太陽お月さま

天災人災忘れるものか亥の年を

息子でないと頼めぬ事を息子に頼み

靴修理わたしの心見られそう

大阪市 稲本凡子

秋の夜を満喫してる本の嵩

だんだんと朱に染めてゆく秋の画布

ぬるま湯につかりゆっくりする充電

飛ぶように走って何処へ行くバイク

大阪市 寺井東雲

コスモタワー高さ訓練赤トンボ

コマネチの花嫁姿満点で

階段を昇って社長基礎が出来

御見舞に行つて初めて逢う社長

大阪市 藤田頂留子

十二月の音はガラガラ抽籤器

悪知恵の後ばかり行く捜査班

そうかなの数字にうまくまるめられ

ひたひたの湯ぶねが母の桃源郷

大阪市 大塚節子

鍋持つ手 薄紫に芋茎たく

いとけない命いたたく間引菜よ

薯つぶし父子処女作ハムサラダ

大根がごとこと帰りまつ夜長

大阪市 松尾柳右子

雪合戦やがて本気だ顔に当て

国産の松茸恋し裏長屋

涙まで枯れたか六十路したたかに

若者としんどいけれど良い仲間

大阪市 奥田良子

何もかもカード時代で呆けられず

遠き日の坂ある街を一人行く

年毎に喪中欠礼増す師走

味方とは名だけのことか秘密もれ

大阪市 井上白峰

飛ばされた場所で落着く草の種

袴を脱げば治まる胃の痛み

乾杯の義理を果した紙コップ

幻想の未来へ架ける虹の橋

大阪市 町田達子

故里便 祭囃子も乗せて着き

ポストン美術の至宝など観る小半日

元町の茶房にふっと枯葉聴き

少し勇気を立読みしてる紀伊国屋

大阪市 神夏磯 典子

点と線どう結ばうか欲がある  
老犬は撫でてもらうを待っている  
二三日ひとりになれたら何しよう  
新しい出会い何かを盗みたい

大阪市 小糸 昭子

プロパーは猫を起して愛想言い  
石一つ蹴って波紋が幾つ出来  
しがらみを吹っ切りまた乗る観覧車  
足に靴合せて歩くこれからは

大阪市 大河 未佐子

あの日から遠い地震も気にかかる  
遠くから一番乗りの好きな鳥  
追い越され不埒な訳を考える  
年末の手当要求するポスト

堺市 板尾 岳人

十二月父を探しに母の舟  
靴下が破れています十二月  
神の風大きく吸うて五十鈴川（伊勢内宮）  
島めぐり三島由紀夫と神島と（鳥羽）

堺市 黒田 真砂

父母の愛 満身に受け孫育つ  
さわやかに尽くしボランティア足軽し  
尽くすほど心離れて行く夫婦  
時間忘れ写経の筆のよく進む

堺市 柿花 紀美女

二十一世紀見たくてしつかり生きてます  
多数決でまゐるこわい民主主義  
遮断機の向うの妻は他人めき  
向い風少しとぼけて家族の和

堺市 一瀬 福一

水着あとくつきり秋を翔ぶ女  
八十路から強気弱気が日替りに  
大将とはまち一本つかまされ  
先着の百名様にひっかかる

堺市 近藤 豊子

山の辺の道よりつづく稲の波  
穂すすきの杲然と立つ雨あがり  
九歳の髪ゆたかなり無口なり  
壁に蔦からませたまま売られたり

豊中市 吉田 あずき

椅子二つ今日の角度を考える  
りんどうの開かぬままに母の忌よ  
御開帳 吉祥天も頼染める  
バスデー栗飯さんま松茸汁

豊中市 辻川 慶子

結論はゆっくり出そう秋の雲  
昇降のリフト信じてビルの窓  
カーテンコール足をすくわれないように  
味噌汁の温さがほしい今朝の秋

豊中市 滝北博史

私だけしあわせだったのだろうか

秋彼岸 亡母のおはぎ食べる夢

ヤングパワータだ漂流にあこがれる

初孫が嫁に行くとき泣くつもり

豊中市 月原方郎

長寿より今日の健康願う日々

年金になってもお金貯めている

金惜しみ贈った指輪と知らないで

欠席の理由は孫の運動会

池田市 岡本吉太郎

夫婦でも近くて遠い孤独感

噂する声は低くてよくとおる

初孫のおしめの句こちち良く

ちぐはぐな言葉統けて稼いでる

箕面市 坪田紅葉

自分より人が気になるお人好し

元氣なら歩いてみたい秋の山

友の計にねむれぬひと夜今朝は雨

一人居にもなれてゆっくりに寝る仕度

箕面市 椎江清芳

火事見舞大工一番先に来る

海女の墓 花は岬に向いて咲く

本棚の本の割には知恵がない

味一筋頑固おやじのラーメン屋

吹田市 瀬戸まさよ

宝塚欠かさずに観る夫婦古希

見る秋も味わう秋もまたあした

大学出 明治維新は誰もない

固い口 仕事以外も当てにされ

吹田市 栗谷春子

女郎花よく吾亦紅ひきたたせ

泣きやんだ子はなにしようかと考える

豊葦原のよきつくづく秋の風

八十は八十の皺ごころうさん

寝屋川市 柴田英壬子

いじわるな質問死角から投げる

ピアノシモ夜のしじまの回想譜

ディナーショーなど夢の夢手羽を焼く

ともしびの向こうで昔揺れている

寝屋川市 堀江光子

大阪に大阪城のある安堵

書齋にもカーテン旅に出たらしい

並ばせて缶のドロップくれた祖母

柿を干す頃の故郷を恋しがる

東大阪市 安永暁子

プラス思考で今日も一日いき生きと

記憶力お互い様と言われても

お屋敷林 蟬のぬけがら咲いたよう

まるい背に孫がより添う日和ぼこ

東大阪市 指宿 千枝子

リュック負い気軽に妻は旅に出る

どの旅も帰る家ありありがたし

丸ビルも通天閣も低うなり

六十年自分の音と暮らして

藤井寺市 福元 みのる

訓練は見事にきまる逮捕劇

筆不精どうしが電話では長い

辞典買う古い辞典もよう捨てず

髭蓄える齢になっても漫画本

八尾市 宮崎 シマ子

曲り角へ来ていさぎよくサヨウナラ

背筋のばさな赤いブレザー似合わない

無人売店 午後の野菜は半額に

蹴った石どこまで飛んだ婚約解消

岸和田市 高須賀 金太

髭がないから自画像に髭を描く

人込みを漂流しているのは俺

ぼくを葬る器を飾らないでくれ

心柱 塔の教へのありがたき

岸和田市 芳地 狸村

だんじりの屋根で見得きる子の雄姿

同じ歩で夫婦で生きた五十年

移り気で見たもの欲しい妻の顔

大阪弁で釘を刺してもききません

岸和田市 岩佐 ダン吉

日なたばこ僕によく似た鳩がいる

いいプランなくてとことん歩くだけ

元氣出る言葉母さん探してる

ぼちぼちと僕にもツキがくるだろう

岸和田市 三輪 通彦

指示待ち族の子供に悩む私立小

日本も西部劇並み銃社会

世話焼きも過ぎれば逆に疎まれる

祝辞にも自己PRする議員

岸和田市 井齋 一齋

札束を握り男を棒に振る

念入りの化粧厚目の初デート

特訓の結果本番顎を出す

末席で野次が得意の古参兵

岸和田市 藪野 けい子

熟年の大役つとめる歳となり

だんじりの運営になう年番さん

祭りすぎわっしょいと子が箱を引く

子と別居ゆっくりと風呂老夫婦

河内長野市 井上 喜酔

友情を匂わずだけの縄のれん

良い話 力を入れる膝小僧

旅帰り一息つけば思い出が

衰えた魅力をかバーする色気

河内長野市 植村喜代

金木犀のかけ抜ける風の中  
ほめられて親バカになる俳画展  
たまに出てよかった大阪の空気  
体重が減るかと思う荷物下げ

和泉市 岡井やすお

この月は日本国中秋祭  
新進と自民とで早慶マツチ  
スポーツにうつつを抜かず平和国  
沖繩に平和戻らず五十年

西宮市 西口いわゑ

お土産を待つ者のいて旅もよし  
大皿へ活きいき孫の箸づかい  
こおろぎの一途に胸を打たれてる  
罌雲の中の一つになっている

西宮市 牧淵富喜子

自画像の目と会う疲れどつと出る  
罌雲すこし昏渴きます  
高い樹の姿のままに枯れている  
溜息をつくと夕日が落ちて行く

西宮市 菊池トミエ

法師蟬 鳴きつくしては秋が来る  
季はめぐる更地の隅に彼岸花  
子育てになかった甘さ孫に見せ  
虹たつて見知らぬ人にはほえまれ

西宮市 秋元てる

お隣の明るい声に雨戸繰る  
切り結ぶ気力を溜めて受診する  
諦めた頃やって来るにいい人  
婆育ちと言わせぬ自信ありません

西宮市 山本義子

アキアカネ何処からこの旅日記  
瓦礫街も秋には秋の彩ありぬ  
弓削の句碑ほろほろ歩く丘のうえ  
あまり角の取れるのもまた心配で

宝塚市 吉田笑女

入院して早々部屋の蚊にさされ  
晩秋の虫もか細い声でなく  
採血の看護婦さんの上手下手  
退院してひとり暮しが身に沁みる

宝塚市 中田純次

念ずれば遠くにおわす亡母の声  
老いぬればいよいよつる旅心  
贅沢な旅はしたいと思わない  
拍手には思い思いの色がある

宝塚市 嵯峨根保子

雑音を聞かぬ振りしているお猿  
見えぬ目に音から醒めて行く麻酔  
秋天を見て忘れよう些事細細  
秋蝶に重ねてもみるわが余生

伊丹市 小熊江美

心まで貧しくしない詩を作る

役得はなくて御祝儀出すばかり

こだわりを許してしまふ丸い月

満月に誘われ犬を供に連れ

川西市 氏林洋敏

万歩計秋のコースを知っている

日曜日隣もピアノ弾いている

タクシーに一人で乗ったことがない

宝くじ拾うがみんな外れてる

川西市 松本ただし

鯛焼きの尻尾あたりの椅子の位置

限界を知ってたゆまぬ亀の足

九官鳥にだけは本音を洩らしとく

犬猿の頭を撫でた桃太郎

京都市 山海友熙

京茶漬でもと言えない高値呼ぶ

夫唱婦随リードしあつて亀どちら

賀状書く誠心一途に幸祈る

息抜きのコーヒタイムで視点変え

大和郡山市 坊農柳弘

まん丸い目によく似た君の笑み

その容姿 母が躰の花小紋

戦友眠る丘コスモスの花盛り

万葉路 秋有終の旅心

大和高田市 岸本豊平次

道を聞く人にも出合わぬ過疎の村

やまとからなにわに峠を越す出動

ベッドタウンまだ野の花が摘める道

袋小路に住んで絆が強くなり

天理市 飯田昇

醗酵の泡の色香に酔う杜氏

片言の孫に早やばや自尊心

華やいだ夫婦の裏にある渴き

終電の椅子に男の悲哀見る

奈良県 長谷川春蘭

老人はよろず控えめ木の実降る

むしばめる柿の葉美し余生とや

葛餅の好きが絆か老夫婦

手の鳴る方へ動いた悔いが何時までも

和歌山市 細川稚代

十人十彩つかず離れずきた仲間

気まぐれに肩を叩いてゆく時雨

中傷か好意か波紋投げてくる

明るくてやがて哀しいゴッホの絵

和歌山市 堀畑靖子

お祭りが続いた恋も冷めて秋

目標へ走る油をつぎ足して

山ほどの未練を流す雨よ降れ

裏側は見せぬ月です女です

和歌山市 北山好笑

コスモスと慕情が風に揺れている

夢でよい極楽浄土見てきたい

酔うほどに夢の積木が増えていく

油断して足が踏絵の上にある

和歌山市 玉井豊太

母は娘にこれも詰めれば入るやろ

嫁った子もそろそろ油切れる頃

秋の鹿よびこの笛をじつと聞く

待合室じかんと埋める本がある

和歌山市 桜井千秀

チャホヤとされて身構えてしまう

どっぷりとつかると溺れないだろう

道草が教えてくれた道の味

みすみすの損は知りつつ退けぬ

和歌山市 田中みね

よさないかそんな話をこの席で

しとやかにと思う矢先の高笑い

今も昔も思う子のこと親のこと

上昇気流に乗って自適の奴風

和歌山市 榎原公子

今私夫在宅ストレス症候群

内股の靴がようやく走り出す

左右上下眺め上手に歩かんか

切れ味がシャープ遠巻きにされている

和歌山市 岩本美智子

夕焼けをぎつしりつめた烏瓜

秋霖の墨絵を描く片男波

秋深し読みかえしてる夜と霧

幾重にも哀かさなつて海昏れる

海南市 三宅保州

妥協した玉虫色は光らない

生きのびて貴様も俺も好々爺

お祭りの寄附はたいそうはずむ祖父

廃校の記事が小さく出た母校

和歌山県 西口忠雄

ハネムーン記念に植える実のなる木

あんたならどうする向うは狸だよ

まだ青いお尻がうたう恋のうた

ごじゃごじゃというても妻はいいもんだ

和歌山県 小倉アサ

お薄一服萩焼きだけは裏切らぬ

小菊なら対話出来そう苗植える

涙ひと筋愛の構図が動きだす

用済みの案山子が耐えている大地

岡山市 花田たけ志

痛いところ叩けば鈍先向きを変え

好き嫌い己を知らぬ傲慢か

ささやかに孫子の接待年金で

戦争の仕業にあえぐ五十年

他人様の侍せ妬む菜指

愛情の滲みで論す母の筆

港町 私を繋ぐゆりかもめ

もう一度鏡を開けるイヤリング

岡山県 岩道博友

丁寧な郵便配達 今日には無い

忠告を倍に薄めてしか言えず

能力の違い薬でも買うか

点滴が止つても寝を続け

岡山県 池田半仙

睡眠に飲んでる酒に味がない

現代っ子見向きもしない柿や栗

カナカナ蟬 今年の最後かも知れず

八十四 明治も遠くなりました

広島市 森田文

芙蓉散る白い産毛をまだ残し

空の青 川音だけの里をゆく

こっそりと無料バス券見せてくれ

黄菊や下旬の月は寂しすぎ

竹原市 時広一路

短編が二つ多忙な日が暮れる

この地ならまだ生きられますと鷺が二羽

表示してあるから知った再生紙

人並に生きる小さな物差しして

還暦の風は故郷恋しがる

山頭火にほれ山頭火には成れず

爽やかな忍者を気取る秋の雲

正確な時を刻んでいるオモチャ

広島県 田村新造

嘘に嘘重ね脱走ひた隠し(興安鎮逃亡記)

免疫でいのち拾いをしたチフス

また減って戦友の墓穴三つ掘り

三百が逃げ三人になる末路

鳥取市 小谷美ツ千

木守り柿 何を聴いても驚かぬ

草笛よ男の腕より覚める

上弦の月よ淋しい男の長電話

塩壺を満たして母の役終える

鳥取市 西村黙光

腹切つて麻酔の威力思い知る(ヘルニアで入院手術)

十日目だ酒やたばこもお墨付き

久しぶり他人行儀な妻の酌

飲むことを考えながら治療受け

鳥取市 武田帆雀

菊の出来不出来を敵が視て帰る

菊の会 絵の塾 秋の日程表

正論を吐くなら前に席がある

悪友も家じゃ静かなお爺さん

鳥取市 前田 一枝

思いでのことは時々ころがして

米子市 木村 富美子

運命か幼馴染みと橋渡る  
貧乏もたえて今ではなつかしい

薄くても厚い情けがつめてある

けちけちと貯めてえんまに笑われる

命綱あずけて夫を信じ切る  
薬局の近くで棚に置き薬

たたかれて雨に打たれて草の丈

鳥取市 美田 旋風

趣味の会 虫を殺して和を図る

目減りしたへそくり旅を遠ざける

年老いた母をいじめる炊飯器

あの齢でまだフグの味知らぬとは

一泡を吹かせたいのが二三人  
保護色を忘れて騒ぐカメレオン

不肖の親子ほめてけなして皆元氣

それなりのいい友だちに涙する

倉吉市 最上 和枝

顔よりも中身が総て嫁選び

忘れ傘みんな名前が書いてない

死ぬ前にわたし戒名選んどく

口笛のとうさん今日はいいい機嫌

コスモスの巾いを出す風のあと  
夢の中 母は笑っているばかり

犬かきで必死に渦を抜けだした

消し壺が今日も大きな欠伸する

倉吉市 松本 よしえ

薬ばくばく水をごくごく日に三度

あいうえお順に名刺を束ねとく

肩パット外して母の顔になる

逆コース行けば意外と日が当る

倒れた位置に華やいでみせるコスモス  
飛翔への夢 草の実はセーターに

覧てのちの気付けば我をいとおしんでる(人間国宝伝統  
工芸展を覧る)

美術館出て眺める堀の藻も模様

倉吉市 野口 節子

雑魚の歯ぎしり議事堂まではとどかない

裏切りが許せぬ心貧しゆうて

気に入らぬ十二単のエビフライ

秋の風 亡母の袂が懐かしい

お土産に砂丘の砂も持ち帰る

頼られて老樹仲々太れない

宮内庁の花器 菊が叙勲によく似合う

二三日泊れと入院させられた

米子市 菅井 とも子

米子市 白根ふみ

住みなれた場所で方位のこと言わぬ

ボンジュールながいパンの袋には

饒舌はいま無駄になるVサイン

会うているあいだは好さに気づかない

米子市 茂理高代

天高し亡母の教えが蘇る

母さんへ泣くことだけは卒業す

病んでから自分が見えて来た鏡

転ぶなと娘の手は何時も温かい

鳥取県 羽津川公乃

筋萎縮の友と命の話する

夜店から集団移住した金魚

飛行機に三回 遺書も三度書く

孫の持つ募金箱まで足伸ばす

鳥取県 乾喜与志

恋しくてかける電話が通じない

若返る歯が頬を噛み舌をかみ

温泉で朝の髭剃る果報者

大事なことがうなずけるまで死ぬ

鳥取県 太田幸枝

今疼く子等の噛った古希の脛

美人だが色気が無くて味気無い

まん円い地球の中で今日も生き

失恋の痛みがどつと胃にたまる

鳥取県 西川和子

あの日から足が後ろを向きたがる

顔の色隠すメイクが濃くなる

行き違いその根が深くなるばかり

その時が知りたいアルバムの余白

鳥取県 幸家単車

空っぽの頭に鈴を入れてやる

神様のお告げショックで呆けている

愛情のかけら集めて生きのびる

お見事な嘘で難問乗り越えた

鳥取県 田村きみ子

孫六人 初めて揃ういい祭り

しっかりと仏に絶る手を洗う

バイオリズム七十歳の山登り

心配無用 金は残して死にません

鳥取県 津村八重子

また明日に夢があるからがんばるぞ

寒いから大きな帽子のせて出る

犬の遠吠えそろそろ月ものぼる頃

ありたけの力で登る老いの坂

鳥取県 乾隆風

知らぬ間に子宝抱いていたむすめ

ふたありに山芋を擦る老母心

自慢にはならぬせんそう話する

それとなく仕度をさせる曼珠沙華

鳥取県 上田 俊路

振り仰ぐ月に明日の首尾を聞く

後継がぬことを案山子は知っていた

責任のない手拍子はよく響く

スランプが続き目薬よくしみる

出雲市 富田 蘭水

遅れない時計が私をまたせかす

フルムーン目にうつる物みなきれ

限定の言葉に弱い本の虫

世の変事 近頃みみを覆っている

出雲市 岸 桂子

菊の花日本の秋を誇張する

自伝に運もあつたと書いておく

世渡りが上手で独楽も良く回る

俄雨わたしの恋に似てわびし

出雲市 板垣 夢酔

一年の小言終いか除夜の鐘

雪止んで斬られるような月が出る

五番線スキーの客の行くホーム

酔いどれを影がささえて連れ帰る

出雲市 伊藤 寿美

出過ぎたが一途な杭で打たれない

機に敏な男着こなすリバーシブル

フランスワイン飲まぬと気焰上げる酒  
転勤の子の街ルーペで探す地図

出雲市 石倉 芙佐子

杜鵑草なみだの半宿す花

引出しを幾つも持って化粧する

神様と思わぬ所で鉢合せ

神々にあの手この手とお持て成し

出雲市 竹治 ちかし

台所立てば所作まで妻に似る

ユーターンせぬかと秋の風が問う

人が居るところでは少し背伸びする

妻の音 私の音もして我が家

出雲市 小玉 満江

野仏の肩でカマキリひと休み

片想い桃は待ってる誘い舟

そろばんを無視した値段と書いてある

赤い羽根みんな笑顔の奉仕員

島根県 佐々木 鳳笙

飛ばしたい日もある胸の伝書鳩

海亀のその後は知らぬ桜貝

揚羽蝶 元の姿は描くまい

CMに出る吉宗は腰を振り

島根県 石飛 水煙

定退に妻の顔色打診する

年金が貰える政治だけは誉め

夏海静かに秋へ変りゆく  
酒呑みの心情屋台が招いてる

香川県 木村 あきら

円高もお構いなしに師走くる  
サロンパス貼って農夫は老けてゆく  
刃こぼれの痛み他人に伏せて置く  
老兵は死なず毒舌吐いている

香川県 工藤 吟笑

千円の会費くらは呑んでくる  
転んでも何か摺んで起きてくる  
住みついた猫から愛を感じとる  
バアさんを誘いゲートボールへ今日も行く

香川県 成重 放任

苦を背負うために生まれて来たような  
母さんの手料理に勝つ馳走なし  
傍にいて遠いあなたの胸の内  
月下美人うたた寝の間に咲いて終え

香川県 山地 マツエ

咲きたれて萩が掃いてる風の駅  
れんこんの穴の向こうにある浄土  
車イス大地踏み日に耐えている  
歳月はいいな絆をまき戻す

香川県 新川 マサエ

入院で柳誌を友に励まされ  
消灯のナースの声に友は去に  
明日を信じ今をふみ切る手術台  
病棟の松の向うは瀬戸の海

西条市 片上 明水

お遍路に恵む財布の銭を選る  
薬草を軒に吊るすと山に雪  
お神輿の通る幅だけ草を刈る  
赤提灯ともると人の替わる街

今治市 越智 一水

孫といてよけいなことを孫が言う  
心無罪礙そんな心で米をとぐ  
水飲んで仏拝めば清々し  
石ひとつ草一本にあるいのち

今治市 矢野 佳雲

今朝名士が逝って隣に子が生まれ  
できすぎた男へ女あくびする  
慣れ切った口ポット手抜き考へる  
竹籠の裸を菊師抱きかかえ

高知県 赤川 菊野

も一人の自分探しにパスポート(満州の旅 三句)  
サルビアと赤い夕日に迎えられ  
地平線赤い夕日を抱き込み  
若さとはミニもロングもよく似合い

北九州市 梅田 宣司

導火線に火をつけ鬼はしらん顔  
なるほどとうなずくだけの人となる  
救急車に道あけてやる霊柩車  
友情の不思議を妻もわかりかけ

# 大空の、、、ろ

(59)

橘 高 薫 風

この年の秋の頃『川柳雑誌』では麻生路郎の「五七五の翻訳」福田山雨楼の「柳俳無差別論を排す」など、各時代に幾度も論じられたエッセイが掲載され読者を啓発してくれが、山本丹路の「危惧一つ」と題する一文の要旨を取り上げてみる。丹路は、

「作品の批評を方法論から見ても、大きっぱに印象批評と科学的批評とに分かつ時、今日の川柳界に最も易々といわれているのは印象批評で、評者自身からは純粹なる印象批評でなく、潜在する科学批評に立脚する印象批評なのであろうが、科学的批評が「潜在」する限り、科学的批評の本質から、左様な言葉は通用しないのである。私がここに提出した所は、かかる印象批評が、批評される者に、或は第三者としての読者に何となく物足りないうといふ余りに自然発生的な不満と疑問に出現する。」と言ひ、いささか難解な表現で論を導く。論旨を分かりやすく書くと、

「柳誌に並んだ句を評者が批評するのは己が個性、己が主観をそれぞれの句の作者の

個性をかりて表白することに止まり、批評と言ふより感想に近い。批評家側の「感じ方」

「立場」「主観」が如何にあるか、に興味を転換集注してしまふ。これは正当か」と言ひ、更に「しばしば句の持つ素材、技巧、形式等々の相互作用の分析、検討をおろそかにして、一足とびに批評の対象を、「句が放散する空気」に求めがちになる。私たちが新しい

正当な川柳詩を標榜しながら、相変らず同じ処をつろついでいやしいか、詩に似て詩に非ざるものを製造していやしいか、という不安を一掃するためにも、この印象批評ではあきたらない。「句が放散する空気」には、必ずや選択された素材があり、素材にふさわしい主観的な技巧、緊密な形式と韻律がある。

これらが如何に構成されているかを検討するとき、始めて正当な批評を生み、発展向上への指針が与えられる」と述べて、最後に、  
——人は建築の足場なんか用のないことをよく知っている。それなのに僕たち建築家は足場なしに何も作れない 北園克衛

この言葉で締めくくっている。つまりは句評というものは評者の好悪の感情による印象批評では進歩はなく、科学的批評、冷静で客観的批評に発展の大道を求めていると思え、一つの見識を感じる。

一月に創刊十周年記念特集号の出た年であったが、路郎は記念大会にも出席出来ず病臥の身であった。小句会には出席出句の報が出ているものの少ない。七月十二日木村半文銭句集発刊句会があった。席上での路郎の句。

裸の外にうらやまれるものを持たず

木村半文銭 選

膳に左して子の頭子の頭

川上 日車 選

その他の句会題詠作。

伊達巻の汚れ年子が二三人

笑わぬ父に恩給がつき

奥さんと女将肝胆相照らし

天才か癩癩持ちかと思ひしに

光頭会創立句会というのが目につく。今年の最後を明るくという意味で引用する。

禿け頭つるりと撫でて偕てと言ひ 禿 山

若禿と言われて金を貯めてる 白柳子

禿げている方がはるかにもっている 里十九

禿げ具合だけは金持らしく見え 豆 秋

兼題は永久に「禿」という会も珍らしい。

# 自選集

小西雄々

大山にぶつかりながら雲流れ  
過去帳の中味にあった忍一字  
人情が若者の胃に届かない  
繭の中でも仏の慈悲を忘れない  
逆転へ笑い袋の封を切る

藤村 女

友情は素顔のまま逢いに来る  
おしゃれして花の素顔に負けている  
逝く女の素顔へ念を入れる紅  
男はん泣かせた素顔色あせる  
素顔になって乳ふくませる夜の蝶

藤井明朗

年ひとつ重ね幸せ振り返る  
不況日本の最悪の年送る  
秋が好き味覚いっぱい溜めてある  
秋深む柿の渋取り亡母憶う  
平成八年明るい年を祈る乾杯

辻白溪子

アドレスを書いて大事に持つ手帳  
定年後手帳は持たぬことにする  
背伸びして子の体育を撮るビデオ  
島を出る女化粧をまだ知らず  
婦人用売場へ夫連れてくる

工藤甲吉

面の皮 支持率などは考えず  
台風へりんごどころが落ち着かず  
北国の閏八月雪が降る  
名月や津軽山唄透きとおる  
世の中に半分飽きている余生

児島与呂志

今もまだ迷いながらの寝正月  
裁ち鋏 女の心が意地を断つ  
戦陣訓 悩みまるめて生き続け  
十二月追いつめられてる金がない  
気がかりのまんまで笑う日々平和

久家代仕男

まなじりが尖ると理性疎くなる  
晩秋の炭火いとしや秋刀魚焼く  
鳩尾が痛む子のこと妻のこと  
ゆつたりと鬨志はオブラートに包む  
橋ひとつへだて賑わう祭り笛

黒川紫香

母さんが運動会で走ってる  
噫枯野カラスが一羽鳴いたきり  
ドアを開けるとみんなこつち向く  
パチンコが出過ぎて少しうろたえる  
山のホテルで真つ白いシエフの帽子

八木千代

隠れ宿のやさしさに似て秋の天  
黒を多く着る美しい空の下  
祭り月なのに喪服を吊っている  
白萩が散るお祭りのあとさきには  
はらはらと萩はらはらと旅路かな

正本水客

負け犬の目と眼が合わないようにする  
花を買う後ろ姿を見て通る  
働き蜂は一生働き蜂でない  
風向きを知ってる妻の目と思う  
生け蟹という蟹の泡見ていたり

波多野五楽庵

雪を見た日から底無し沼になる  
生々流転 埋み火そつと抱きしめる  
男結びの癖がとれない妻の謎  
お祭りがすむと柿の木坂になる  
今生の旅にすぎたる妻があり

小林由多香

信じたくない噂にも耳が向く  
苦笑いだけで終ったかすり傷  
抜け目なく電報打つて名をつなぐ  
栄転の噂がうわさだけで消え  
へそくりが溜つた笑い見せられぬ

金井文秋

老いを生き抜く根性を磨かねば  
タクトないけれど規律のある暮し  
晩年はまだと八十路のご冗談  
男なんか蹴散らされそうギャル神輿  
冷めた蛸焼きのように魅力のないお方

有働芳仙

反抗の色が笑顔のそこに見え  
白票の裏に沈んでいる抗議  
許し合う握手に明日が見えてくる  
君だけが頼りと言ったのを忘れ  
背の子の知恵で大人の謎が解け

西田柳宏子

いい親父とても頑固ではにかみ屋  
不満などないと尖った顔で言う  
お世辞真に受けてじっくり腰を据え  
ゆつくりとさせてはくれぬ孫台風  
結び目に老母のぬくもり宅急便

遠山可住

おもわくが違うてばあさんと二人  
地方紙の隅に小さく父が死ぬ  
百ぐらいと思うた足が動かない  
頼りない部下でこだまが還るのみ  
家計簿をなだめなだめてのし袋

奥谷弘朗

玄関に今日来る客の好きな花  
飲み会となると弾んで困ります  
辻褄を合わすやりくり別に持ち  
級友に点取り虫がいて白け  
人柄はお人好しだけかも知れん

松川杜的

鯛雲また一人減る住所録  
あの日からリュックはちゃんと枕元  
お地藏さまも一人 私もひとりぽち  
夢は未だ捨てぬ五つのペンネーム  
マン画にはマン画の世界ラムネ色

野田素身郎

幼児語でしきりにあやす幼妻  
爺ちゃんは留守番というプラン立て  
他人からみれば解せない悩みごと  
寝たきりの母 時計の針を見て過ごし  
引き際がきれいな裏には何かある

恒松叮紅

自惚れた筆が時々謀反する  
約束をうっかり忘れワンカップ  
舌先に溶けて和菓子へいい話  
一合で音痴の父の安来節  
下戸だけど話そらさぬウーロン茶

月原宵明

反骨の弟子に親方期待する  
出世せぬ同士止り木仲がよい  
畜生を忘れて盲導犬不憫  
考えと別に小さい方を取る  
音立ててうどん食う人憎めない

小出智子

友だちみたいになって旅はつづく  
秋が来たから口紅を買った  
腕組みをすると独りに違いない  
一緒に暮らそうと言ってくれる 秋  
心配をしてくれるから寂しくなる

高杉鬼遊

老人が恋をしたっていいじゃない

十七条五項のCにごまかされ

サーカスが来るので悪い子はする

吉宗のドラマに狂う妻の恋

蜘蛛の巣にかかってクモが死んでいる

橘高薫風

仰天の写楽の首絵友危篤

夕日も月も飴玉だった里の森

秋風の吾妻言問秋の橋

思いい出をつついでうましどぜう鍋

七五三晴着きた手をつながせず

### 川柳塔 (追加)

堺市中野樺子

孫思う成長見たい命欲し

朝夕の冷え山に錦を着せてゆく

好きな彩おしゃれに活かす三つ四つ

倉吉市 米田幸子

フルコースだけでは虫がおさまらぬ

六道の辻でコースを間違えた

温もりの伝わる距離に席は取る

鳥取県 黒田くに子

日だまりで心のうつをぬぎ捨てる

遅咲きの花も身ごもる日の安堵  
墓洗う亡夫がにっこりしたようだ

秋田県 湊 修水

天高く銀行屋だけ肥やす秋  
雨あがりコンパインの音うれしそっ

手料理に小さい秋をしのばせる

## 川柳塔碑合祀法要

本年度物故者の川柳塔碑

への合祀法要は、秋晴れの

11月4日、遺族21名・川柳

塔社から27名、計48名の参

加により行われた。

大阪からのバス組は午前

9時、阿倍野橋を出発、予

定どおり高野山一ノ橋観光

センターに着き、大霊園で

和歌山はじめ直行組と合流

し、午後1時過ぎから法要

が始まった。

橘高薫風主幹のあいさつ

の後、導師の高井霊園長が

合祀者11名の名前を読み上

げて読経する中、西尾菜名

誉主幹ご遺族はじめ全参列

者が焼香し、遺族代表の謝

辞があつて合祀法要はとど

こおりなく終了した。

今回の参加遺族は、西尾

菜、広井すえお、植村客遊

子、高橋千万子、保西岳詩、

岡田ふみ、村田善保、大矢

十郎、西森花村で浜本義美、



## 中島国夫

東野 大八

「大正5年秋、富山平野の南部、飛驒街道に近い大沢野尋常小学校へ、下駄ばきの壮士風の白地に黒縞の入った袴をつけた青年が『準教員二任ズ』とある辞令を持ってたずねてきた。早速教員室に迎えられて部屋の末席を与えられた白面の青年は、校長から三年生担任を命ぜられた。

『俺は人の前や子供達を集めて、話をするのが好きだ』

『おれは、小学生の時、先生がやったとおりにやる』

と言っただけに、仲間の先生たちに、彼の授業ぶりは好評で、はじめにしてはうまいもんだとほめられた。月給は八円。

授業中、若いこの先生は気まぐれで

『今日はこちらまでにして後はおとき話だ』

と、当時評判だった鈴木三重吉編集の『赤い鳥』の童話誌をとり出して読んできかせ、時には、その中の『歌を忘れたカナリヤ』に自作の曲をつけてオルガンを弾き、子供たちに歌わせて喜んでいた。それだけに子供たちのうけは上々だった。

彼はこの学校の卒業生で、高等科を卒業すると、尋常小学校教員検定試験に合格、そのままめでたく母校の教員に成りすました訳。

しかし21歳の適齢で、徴兵検査を受け甲種合格、金沢工兵第九大隊に入営する。入営の当日は、仲間の女学校出の準教員M嬢の引率で、子供たちが大勢で見送りにきてくれた。

このM嬢は、父の初恋の人だったらしい（中島太刀夫『先生と呼ばれた頃の父について』）

国夫の戸籍名は国雄、明治32年10月15日富

山県上新川郡大沢野に生れる。出生地の小学校の訓導の頃から壺児の筆名で新短歌なるものを作っていたが、大正15年シベリア出兵の体験をなめた兵役を終るや、『大正川柳』から『川柳人』と改題したばかりの井上剣花坊と上京して出会い、昭和2年から同誌の編集専任者となり、剣花坊在世中の昭和9年まで川柳人編集長で貢献した。この間、『川柳と自由』なるリーフを発刊したが、昭和20年6月召集されて第三陸軍技術研究所福島県喜多分室長となり、将校の軍服でさかんに剣花坊譲りの新川柳を発表した。

。進軍ラッパの眩しい錯覚

。からくりを知らぬ軍歌が勇ましい

。生きて帰れと言わせぬ様に旗の波

この不遜の軍人も、広島・長崎の原爆の一発すつて敗戦、焼土へ素裸で除隊。

。あめりかの素顔が、つるぎのこ雲

。銃口につけねらわれる派手な一生

。核の傘日本の犬が走り込み

敗戦とともに、生国の富山に居つき、しがないサラリーマンを続けるうちにも、『川柳人』の編集を富山にあっても担当し続けた。

国夫晩年を飾る柳歴の華は、昭和43年8月、東京銀座ヤマト画廊での個展『魔の詩川柳展』である。当日来場者に頒布したその小冊

子は、自装作品60点の、いわば彼生涯の句集と呼ぶにふさわしい。以下その抄録。

「作者のことは、中島国夫―目がさめたら甲虫に変身していたのは悲しい小説である。ある日朝目がさめると私は川柳人になっていった。これも悲しいことにちがいない。」

詩人が来て、川柳という卑俗なものは短冊にも色紙にも書けないものだという。そこで私は、短冊にも色紙にも書ける川柳だけ作ろうと思いついた。紙に書いて部屋にぶら下げていると、悪友が来て展覧会をやれという。人生が冒険なら川柳の旅にもそれがあろう。よし二丁やつたろという気も湧くというもの。聞く・読む他の見る川柳があつてもいい。一冊の句集を出す力はないが、一室の句集なら作れもする。甲虫が人間に戻った小説はまだ読んでいないが、一匹の虫から、人間が眺められているのを知らない人がある。芥川竜之助が居たら言うかもしれない『川柳という甲虫の軽蔑すべからざる所以である』と一

ついでに「あとがき」も再録しよう。

「中島国夫は、現代川柳史上、その革新側の旗手として、新鮮な作品とさらに多くの俊英を集めて育ててきた。具体的に言えば、井上剣花坊の柳柳寺川柳会及び機関誌『川柳人』の編集と演出のタクトを振っていたことだ。

自由律川柳もプロレタリア川柳もみな彼の指導の線に生れたこと勿論である。

わたしは憶えている。昼は陸軍技術本部の将校であつた彼のがやく参謀肩章のさつそうぶりと、彼の絶唱というべき作品、<sup>カ</sup>らくりを知らぬ軍歌、<sup>カ</sup>や、進軍ラッパの眩しい錯覚、<sup>カ</sup>を生んだことと、高円寺喫茶店アミイの集りにやつてきた黒い背広とネクタイのアナキスチックな彼の風貌を……

そして古く『芸術と自由』創刊以来の同人として、新短歌史の上にも輝かしい業績を果してきたことを特筆しなければならぬ(発起人 尾村馬人)

同誌の作品の主なるもの次のとおり。

貧乏に一番近い天の河

国夫

骨壺に入れきれない労働歌

〃

立ち枯れの稲で編まれるむしろ旗

〃

この『魔の川柳詩展』のあと、体調をくずし、昭和45年12月5日胃がんで死去。

『川柳人』第四七三三号『昭和46年7月号』

は中島国雄追悼号で、彼が同誌編集長時代の友人知己数多が、それぞれ悼文を寄せているが、その中からの以下要約。

「中島国夫が一冊の句集を出す力はないが、一室の句集なら作れもする」といった趣旨で、自作自装の『魔の川柳詩展』のあと、

このお祭りのすんだ後に

また逢うかどうか燕とかがねと

の句を私に残し、郷里富山へ風のように帰つていった彼。

ふるさとと味はいろいろの火で煮出し

この彼のふるさと富山の句は、あの小冊子の中で至極印象的であつた。大正13年上京を機に『芸術と自由』に参加、終刊のあと、私達と系列の主情派を起し、戦後、『芸術と自由』再刊の産婆役で活躍、晩年まで新短歌史上にも大きな足跡を残した彼だが、その魂の帰るところは川柳だったのだ(穂曾谷秀雄 悼文)

「剣花坊先生も信子奥様も歩いて十分の私の家へよくお出で下さいました。剣花坊先生はいつも大きなセルの前掛に手拭いを腰にブラ下げ、夫とひざつき合わせ口角泡を飛ばすというか、奥さん、国夫はあれでなかなかがんばってねえ、ワッハ……。信子奥さまとはよくウマがあい、話し込めば何日でもというふうでした。病床に伏しては、なんでもそうか、そうかのやさしい夫でした。臨終句、今生の名残りに妻を母と呼び、は涙、涙でした」(中島輝子)

▼次号は「西尾 菜」

# 柳籠裏三篇研究 (二十七～二十八丁)

鈴木・岡田 同。

二十八丁

七久保博・岩田秀行・紀内恒久

西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗

佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

362 されば組にはかまふなど正燈寺 雨譚

七久保 〓 「されば組」とは、正燈寺きりて吉原に繰り込まぬ連中を指したもので、紅葉を売る連中と対比させた語でしょう。

川柳には非常に多い句の一つで正燈寺はかこつけの口実利用された。「されば組」の仲間に入聲や女房をもらったばかりの男共である。

ねい／＼と四五人帰る正燈寺 一―13

左様をハ紅葉あたりて迷子にし 拾六25

入聲ハお慈悲／＼と正燈寺 傍三36

岩田 〓 「されば、これにて失礼」というのを「されば組」と言ったのであろう。

西原 〓 「去れば組」の洒落も。

佐藤 〓 「されば組は岩田説のとおり。旗本

奴に「よしや組」というのがあったので、「されば組」の洒落が生きているのであろう。

鈴木・岡田 〓 賛。

363 正燈寺伊せやの首へ縄をつけ 芹丈

七久保 〓 前出と同様の句で、正燈寺きりで帰ろうとする客番家の伊勢屋を吉原へと強引につれて行くこととする趣向の句で、「首に縄」の表現がおもしろい。「行けよ」「いかないよ」の問答の末である。

松洞寺一トけんくわして行くところ

明五松一

西原 〓 賛。逃げようとするのを逃がさないのである。

364 兄さんといふなどしかるい、名付ヶ高砂

岩田 〓 「三つちがひの兄さんと言うてくらしてゐる内に」とは、「壺坂」のさわりであるが、許嫁はこの例の如く、従兄妹同士とか、あるいは親戚同士近所同士等というのが案外多いものであろう。幼い時から一緒に遊んで育つ。小さい間は「兄さん」でもよいが、年頃になるとそうはゆかない。これまでの家族同様な精神的愛情が、やがて世の男女関係へと移り変わろうという、まさに価値の変革期である。

い、名付今でハ中がわるひよう 傍二一  
等は、この間の事情を語ってなお余りあるものがある。主題句の「しかる」というのも、単に「気分が出ない」といってしまつては、とり落したものが大きすぎる。この価値の変転に対する微妙な精神の苦悩をも読みとらねばなるまい。

西原 〓 賛。幼児のうちからきめられていたの  
で、恋愛気分もつすかろう。

色事のけもないうちにい、名付 二三三  
可愛くも憎くもないとい、名付 安四鶴五  
鈴木・岡田 同。

365 大あばた何シのくもなく甘チナリ 五秀

岩田 別に醜女だからと言って厄が逃れられるものでもないが、天折はやはり美女にふさわしい。一種の誇張的言辞の面白味である。  
本句は天明六年五月廿八日開であるが、これをふまえたかと思われるものに、

大あばたこんどもくなく三十四 天六仁二  
がある。

西原 贊、美人薄命が基調。「あばた」については、「日本国語大辞典」に、

持参金あばた多少にわりがあり 八三八  
を挙げている。さらに、語源のうちで、武田信玄の家臣小幡某が極めて痘痕の多い容貌であったという。ヲハタでは差支えがあるので、アバタといい習わしたという(「両京俚言考」)もおもしろい。

佐藤 美人薄命が基調というよりは、女の厄年を踏まえた句というべきであろう。十九、三十三は女の厄年、重い疱瘡にかかったが、どうにかそれを切り抜け、二十歳になったものの、同時に大じゃもになってしまったとい

うのである。礎稿の参考句の方は三十三の厄年を踏まえた句である。

八木 だいたい前説賛だが、大あばたになつたのは十九歳ではなく、十九歳以前であり、すでに大あばたの女なので美人薄命の反対で、というのであろう。参考句の、「今度も苦なくでも分かるように、女は十九歳の方が大厄であらう。「十九歳で重い疱瘡にかかった」とすると「何の苦もなく」が少し変になるように思いますが。

七久保 佐藤説に賛

心地例ならぬ十有九の娘 安六・五五

鈴木 小生は八木氏と同じく十九の厄前に大あばたの娘と解したい。だから「何んのくもなく」である。

岡田 同。

366 しやくり上ケく能イ方ウを取り 中葉

岩田 かつみ分け。本当につらいのは肉親だけである。  
なきくもよい方をとるかたみわけ

涙はらつてね廻すかたみ分け 一七四  
泣なからまなこをくばるかたみわけ 一四三六

西原 贊、人の欲おそるべし。

かたみわけはじめて嫁の欲が知れ 三三三  
かたみわけ怨みつらみのはじめなり

瀬川 贊、欲のあさましき。

鈴木 贊、天明調を發揮した句。

岡田 同。

## 「大阪川柳」川柳大会

とき 12月2日(土) 正午開場

ところ アピオ大阪(大阪市立労働会館)

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

「新聞」 梶川雄次郎選

「残る」 小出智子選

「斧」 墨作一郎選

「熱い」 高杉鬼遊選

「鼻」 波部白洋選

「忘れる」 森中恵美子選

事前投句「歌」 磯野いさむ選

会費 2000円(合同句集・小川速水 連句集)

懇親宴 6000円(申込制)

主催 大阪川柳の会

# 秀句鑑賞

同人吟 田中正坊

—11月号から—

たぶん明日も今日とほとんど変わらない

新家 完 司

定例句会や大会で選句する場合、おそらく無意識でそのことに没頭していますが、どこか頭の片隅に物差しのようなものがある、そこに基づいて選んでいるようです。

まず、没句を決める「消去法」です。私の場合、誤字や言葉を用いた句は問題外とします。次に著しくリズムをこわしたものは除外します。定型・非定型は別問題です。第三には、やはり類想句は困ります。四番目は、言葉だけで遊んでいるような内容の乏しい句です。そして最後には、句の形は整っていない、選者の理性や感性に訴えるものがない句は、いただくことはできません。

こうして篩（ふるい）にかけたうえで、残った句の中から選ぶわけですが、結果的に見ると、私自身と「波長」の合ったものを抜いているようです。これはあくまで主観的なもので、物差しとは言えません。つまり選句は、あくまで相対評価であって、いつ・どこでも誰にでも、あてはまるような絶対的な評価基準はないということだと思います。

人生はいつ、どんなことが起るかも知れないし、そういう場面も体験してきましたが、それはめったにあることではなく、今日も平凡な一日が流れました。そして明日も今日と同じような日が訪れるし、そう願いたいものです。「たぶん」と「ほとんど」という言葉に、作者の日常とその中の心情が伝わってきます。

ぐうだらの手で日めくりの今日を剝ぐ

大橋 政 良

私はここ数年來、十年日記をつけていますので、「昨日」と「今日」ということを意識しすぎるくらい意識します。そしていよいよ残り時間が少なくなった昨今では、一日一日がかけがえのない大切なものになります。

とは言いながら、今日のはたして悔いのない一日だったかといつも反省しています。無為にすごしてしまった「今日」の日めくりを剝ぐ時、いつも心が痛むのです。

いやな過去 底に沈んで水が澄む

美 田 旋 風

誰にでも思い出したくない過去があるものです。できれば記憶の底の底に沈めてしまつて、現在を明るく生きたいものです。さいわい私たちには、「忘却」という天与の機能が備わっています。しかし、沈むということは消えることではなく、やはり自分の過去は自分が背負わねばならないでしょう。

明日はいい絵が描けそうな夕日落ち

小 林 由多香

「自選集」からも対象句を頂きました。私もよく夕陽を見ます。吉凶を占うのというのではなく、明日の無事を祈るような気持で茜雲を眺めたことがあります。明日への希望と期待を持つことによって、人は今日を生きたれるのだと思います。

仕とげ得し何ひとつ無し空の青

牧 淵 富喜子

これまで生きてきた長い人生の中で、私は何をなしとげることができたのだろうかと考える時、虚しいものを感じます。しかし、あれもやった、これもできたと言える人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。私はそれでいい、それが人生ではないかと思えます。下五の「空の青」がよく効いています。

雲ひとつないというのも恐ろしい

古川 喜美子

この句、ストンと胸に落ちました。雲はいろいろなものを想像させて楽しいのですが、それが一つもない、ただ青いだけの空は、体も心も吸い込まれそうでこわいのです。純粹で混じりけのない人をもつてくるのは、深読みかも知れませんが、そんな人よりも、いわゆる俗人の方が付き合います。

雑魚だから群にならねば生きられぬ

林 荒介

雑兵・雑草・雑魚……どれもブラスイメージを伴わない言葉ですが、それでいいのです。孤高はともかく、孤立・孤独・孤児よりもいいではありませんか。私は昔から所属する企業・団体のバッジをつけなければ落ち着けない人間です。やっぱり友だちや仲間、多ければ多いほどいいと思うのです。

赤ちゃんの名前でわかる親の夢

松本 よしえ

生まれてくる子の命名はたいへんですね。面倒くさくなつて親の名の一字をつけるなんて最低です。あまりにも夢が大きすぎて、子どもを押しつぶすのも考えものですが、やはり未来をなう子に夢を託し、それにふさわしい名をつけて祝福したいものです。

ニールックお前のへソは見たくない

久保 正剣

涼しくなつてほとんど見掛けなくなりましたが、ありや一体、何ですか。へソのないお腹があつたら蛙みたいで気味わるいが、へソはもともと他人に見せるものではないでしょう。ピキニの水着ならともかく、わざわざ見たくもないへソを見せる変な流行にも困つたものです。「へソ整形 学割のきく時代とは 結城君子」という句もありましたが、ほんとうでしょうか。

また一人クラスメートが逝く 寒い

金山 夕子

正に実感の句です。私も一年に二人も学友が亡くなる年が二年続きましたが、「寒い」としか言いようがありません。これから会う機会を多くして、残り少なくなった人生を共に楽しむうと思つた矢先に、ポツンポツンと友人が欠けていくのは寂しいかぎりです。

団体のオバタリアンが来る 恐い

新 正子

よく似た句の形ですが、中味は全く違います。「オバタリアン」は男性が使うと、どこから指弾されそうですが、集団となった年輩のご婦人に敵するものはありません。それは「恐い」の一言につきまます。

寝められもせず頼られもせず独り生き

金井 文秋

「自選集」からもつ一句。高齢で伝統ある句会をとりしきり、黙々と作句を続けられる作者には頭が下がります。声高に褒める人こそいなくても知れませんが、背筋を伸ばして独り生きられる姿は、私たちの心の支えです。いつまでもお元気でおすすめください。

机拭いてさあスランプを立て直す

山本 希久子

物事を長く続けていると、スランプはつきものです。あまりにも長いスランプに途中で挫折してしまう人も少なくありません。「継続は力なり」という言葉がありますが、自らそれを克服するところに進歩があります。

世界一長寿国とはおそろしや

春城 年代

ラストに巻頭句を取り上げました。何も長寿がおそろしいのではありません。高齢者のための福祉をなおざりにしたまま、ズルズルと高齢化社会の仲間入りをし、「寝たきりにならぬ呆けぬと言ひ切れぬ」立場になつても介護の保障もないことがおそろしいのです。社会保障の貧困を鋭くついた秀句。

今年最終の秀句鑑賞、多くの秀句を積み残した一人よがりの文章となりました。



西田柳宏子選

知っている数だけ数え もういいかい  
福岡市 井崎 ミサ子

楽しみが増えると少しお洒落する  
お人好し母さん周りを和ませる  
ごはんよと呼びに行つた子戻らない  
止んだかな雀の声で外に出る

兵庫県 円増 純子

古希ちかくなつても迷うことがあり  
ささやかな倅せでよい星祭  
気の早い一番星に急かされる  
すばらしい集い本音をぶつけ合い  
養生訓 喉元すぎてもう忘れ

藤井寺市 高田 美代子

言いきつてしまえばケリがついたのに  
風向きが変つたことも運だろ  
銀杏が落ちて潰れて御堂筋  
余白には生きててよかつたと書こう  
葉脈が透けて企みバレている

米子市 猪森 スミエ

ガムシヤラに夢を叶えた男の背  
こんな所で育つていたかこぼれ種  
はかりなど使わぬ母の塩加減  
指先に脳を集めて毛糸編む  
窓越しの陽に猫といる登さがり

富田林市 藤田 泰子

自縛から解き放たれて阿蘇の旅  
分かれ道 花を取ろうか実を取るか  
細く長く歩いていたい軽い靴  
歯が抜けて亡母そっくりの顔になる  
日なたぼっここれも亡夫の七光り

大阪市 川原 章久

何で腰にシャツ巻くのんや秋日和  
亡母送る火葬の窯の閉る音  
マンションの自転車置場ちろ鳴く  
浜街道飾磨御輿は喧嘩腰  
威勢よくこられ洪々祭寄付

大阪市 和田 和風

百までも生きる気はない敬老日

病名を勝手につけて悩んでる

医学書の読みすぎ医師を困らせる

三階を一人占めして家長なり

娑婆臭い石仏と会う永源寺

今治市 越智 青園

枝豆で時間をつなぐ不意の客

朝顔の律義いつまで咲くつもり

入れないと通さぬ位置に立つ募金

本当の匂を忘れた茄子 胡瓜

銀杏燃えて今青春をしています

鳥取市 福永 ひかり

生きる夢 無心に笑う子にもらう

プライドをくすぐる人に乗せられる

世紀末 性善説を信じたい

幸せはやはり笑顔に寄ってくる

ここからは壁にしておく自尊心

寝屋川市 太田 藍子

若いからもう来年の予定帳

仕事仕事とリングも剥けぬ娘を叱る

案の定お茶漬だけの金曜日

天高くババが張り切る競馬場

咲き終るまで待ちましよう秋の庭

堺市 神原 文

一軍を夢見て走り続けている

葉刈りせぬ庭へ頬白迷い込む

ダンベルがだんだん軽くなって秋

百歳の伯母ジェット機に乗ってくる

金持てばうまい話に乗るだろう

岡山県 福原 辰江

物語いっぱい詰めてある囲炉裏

跳び足らぬ分 空想を追うおんな

廃校へ記念樹だけのわらべ唄

逢うて来た余韻へ足袋も脱がずいる

飾らない笑顔あふれている若さ

尼崎市 長浜 澄子

わたし今 恋していますオーイ雲

金木犀おぼれ上手になりました

肩におく手のやさしさがほろ苦い

続編できつと変身してみせる

秋の街 泡立つものを懐に

和歌山市 吉村 さち子

原点に戻るしかない迷い道

言い訳はしないと決めた自尊心

投げ返す言葉が早い反抗期

素っ気ない顔で要件聞いている

一駅を歩いてたしかな秋に会う

鳥取市 植田 一 京

親しいが名前を知らぬ人がいる  
百薬の長ほどほどに飲んでいる  
馬鹿になることも教えて嫁がせる  
生意気なころには夢も持っていた  
虫一つ付かぬと言うも不気味なり

鳥取市 徳田 ひろ子

我慢した年輪とてもいい顔だ  
葉にはちよつと煩く病み慣れる  
思ひ出の虹は誰にも洩らさない  
我を折って少し大きな輪に入る  
今ここで愚痴ると仮面ずり落ちる

鳥取県 奥谷 彩子

角ある石もいつか地蔵になる丸み  
若者の情熱 幹を太らせる  
ロボットもいつか叙勲を望むかも  
脱皮しながら運命を切りひらく  
打算抜き愛あふれさす母の海

大阪市 三浦 千津子

感情線もつれポロポロ出る本音  
伝統を守る老舗のかくし味  
定年の明日から少し崩れよう  
脇役でトライアングルだけ叩く  
自動化が進み無口になつて来る

八尾市 村上 剛治

緩めると気持は楽な方を向く  
着飾って黙っていけば美しい  
冷えた心を温めてくれる仲間の輪  
母の膝 思い出させる日向緑  
未練にも割れた茶碗を合せてる

鳥根県 三代 朝子

いつまでも一緒にいたい別れ道  
旅支度ころばぬように低い靴  
ふる里の香りをのせて柿届く  
陽が落ちて一枚羽織る秋の冷え  
居心地がよくてついつい長居する

大阪市 岡本 久峰

軍用犬食べて営倉三日の刑  
参謀は知る由もなしシベリア記  
固い飯 湯吞一杯七日の量  
一斤のパン一週間を食いのばし  
為政者の無策国境丸腰に

鳥取県 山内 芳江

やさしさが時々邪魔になる羨  
万歳をして送られた生き残り  
伊達に歳取ってはおらぬ知恵袋  
言い勝って見たが眠れぬ夜となる  
無口でもやさしい心 顔に出る

大阪市 松 永 会 美

はまなすの亡母の故郷遠すぎる  
初めてのお使い八百屋遠かった  
絵葉書にたった二行の孫の文  
日めくりは入院した日そのままに

岡山県 福 原 悦 子

遮断機が下りて決心促され  
こばれ種 生きる力で芽吹いてる  
单身赴任 心も冷えて米を研ぐ  
無情にも月冴えわたる事故現場

兵庫県 西 山 八 重 子

水筒の水一滴にある情け  
秋風が破れ障子をノックする  
よく冷えたトマトで足りる朝のうっ  
パズル一つ解けぬ独りの夜が長い

宝塚市 永 田 暁 風

ひとりもよし淋しさ限りなく深く  
ガラクタもガレキも文化を信じた日があった  
淋しくて万歳三唱した両手  
風鐸は黙して風をやり過ごす

河内長野市 大 西 文 次

憧れた晴耕雨読持て余し  
反省に妻はにやつと笑ろただけ  
夕焼に帰りそびれた赤とんぼ  
赴任地へ妻が遠隔操作する

島根県 森 茂 美

海からの日の出に燥ぐ旅の宿  
平凡なミスに気付いた日の焦り  
核実験お国事情が前をゆく  
リハビリの杖ともなった老妻の肩

出雲市 浜 圭 三

名月というのに雲が厚くなる  
喪の明けぬ実家の稲穂もよく実り  
誇らしく稲田へ向うコンバイン  
借りた本やたらとライン引いてある

東大阪市 今 岡 貞 人

余生なお試行錯誤を繰り返す  
嘘ひとつ言えばひとつの泡が浮く  
眠られず心のトゲを抜くばかり  
褒めること一つ覚えて丸く生き

鳥取市 杉 本 孝 男

結局は泣かせて恨み買いました  
清貧の育ち我慢も板につき  
袈裟たたみ住職人の子にもどり  
白球を追ういが栗の帽子舞う

出雲市 川 島 和 歌 子

納屋の隅 農の歴史が眠ってる  
誇らしく夕陽の道をコンバイン  
なんとなく一日すぎてむなし日  
秋風に啼いて燃えつき油蟬

今治市 塩路 よしみ

もの言えば視角にいつも妻がいる

どことなく笑いに遠い百合の白

花いちもんめ唄えばそこに里がある

一部屋の世界孤独の味がある

大阪市 一本 勇 太

ひび割れの壺に情けが深くなる

まるく見えいびつに見えて好かれてる

妥協点待つ歯車の山と山

花束がひとつ見事な嘘を言う

高知県 細 木 子 龍

終らない夏が続いている茶の間

何も彼も遺憾で片がつく世相

公害の続いたあとは金でケリ

ステッキが少し本音を出して老い

大阪市 勢理客 トミ子

陽のあたる坂道 肩の力抜く

落葉たき昔話が弾み出す

冬ひとり文通だけの友が居る

軽震に昼餉の箸を持ち直す

羽曳野市 山 本 たけし

思い出がぼっかり浮かぶ古写真

風孕み黒潮吹ゆる熊野灘

父母が見る光る穂波に安堵感

娘が嫁って寂しき隠す秋の酒

大阪市 中 田 あい子

なき夫のありせばペアで着たいシャツ

打ち水に秋灯さえる石だたみ

足音で虫のなきやむ露地の秋

赤いシャツ着て少年の自己主張

尼崎市 尾 宮 弘 治

遠慮なく喧嘩が出来る嫁が好き

母元氣 昨日は叱り今日は褒め

リストラの内緒が耳に突き刺さる

言わぬことまでが聴える妻の耳

松山市 丹 下 美津子

群発地震しばらく旅は見合わせる

きつと夫が迎えに来るとゆずらない

しばらくは耳に栓して堪える母

反核運動してもフランスなんのその

今治市 中 村 好 恵

出不精の夫 便利につかわれる

ライバルがある日後ろにいた不安

七転び角が少うしずつとれる

やさしさと思う明るい子の電話

河内長野市 木 太 久 正 一

大根菜の一夜漬けにも匂う秋

彼岸花 豊作祈るように咲き

足早に季節は巡る金木犀

秋雨に畑の野菜も深呼吸

寝屋川市 宮崎 菜月

何見ても哀れあわれと言う母で

八十になつても母の手反り返る

花芒持てば叙情歌口に出る

山茶蔓の御堂の庭に憩う秋

松江市 松本 知恵子

撫林で静かな鼓動聞いている

風車まわり地蔵の顔やさし

山男武骨に話す山の花

何事も待たぬ女の均等法

倉吉市 山本 玲子

育児書を片手にヤングママ奮闘

蛾に生れ紋白蝶にあこがれる

意気投合手の内みんな見せちゃった

ぬるま湯にどっぷりつかり夢忘れ

岡山市 藤原 一平

充電も放電もきく旅の宿

下手な絵を画いてみんなに愛される

年金の隅にちよっぴりコップ酒

顔なでるくらいは吹いてほしい風

八尾市 大内 朝子

叶うなら大の字になる雲の上

新しい風に会いたく部屋を出る

欲捨てる石段にある欲拾う

飯茶碗 生きる想いの詩を知る

今治市 渡辺 南奉

蚊もハエも夏を知ってる生きている

ライバルの例えばなしに険がある

扇風機 逆回転がしてみた

仕事着の汚れ勲章だと思ふ

兵庫県 玉田 三重

漬物の石で間に合うわが暮し

汁椀に夕べの悔いが浮いている

老兵の歩幅は今も若く見せ

腹にない甘い言葉を口にする

和歌山市 太田 木管

熊野路も木曾路も同じ山の中

吉宗が客寄せしてる長保寺

神主も美人横目に祝詞あげ

父の声 風呂に溢れる旧軍歌

尼崎市 森安 夢之助

安定の日々父が居る母が居る

子告なしで切り込んでくる妻の勘

聞えませんが今弁当を食べている

悪かったの一言 明日が晴れてくる

尼崎市 河津 正治

談合もあるらし蟻も肩寄せて

追伸に書いた本音が伝わらず

自惚れが時の進むに気付かない

飄々として明日の空を読む

長岡京市 山田葉子  
定年後やっとなった差し向い

定年後短気な人と知りました  
ステツプが合わないままに添いとげる  
添えられた手のぬくもりに励まされ

兵庫県 西井つや子

七転び八起き老化と共に生き

秋の陽に映えてハゼの木ほめられる

あの頃は有難かった豆御飯

待合室 昔話に花が咲き

河内長野市 柏本靖子

霜柱踏むと故郷の音がする

何もない部屋で嫁いだ娘を想う

すつきりとしれない妥協に茶が苦い

包丁を研いで待つてる海の幸

和歌山市 山根めぐみ

髪切って切って女の業燃やす

振り向いてみれば一人で苦笑い

おだて上手 気分天まで持ち上げる

リストラの照る日 曇る日 雨降る日

福岡県 本田忠男

バラバラのノートに青い恋の詩

冬支度 辛抱つよい蟻の列

縁先の声が蟬から虫になり

笹舟が終りを告げる夏の川

兵庫県 北川とみ子  
泣き顔を洗い忘れた倦怠期  
ほどほどの倅せを追うボールペン  
呑みこんだ小言の骨が胃に刺さる  
子を語り孫を語って過疎に住む

和歌山県 杉山精子

悔いばかり縫い合わせてる喪の中で

余白まだありそう今日の靴を脱ぐ

シュレツダーにかけた私語を吐いた悔い

蛇行するいのちに熱い血が通う

箕面市 木村天弘

厄除けの要にいつも母がいる

子に聞かす童話へ母も夢を持ち

ただ一途乳房に込めた母の愛

お袋の塩ひと振りで味まるい

大阪府 原美恵子

三つほど柚子が実ったうちの秋

花の種貰い播くとこ考える

虫さされのかゆみが取れぬままに秋

水たまり一二の三で跳んだ朝

高槻市 傍島克治

そんなこと聞いてへんど逃げられる

明日の風 今日よりきつと強かろう

つまずいた石の形は忘れまい

女房が牽制球を投げすぎる

寝屋川市 井上 すみれ

春が来て秋が来て余生急ピツチ

幸せの余韻 家族の皿洗う

あの店の優しい言葉に逢いに行く

一億が野茂イチローに血を沸かせ

熊本県 岩切 康子

新芽みな虫にやられて蒔きなおし

聞き役に徹しうなずく子の話

期待などするんじやなかった他人ごと

六十の手習い読み書き始めよう

八尾市 村上 ミツ子

喜びを伝えられないもどかしさ

忙しいうちが華だと諦める

潔くさぼり言い訳せずにいる

収入のない日 集金人が来る

羽曳野市 川田 晋

ふと日々が空しくみえて旅に出る

カルチャーへ妻颯爽のヘアバンド

聞きたがりうるさがられる遠い耳

若いから出来たと思う綱渡り

寝屋川市 坂上 高栄

初孫の顔に勘当解く頑固

高原の秋のニュースが忙しない

赤トンボすいすい稲田を秋の使者

百姓も強気一揆のむしろ旗

札幌市 三浦 強一

終点のない欲望という電車

取り巻きの中に刺客がいた誤算

雑魚少し釣るに夫の重装備

地価下落 猫の額を試算する

羽曳野市 徳山 みつこ

金木犀さんまものせて夕暮れる

あした行くヨ豆台風のいい電話

オクターブ高い返事は孫へする

出す時も愛想のいい自動ドア

枚方市 森本 節子

御先祖に供えるだけの花作り

こがしてはまた鍋みがくのがならい

客送り淋しい中にほっとする

今朝はまだつがいの鴨が顔見せぬ

島根県 谷岡 ふみ

虫すだく音もいつしか消えて冬

豊作の喜び仏前に鐘を打つ

農家には早い多忙な冬支度

今日一日幸せだった仏間の灯

大阪市 中井 正秀

ワンカップ道連れにして独り旅

日照権何処吹く風とビルラッシュ

保険掛け何がなんでも生きてやる

恐ろしや妻が男になると言う

寝屋川市 森 茜

あちこちでぶつかっている情熱家  
後ろから呼ばないで欲し寝違える  
嘘ぶんぶんばくのドラマは人嫌い

静岡市 大村 正雄

雑音の中で舟漕ぐ旅疲れ  
隠してるつもり周りは全部知り  
苦労した人だとわかる思いやり

静岡市 佐藤 次枝

正直に言えばげげんな顔をされ  
見て貰う掃除 念には念を入れ  
糠味噌の手入れ頼んで旅に出る

静岡市 松下 正枝

ともかくも猛暑凌いで秋の風  
こんな時しか逢えないねお葬式  
隠したい事であろうに聞きたがり

静岡市 三浦 つね

同居とはどちらも自由きかぬ日々  
子を褒めた先生急に好きになり  
無理だなと鏡言ってる試着室

寝屋川市 籠島 恵子

落暉いま五重の塔が眠ります  
思い出のコースたどっている未練  
ちよっとお尻をたたきたくなる適齢期

尼崎市 軸丸 勝巳

先人の夢 海峡をバスで過ぎ  
坪菜園ひとすじ一筋みな宝  
漫画なら引取りますよ古本屋

摂津市 井上 源一

来春の期待に芽吹くえんど豆  
ラーメンの変らぬ味にあつたまる  
背凭れに男の愚痴がへばり付く

唐津市 市丸 晴子

泥舟となるかもしれぬウエディング  
栗ごはんむいた苦労は忘れられ  
秋深し走り出したい万歩計

弘前市 相馬 銀波

この先も疲れた義歯に頼り切る  
票だけが欲しい電話に呼び出され  
主義主張 男の胸が薄くなる

八尾市 平川 幸枝

無駄吠えを叱る女の声暑し  
娘の家へ渴きのままで駆け上がる  
墓石を洗えば亡父がこそばかり

尼崎市 立谷 勇次郎

肩書きが付いて仮面が欲しくなる  
残り火をしずめる酒が今日もいる  
褒め言葉 考えて行く披露宴

寝屋川市 北岡 波留吉

ダムになる故郷がカメラ急きたてる  
世の中に鬼と仏が同居する

磨いたら値打ち下がる骨董屋

鳥取市 田中友子

帰省子に涼しい風が愛想する

スピーチに美しい嘘入れておく

とっときの笑顔振りまく選挙カー

八尾市 鷺見章

美しきナース愛して古希の青春

妻哀し我が病むために肩尖がる

妻愛し我に優しき妻なれば

大阪市 鈴木トヨ子

生かされて今日も感謝の寺まいり

恐山積んだ小石が母を呼ぶ

大のリズムにあわせて回る余生です

鳴門市 八木芳水

最下位のチームが見せるプロの意地

自分史に母の温みが欲しい時

まだ話足りないままに回り道

島根県 岩田三和

腐らぬよう心の底に渋をぬる

天高くおいしい米に精つける

深層にへドロをためる核のゴミ

和歌山県 中後清史

信用はないが世渡りうまい奴

借金がなければそれで良しとする

黙々と春へ根を張る落葉樹

岡山県 大石あすなろ

だまされてみたいと思うおぼろ月

まな板が乾いて音もリズムカル

根回しがきいて枕を高くする

愛媛県 安野案山子

愚痴一つ言わずに僕の影法師

南無阿弥陀仏 母の祈りに夜が明ける

日曜の朝を引き裂く草刈機

寝屋川市 後藤黎之助

恋しさと意地が喧嘩をして困る

宅急便今日も時間を追っかける

澄んだ空青いシートは呼びかける

和歌山県 福重美子

杖借りた義理を果して土産買う

方言が迎えに来てる里の駅

独りじゃない薬味のような妻がいる

唐津市 岩崎實

木犀の香り門より掃き清め

黄金田をはやしたてる彼岸花

群雀どつと田んぼの土境を越え

泉佐野市 稲葉 洋

避暑避寒 北へ南へ鳥渡る

お袋と呼び名を変えて親離れ

膝かかえ波乱の年に無力感

岡山県 土居 ひでの

だて眼鏡ちよつと段差に蹴躓き

やんわりと打つても疼く杭がある

雨しとど時に狸寝する右脳

松江市 浦辺 静江

秋日和 噂話に花が咲く

甲高い声かあさんとよくしゃべる

夕映えに美しくなつたのは枯木

泉佐野市 内田 倫子

逆さ富士こわして進む遊覧船

受話器取るドラマの中の音なのに

ハプニングあつて心に残る旅

寝屋川市 富山 ルイ子

アイバンク誰方かの目になつて生き

煩惱を山ほど持つて日が暮れる

墓参り今せめてもの恩返し

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

姿見に亡母の衣擦れおもう秋

せめてなら一騒ぎする恋がいい

笑い皺 血液型も母系なり

綾部市 藤田 芳郎

私より信用された免許証

虫の声言いたいことを後にする

漬物の石が今年も重くなる

徳島県 安宅 美代子

いやなこと言うまい胸の絵がにごる

本当は聞いても欲しいひとり言

紙コップその場限りの事を言う

尼崎市 田辺 鹿太

背の高い父だが高所恐怖症

鉄冷えの街 煙突が欠伸する

遮断機に足踏みをした恋もある

羽曳野市 安芸田 泰子

思いやるころ忘れた有頂天

片言の孫が真似するどっこいしょ

愚痴一つ言わぬ笑顔に甘え過ぎ

高槻市 小林 一閑

雑音の中に美学が潜んでる

イチローも神戸もよくぞ頑張った

何年を生き延びる気か健康法

富田林市 山原 昭水

嬉しいと万歳をする癖がある

あのとときの失敗があり今日がある

献血もしたいが痩せの五十キロ

貝塚市 池田 寿美子

時刻表もみじが過ぎてからのこと

思いつきりリングかじつたのも昔

足許をしつかり見据えて黄昏る

羽曳野市 麻野 幽 玄

言い訳をするに他人に傷を付け

痒みには効かなんだけどよく眠れ

いらいらが解けたら消えた肩のこり

堺市 志田 千代

三度目は聞きかえさずに笑っている

遠い日の恋さりげなく賀状かく

たてまえは良妻 雁首はにぎつてる

香川県 田中 ふみ

いつとなく重ねていた手そつとのけ

病床へ甥の結婚告げにくる

手助けのつもり思わぬ無駄となる

鳥取市 山本 崇

さらぬだに躓く歳に老けて行く

久しぶり友の筆勢未だ強い

蝶ひとつ飛ばして庭の草を取る

香川県 山崎 はつ恵

手回しがよすぎて腰が落ちつかず

遠くまで運んだ風も噂好き

習慣の中に近ごろ昼寝入れ

兵庫県 中野 とよ子

口笛のリズムに映える青春詩

踊りましよう心が晴れる明日がある

紅さして永久の別れの旅姿

柏市 上鈴木 春枝

ホットコーヒー淋しがりの秋の私語

イヤリング ソフトムードの妥協案

ささやかな妻の抵抗ふて寝する

兵庫県 安達 厚

天気予報とことによりが気をもたせ

栗ご飯 先祖に供えて秋告げる

腰痛は年ですからとにべもない

兵庫県 倉垣 恵美

間引かれる菜っ葉にもある自負の顔

自転車屋さんでもらった花が咲き

駄々こねてみたい六十路の下駄の音

米子市 池尾 保子

汚染などよせつけけないで天の川

割れ鍋ととじ蓋歩んで六十年

コチコチの冷凍魚に睨まれた

池田市 木村 一笛

向こう傷 矢つ張りあいつ恐い奴

添い寝してお伽話をひとくさり

ともかくも話まとまり大笑い

街の底走るビーポー遠くなる  
尼崎市 吉永 伊三郎

戦友の顔セピアになって半世紀  
味噌汁がしんみりうまい里の秋

鳥取県 原 みさを

よく笑う家の小柄な福の神  
定年の旗に風向き定まらず

ファッション誌 女脱皮をくり返す

島根県 武 島 ちよえ

柿のれん一つ減りまた一つ減り

去年より少し派手目な服を撰る

靴履いてからの話が長くなり

島根県 菅 田 かつ子

穴かがりしてからボタンはまりかね

聞こえないふりしてやるも思いやり

また今日も噂が通る裏通り

豊中市 岸 田 知香子

赤トンボ葦の茂みで一休み

水郷のサギの姿が絵になって

車椅子ラッシュアワーの老病棟

岡山県 国 米 きくゑ

過疎に嫁 村祭りより盛りあがり

毎日がお祭り五つ子養育中

紅葉着て迎えてくれる故郷の山

羽曳野市 芦 田 絢子

買ひ溜めの回数券が嗤う怪我  
目を明けてしみじみ無力知るグルマ  
明日の絵もあさっての絵も虹色に

大阪市 田 中 せつこ

流れよう紆余曲折の道のまま

おぼれそう水の流れに逆ろうて

褒め殺し優越感が先を行く

兵庫県 森 脇 和子

欲のない暮らしへ四季の花が咲く

合鍵を預ける隣サンマ焼く

祝杯の輪に酔うてますいい仲間

豊中市 石 川 勝

娘を叱り眠れなかった方は父

潔癖な父の財布が軽すぎる

疑いは晴れたが戻る席がない

八尾市 神 原 まさと

酒煙草ケーキも駄目な万歩計

ダンボール箱は幼児も犬も好き

蕎麦殻の枕で父も子も育ち

相生市 中 塚 礎 石

でかい声出しても部下はついてこず

人間はただロボットの汗を拭く

口ほどに命をくれるのはいない

河内長野市 妹背 尽呂久

日本を出たら日本人と知る

ぼちぼちと代替り期のニュータウン

大勢の雄蕊と同棲する雌蕊

米子市 永井 三津子

再婚をバーゲンのよに急かす母

日記には夫が今でも生きている

傷付いた心が母を恋しがる

和歌山県 吉田 武治

ほどほどに押えて余生満ちた日々

ありがとうただ一言にある温さ

医療無料ありがたいやら淋しやら

和歌山県 古久保 和子

長い影 尺取り虫に測られる

吊り皮を持つ手はみんな疲れきみ

いやみ言うた口がもぞもぞ痒くなる

広島県 森川 抜智

わが道をゆくこれしか才能われになし

よい知らせあるのか雉鳩わが庭に

弁解をすれば誤解をまねくだけ

島根県 福岡 博利

病院に慣れておこうか暇だから

三くだり半書いた筆なら洗わねば

一匹のさんまでうまい二合ビン

東大阪市 谷口 義

お下がりの机で弟よく出来る

胃カメラを撮りに行くにも妻を連れ

素顔では会いたくないの負けるから

唐津市 山門 幸夫

度忘れの素振りが通る齢になり

せがむ子へ梯子をかけぬ祖父の愛

植え替えの叶わぬ盆栽一つ持ち

唐津市 山門 夕三

秋晴れて客一杯の美容院

野の花を活けて玄関秋盛り

ナイシヨ言う壁の耳から通り抜け

砂川市 武田 正美

ケン玉に翻弄される日の焦り

ジングルベル流れる寒い懐手

未熟児のケースの中の生欠伸

兵庫県 大谷 幸次郎

迷い蚊の羽音気になる秋の夜

他愛ない風の噂にしばらく

打たれても凹まぬ枕が慕われる

茨木市 久保田 恵美子

嫁った娘がハネを伸ばしに来たらしい

子を負うたオンパツタに道譲る

哲学を極めたような皺がある

自画像を少し美人にしてもらっ  
真つすぐに伸ばす添え木が強すぎる  
マイホーム退職金を持って行き

鳥取県 岸本孝子  
新潟県 高野不二

この世には子の嫁一人いないのか  
賛成に手を上げそびれ下を向く  
値をつけたままで見せたい時計買っ

静岡県 永倉柳華

恩師より少し早目にお辞儀する

無人駅 傘がわたしを待っていた

松茸へ指紋を残し買わずくる

今治市 村上久美子

猜疑心 連想ゲームばかりする

合掌の指に迷いがまだ絡む

まっとうに生きて貧乏神宿る

熊本県 高野宵草

幸運な毛虫県道渡り切る

放つといて咲いた律義に肥料やる

祭笛 幼い頃の耳で聞く

鳥取県 高尾京

名水も濁るばかりの核実験

戦後五十年 外国基地のある不思議

弱震の統報見つつ寝てしまっ

種を播く時に実りを信じてる

私を信じてくれる仏いる

信じきることが私を支えてる

鳥取県 橋谷静江  
泉佐野市 大工静子

割勘で下戸はいつも運転手

彼岸花に囲まる畑にワケギ植え

出勤の目ざわり老いは朝寝する

米子市 木村春枝

記念樹はわたしの胸で育てゆく

逆境に育ちの良さが顔を出す

雑踏が心のうつつを消してくれ

八尾市 生嶋ますみ

コスモスが語りかけそう無人駅

妻や子を思う赴任のワンルーム

言いすぎを反省しつつ爪を切る

和歌山市 木村親路

アングルを変えるとつまらない男

FAを妻に宣言されそうな

沈む陽に男は思うこと多し

和歌山県 藤井春子

晩酌の二合が父を和ませる

人生の半ばで素直とり戻し

山頂で月と対話をしてみたい

松江市 小西素子

木犀のしきりとにおう庭に立つ  
とろろのかたむきようが気にかかり

一人居の安らぎがあり萩こぼる

河内長野市 印藤智子

看病の夫に心でありがとう

会葬を待つおしゃべりが耳ざわり

ここだけの話が一人歩きする

高槻市 執行稲子

つれあいの背は高からず低からず

叱られた亡母の記憶は遠すぎて

やわらちゃん静寂のなかの息づかい

羽曳野市 西村りつえ

老木も若木も愛し深い森

断りに無理した嘘が匂うてる

少年A罪と思わぬから恐い

大阪市 乾哲静

喜寿傘寿 孫の笑顔に手を引かれ

おふくろの味デザートでつまみ食い

年取れば取るほど世間狭くなる

横浜市 後藤幸子

鼻唄の出る日は猫も寄って来る

酒の味 知らない妻の酒選び

長電話 切るのが下手な私です

尼崎市 岩倉キク子

言わんとこしゃべれば夢は逃げて行く  
やる気なら腕も頭もまだ確か

何時までもおろせそにない背の荷物

堺市 桜井莊次

気に入らぬ話が溜る耳の奥

補聴器が肩を凝らした外野席

忘れたい事ほどこびりつく頭

十和田市 阿部喜久江

年の差を気にせず恋に燃えてる

ねぎらいの言葉に湧いてくるファイト

全力で走ってるのに追い越され

愛媛県 中居善信

こつこつと息を抜かない母である

日焼けした顔に父権がまだ残り

帰省子に山はみどりで青い空

倉吉市 田中八太郎

千鳥足わが家の近くで正常歩

割勘の相手は斗酒なお辞さぬ奴

税金は飲んでしっかり納めてる

鳥取市 山宮愛恵

人並の妻で平和にさんま焼く

体中撫でて子牛を売る

迷いこんだ猫に顔中なめられる

豊中市 松岡 久留美

星空を眺めて今日の幸思う

酔うほどに気前良くなるお父さん

被災地の桜に心励まされ

尼崎市 中澤 向西

達筆の手紙へ積もるプレッシャー

もう辞めて気楽にやれと他人さま

目もむいて衝立の虎 飛びかかる

阪南市 正橋 正

恐らくは出番なさそうパートII

素朴だが失敗談が多過ぎる

なんだなんて言わぬ真理は単純だ

和歌山県 村中 悦男

帰ろうと農具の土を落とす妻

後継ぎのない野良仕事日が沈む

ふしようひげ野良の仕事と気をゆるし

横浜市 清水 潮華

年齢で働く意思をメツタ切り

退院を犬が一番よろこんだ

朝寝する予定をベルに起こされる

神戸市 向井 泰子

二組の古希の夫婦もヨーロッパ

稲穂垂る国に帰ってホッとする

天高く柿美しい日本晴れ

島根県 今川 三津江

脚立三段とても視界が開けたり

長話 終りは愚痴になって悔い

無農薬ミミズが増えてモグラ増え

高知県 百田 幸

大きめのころも着こんだエビフライ

見ない振り聞かない振りの出来ぬ人

あこや貝 無理に真珠を抱かされる

鳥取市 岸本 宏章

ダイエツト月夜の蟹が真似てみる

ずわい蟹 本場争い見てしまふ

使わない健康器具が病んでいる

羽曳野市 酒井 一壺

幸せな音が二階を降りて来る

虫けらのように人間殺される

今朝の妻 虫の居所悪かった

高槻市 江原 秀夫

あの世から便りに燃える曼珠沙華

心配りが独り言にも相手する

五十年いまだに固いこま結び

鳥取市 藤 ふうこ

運命のミスか私はまだひとり

出世する望みを胸に昏れてゆく

揺れゆれて乙女心は嫁ぎます

大阪市 川久保 睦子

大山市 森 正  
痴話げんか茶碗の欠けに罪を着せ  
叱られて返す言葉に涙添え

ルージュ引く指に女が蘇る  
老妻の留守 立ち食いそばで腹満たす

富田林市 欄 智久

秋深くネクタイの色替えて見る

東京都 清原悦子  
気付かない幸福いつもそばにおき  
母一人庭の形を維持してる

赤鉛筆で嘘と大きく書いて見る

高槻市 芦田 静江

島根県 槻谷 仲子  
ふんふんとテレビ見ている空返事  
度忘れにメモを取るのが一つふえ

Tシャツにピカソ泳がす秋の天  
遺伝子に背いた孫の頼もしさ

堺市 吉本 菁風

岸和田市 亀井 皎月  
生かされてまだクラス会OB会  
よく食べて三歳未来よくしゃべる

ノーメイク裸のようで落ち着かず  
時効なく今だに浮気責められる

大山市 早川 盛夫

唐津市 宗 弘  
星一つ挙げる力士の玉の汗  
売出しの長蛇の中に妻がいる

学校がとても困った綴り方  
一点を凝視している物思い

静岡市 小木 久子

唐津市 松本 圭  
手料理で一人酒飲む誕生日  
分別が中年の恋じゃまをする

逢えばまた別れが辛くなる二人  
お互いが相手の出方待っている

倉吉市 山口 ゆうた

今治市 渡邊 伊津志  
コスモスを壺に活けると風が止み  
売れ残る魚へ氷とうに溶け

汚れもの溜めない寡夫の綺麗好き  
内閣に溜るストレス テレビ切る

米子市 林 風子

弘前市 櫻庭 順三  
登山する膚が知ってる四季の風  
しあわせは昨日も今日も般若湯

カトレアも好き露草もいとおしい  
ひたむきに青空映す冬の池

鳥取市 津村静枝  
不治と知り口惜しさ今も身の震う  
天国で会うまでたんと話題溜め

松江市 安食友子  
艶話 年甲斐もなく乗ってくる  
路上では他人の顔をしてる孫

宝塚市 飯西ミサヲ  
どうしても若さに勝てぬくつの音  
停年に時計のいらぬ日が続く

兵庫県 高見末野  
気楽さも照る月淋し一人部屋  
ホトトギス今年も咲いて母想う

和歌山市 松本三九  
月見草 抱かれて悔いはのこらない  
コスモスの風にゆれてる恋がある

鳥取市 石上悦子  
簡単に行ける実家が遠くなる  
都合いい方にとりあう無言です

堺市 たにひらこころ  
ワイングラス割る 思い出を残さない  
雨の舗道 落ち葉踏みたいハイヒール

大阪府 澤田和重  
急ブレーキ足に震えが後でくる  
納得ができず無口な妻でいる

岡山市 山磨行子  
七癖の一つは亡母が植えたもの  
度忘れの相手と長い立ち話

仙台市 小寺九  
歩幅の差はつきり示す万歩計  
百円を拾った朝の身の軽さ

松江市 佐野木みえ  
少年はあの日の喝采忘れない  
折返し点過ぎて明日が見えてきた

広島市 藤川幻詩  
ブランドを揃えてゴルフまたブービー  
金があるからかじいちゃん大事がり

交野市 山川日出子  
開発で狸の親子宿さがし  
終戦日十三歳を思い出す

米子市 服部朗子  
峠越え生かされる身を感謝する  
割り切ってそれから楽なお付き合い

和歌山市 楠見章子  
明るいニュースが欲しいロバの耳  
本心を見抜く眼鏡を置き忘れ

和歌山市 森口美羽  
生涯の鏝を落として生きている  
絵の具皿わたしを描く色がない

せいっぱい生きよう夫のいる限り  
病名は伏せて笑顔で会いにゆく  
島根県 松本聖子

大阪市 平井露芳

不眠症治りええ夢戻って来  
誉めたと花もきれいに咲いてくれ  
和歌山県 久保ふみえ

和歌山県 久保ふみえ

便利さに慣れて感謝も忘れ勝ち  
生活の一部になった医者通い  
高槻市 乙倉武史

高槻市 乙倉武史

一人住い月皓々と仮設住み  
しぶちんが買うふり試食して回り  
和歌山県 和田美寿子

和歌山県 和田美寿子

相槌を打ちつつ人のためされる  
大輪の花を咲かせた自信作  
静岡市 中西雅

静岡市 中西雅

職を得て神詣する光る靴  
ついて来る影も動悸のいそぎ足  
鳥取市 近藤秋星

鳥取市 近藤秋星

小豆島 猿と再会する旅よ  
小豆島 亡母もお遍路で来た所  
伊丹市 檜谷郁子

伊丹市 檜谷郁子

復興へ襖張り替え秋日和  
日の丸を背負わず気どらず野茂投手

人様の二倍笑って二倍泣く  
有難いこと見えて歩いて食べられる  
大阪市 亀井円女

西宮市 古谷ひろ子

音程がときどき狂う父の笛  
平凡な秋ですサンマ焼いてます  
鹿児島県 大山舞鳥影

鹿児島県 大山舞鳥影

多数決がいじめにもなる民主主義  
テレクラのティッシュが獲物えらんでる  
鳥取県 藤山弘子

鳥取県 藤山弘子

告げ口はしないときめた自尊心  
半額の中にもあった宝物  
寝屋川市 瀧本八十八

寝屋川市 瀧本八十八

学歴にすぎり豊かな個性消え  
網館 腕とり返す鬼の意地  
豊中市 藤原桂子

豊中市 藤原桂子

同じこと思っていたか電話くる  
運動会 汗さわやかに子にかえる  
倉吉市 山中康子

倉吉市 山中康子

テレビから一足先に紅葉狩り  
歯が埋まるたとえ差し歯であらうとも  
大阪市 池田一男

大阪市 池田一男

謙遜に見えて所詮は気の弱さ  
もう少し明かりがほしい明日のめど

和歌山市 津村 武春

人前は人畜無害とayingておく

逢うて来た余韻ひとりで満ち足りる

島根県 安部 恵美子

無農薬 虫にしつかり試食され

クリスマス今年は孫がひとり増え

和歌山県 上岡 正直

齢とらにやわからんことがたんとある

孫の画に解説つけた敬老日

出雲市 加藤 スズコ

風の日を祈る農家のお赤飯(二百十日)

生け垣に取り残されたこぼれ花

静岡市 増田 扶美

病む友の文字の乱れに胸さわぐ

迷信と思っても揺れる夜のしじま

東大阪市 松山 隆

若さには勝てぬ学びの道しるべ

気がかりな不況錦秋罪なピラ

鳥取市 富山 雄幸

星屑へ秋の淋しさ癒される

捨て切れぬ煩惱抱いて座禅くむ

唐津市 山口 ふさ子

神戸から故郷弁で電話くる

信じると丸も四角に見えてくる

唐津市 福島 紀一

彼岸詣り善人の中で掌を合せ

善くも悪くも電話しておく友がいた

唐津市 浜本 治幸

入院もたまにはいいな友増える

なすきゅうり恰好いいのが先に売れ

今治市 野村 清美

耳も鼻も欠けた地藏が笑み給う

決意抱く息子が後を振り向かぬ

尼崎市 向井 末貞一

母の文字たどたどしいが愛こもる

旅終えて花におわびの水注ぐ

尼崎市 的場 十四郎

どん底で助け合ったのは他人

進むこと教え続けた日の誤算

八尾市 與田 明

さっそうと単車で走るおばあさん

捜しもの忘れた頃に顔を出し

大阪市 尾崎 黄紅

わたしから出た噂が戻る速さ

びしょ濡れの貧に政治の傘がない

鳥取市 坂田 和歌子

さんぐりと何処か余裕の地味な母

硯の隅で文字の欠片が干涸びる

姫路市 服部 一典

母の愛お皿のなかに盛ってある

連れ合いをなくしたどうしコーヒ飲む

富田林市 中井 アキ

古里のかごめかごめが遠くなり

ふりむけばついてくるのは影ばかり

河内長野市 水谷 笙子

柿苗を買う十年は持つつもり

水戸黄門一緒に見てる家の猫

尼崎市 松下 比ろ志

澄んだ空 綺麗な花が欲しくなる

浄土まだ見えないために坂登る

明石市 小川 酔月

自転車を盗られてからの万歩計

百円の秋刀魚に秋をかみしめる

池田市 藤井 計光

再会で触れたくない過去連れ戻す

言いだせず会話の上をすべり抜け

青森県 西谷 鐵郎

妻と二人ただ黙って海を見ている

石けて孤独に耐える一人っ子

岡山県 富坂 志重

郷里の山は子供の声が好き

夕べから覚悟きめてる診察室

字に書いて覚えることにする名前

犬かきで泳いだ海は何時も風

沖繩県 杉谷 一栄

国勢調査これが今生最後かも

警戒が無駄でよかった台風去り

熊本県 増田 一乗

涙腺でしかと真心受け止める

その昔 家族束ねていた囲炉裏

名古屋市 藤井 高子

故郷の無口な父の宅急便

忍従の美学を母に教えられ

日立市 加藤 権悟

服新調したがフランスへは行かぬ

包丁を研いでバナナのためし斬り

高知県 桑名 孝雄

水を得たように伸びのび妻の留守

平凡が好きで野心家にはなれず

和歌山県 中村 君枝

大人びた顔した子供よく笑う

丁寧な文句が並ぶ嫁のふみ

米子市 小塩 智加恵

角出してみたい日もある低気圧

気がつけばいいのにポタンの掛け違い

熊本県 大川 幸子

岡山市 中 嶋 千恵子  
迷い箸にがい話をつまんでる  
野仏の肩を借りてる赤トンボ

鳥取県 権 代 康 女  
身内だと思いわがまま出てしまい  
満月に映える笑顔がやさし過ぎ

檀原市 西 本 保 夫  
貰いすぎの薬こっそり処分する  
心の字ここに書きたい白い皿

東京都 瀬 戸 きん子  
げんまんのしすぎでしようか痛む指  
七つボタン似合った日もある人と居る

尾張旭市 三 浦 きぬ  
長電話 受話器何度も右左  
椅子のあるホームでデート待ちと決め

松江市 松 浦 登志子  
お茶をのみうわさ話で日が暮れた  
あかんべえ誰にならったわけでなし

海南省 谷 口 義 男  
味方だと思ひ話したのが誤算  
自分では酒癖悪いなど知らぬ

宝塚市 黒 台 伊佐武  
爽やかな日を賜りぬ夫婦旅  
鼻動くニコリともせず鼻動く

熊本市 北 川 一 進  
家元と聞いて作法もまた変り  
からかってみたらほんとなつちまい

吹田市 西 岡 豊  
クラス会 社長に医師に警視正  
凋落の老妓が唄うさのさ節

鳥取県 橋 本 多哥由  
無造作な妻のくさびが効いてくる  
六十路坂ドラマ一つを追いつづけ

千葉県 大 川 晚 翠  
城門にセコムしてますすきま風  
塗装屋の車にペンキ滴りぬ

旭川市 朝 倉 大 柏  
喝采を貰ってからの向かい風  
来世の幸せよりも今日の酒

### 川柳塔きやらばく忘年句会

とき 12月3日(日) 午前10時開場・12時半締切

ところ てんまやホール(米子天満屋5F)

課題 場所・袋・拭く・いつも・蓋・瘤・借りる・数(2句)

会費 4000円(昼食・懇親宴とも)

窓口 〒683 米子市花園町53 林 荒介方

川柳塔きやらばく事務局

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—11月号から

岸野 あやめ

清濁を飲んで夫婦の城守る

福原悦子

口先だけの綺麗ごとでは、この世は生き抜  
けません。夫婦の城は本音同士の連携があつ  
てこそ、守り切れるものなのです。

無農薬ほんどだろうかきれいすぎ

原 美恵子

全く同感！

銀行に活断層の地図がない

軸丸勝巳

日本は本当に恐ろしい国になりました。善  
良な市民は何を頼りに暮らせば良いのやら。

地震から喧嘩別れの繰り戻る

尾宮弘治

些細なことで仲違いして意地を張り合っ  
ていたけれど、あの猛威を体験しては、心の底  
に持ち合っていた友情がどつと復活！よかつ

たよかつた。

実印がこんなに軽い家屋敷

安宅美代子

日本は実に印鑑が幅をきかせる国です。私  
事ですが、配偶者に死なれてこれが実感！

忠孝が風化してから来た平和

谷口義男

平和が来てから本当のことが言えるよう  
になりました。そして現在にはあまりにも本音ば  
かりが横行しています。中庸というのではない  
のでしょうか。

胸のすく啖呵は肚にしまつとく

田辺鹿太

口から出してしまった言葉は、再び口の中  
にしまうことは出来ません。やり直しのきか  
ぬ人生。出直しのきかぬ年齢なのです。

いい素質持っているからきつく言い

吉本菁風

これが本当の師弟ですね。めげないで勉強  
して先生の御期待に添いたいものです。

泣き顔を見せては負けるコンバクト

大内朝子

女の辞典には泣き落としという字もあるそ  
うですが、でも泣くのは一人になってからに  
しましょう。負けるの一語が生きています。

昇格を餌に息子が飛ばされる

和田和風

会社人間の御息息を、はらはらと見守つて  
おられる親御様。そして——

二度の職 破格で買うてくれた腕

山本たけし

遠い将来、このように落ち着かれたらど  
んなに良いでしょうね。

正しく明るい人生に乾杯！

夫婦別姓わり勘で飲みにゆく

三浦強一

若いカップルは、それなりに自分達の生活  
を築いて行くのでしょうか。抗いがたい世の流  
れです。

正直へつけ込む貧乏神もいる

興田明

正直者がバカを見る、と世間様は言われま  
す。でも自分で自分を欺く生き方は出来ませ  
ん。賢くて正直な生き方を私もいつも考えて  
います。

めぐりあい花はどこかぬ位置で咲く

百田幸

ドラマの一シーンのよつですね。人生の哀  
歎は一瞬のうちに過ぎて行くのです。

# 私の句

## 六百句記念特集

(4)

〈昭和六十三年〉

おとぼけでいざご救う年の功  
みな何かなやみあるらし十七字  
いただいた生命に余生などはない  
逆立ちをすると約束忘れそう

〈平成元年〉

雑草と私と今日も根くらべ  
夕立して空はちつとも濡れていず  
忘却という休息は老いのもの  
日の丸弁当さわやかに今日は  
ひらめいた色で女の日を通す  
うるのおくやま越えてきました座りだこ  
桃の木に桃の花咲くつねならむ  
混浴を出る時だけは身構える  
あきらめがついて湯豆腐浮いてくる  
もやもやをべラングいっぱい干しました

富岡 温子  
結城 君子  
乾 喜与志  
田村 きみ子  
津村 八重子  
栗谷 春子  
池田 半仙  
土橋 はるお  
田中 紀美代  
永田 俊子  
吉川 寿美  
相馬 一花  
田辺 炎六  
小田川 智重子

汚すまい地球にスベアありません  
幾部屋も空いて夫婦の夜の長さ  
空港に過去の悪夢が渦を巻く  
玄関でにらみをきかす父の靴  
北風に何も語らぬ風ぐるま  
縋帯の白さ甘える人が欲し  
流れ星願う間もなく闇が呑む  
挫折から一つの門が開かれる  
飲みすぎて環状線を二度回り  
人形でおれない笛の音が続く  
愛されて脇役でよし福寿草  
生涯青春あしたの夢を見つづける  
泪などみせない空が碧いから  
ふる里の空でほんとの背伸びする

〈平成二年〉

植村 喜代  
藪田 獭沓  
米田 恭昌  
山田 妙子  
千原 理瑛  
吉田 あずき  
松永 すずむ  
田中 輝子  
神保 拓生  
舟渡 杏花  
門谷 たず子  
松本 元江  
小谷 美ツ千  
岩佐 ダン吉  
秋元 てる

老友に会えば健康たずね合い  
失敗の花が大きく咲きはじめ

花植えて花に似たいと花の守り

門前を掃いて米寿の朝があけ

出発へ夢と現実詰めて行く

掛軸の夢の一字に思うこと

睫の上のにのんと雪降り積もる

露天風呂 月に乳房をぬすまれる

絆とや冠婚葬祭だけの縁

古里の山は黙って見てくれる

想い出を吊り下げている自在鉤

輪廻とや落葉が冬の手にもどる

言わないで良かった本音抱いて寝る

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる

シナリオは神様が書く朝の靴

保護色になれと哀しきアドバイス

種子袋振れば生命の音がする

正直に言えば幸せこわれそう

指荒れていつか異郷の水に慣れ

火を焚けば歓声上げる兵馬備

無冠よし天より高き一樹あり

愛枯れた夫婦が探す冬苺

岩崎 瑞穂  
岸本 木魚

山崎 君子

西尾 美与子

高橋 操漕

辻川 慶子

小寺 花峯

榊本 露児

松川 芳子

松村 迷観子

阿部 進

金村 青湖

村田 善保

内田 結実

芳 鉄心

野村 静雄

西口 忠雄

井上 照子

松本文子

久保 正敏

越村 枯梢

園山 多賀子

白球を裁くその手が白く冴え  
トロイメライ弾く孫囲み座は和む

宝塚 君の思い出僕の夢

棘抜いてあげよう痛みわかるから

ひたすらにつくす女は美しい

情熱の女の帯の夢一字

遍歴の果てのやさしい顔に逢う

考える蛙ポカンと浮いてみる

六十になつて童話を書きはじめ

春衣 軽い話をしてくれる

人妻と夫婦善哉食べてみる

富士山に登る夢見ている米寿

食べなさい眠りなさいと言う野心

晩学や歩幅小さく趣味に生き

花吹雪 常楽我浄と舞いとおせ

師を偲ぶ伍健の腰に伊棹見る

ふつふふたか男と女じゃない

かかる時なんと息子の頼もしい

炎ゆるもの命の限り持ち続く

結局は女房の膝にたちかえり

六歳も六十歳も科つくる

長谷川 司

渥美 弧秀

楊井 二南

福本 英子

寺井 東雲

岸野 あやめ

山川 克子

矢野 佳雲

堀江 光子

上田 柳影

片上 英一

清水 利武

新 正子

岡本 清水

福井 桂香

古川 覚然坊

肥後 和香子

山内 房子

稲本 凡子

岩原 喬水

榊山 隆

一本の葦の雑談水なごむ  
好きな酒飲んで命と仲がよい  
色褪せたのれんに秘めた繁盛記  
纏れ糸解けたら長い愛になる

〔平成四年〕

人生は旅だ遊びだ倫理学  
まっとうな暮しへ開く春の辞書  
気の利いたテールそこは予約席  
泣きに來た海が他人の顔をする  
たそがれて忍の一字を抱きしめる  
産道をひらく力は持っている  
うしろから旅の汽笛が鳴っている  
姑さんと嫁とでなしに出合いたい  
ちちろ虫 階下に妻という他人  
君の名を砂丘に書いて呼んでみる  
一日を惜しむ一睡も惜しまねば  
父の背に生きる答えが書いてある  
他人さまが儲かる話聞いて飲み  
孫と手をつなげば童唄が出る  
齒を白く磨いて好きな歌うたう  
すぐ心開き味方にだまされる  
弱者には耐える痛みが多過ぎる

北山	好笑
吉村	一風
中島	志洋
前田	一枝
齊藤	焔
高杉	千歩
武田	帆雀
野村	京子
黒田	クニ子
西川	和子
乾	隆風
山根	八重
瀧北	博史
春木	圭一郎
梅田	宣司
村馬	一閃
住谷	石舟
太田	幸枝
西原	艶子
美田	旋風
上田	俊路

〔平成五年〕

ふたたびは戻らぬ刻を妻といる  
久々の上野の駅は明るすぎ  
泣いた子へみんな味方になって寄り  
二次会の無い約束の三次会  
ホーム降り忘れた主婦の座に戻り  
日溜まりの落葉 葉になった夢  
狭い門 桜の咲いた知らせ受け

椅子一つ守る無口な父を恋う  
車椅子 花火の音の中に居る  
良い水が出るまで自分の井戸を掘る  
突き破る壁は私を拒まない  
じいちゃんに勝つばあちゃんが嫁に負け  
好きですと書けず花の切手はる  
播種からが罪悪感の米作り  
鏡台に閉じこめてある涙つぼ  
早春の花は私を温くする  
日向ぼこ話上手がそばにいる  
どの国の母にもつらい銃の音  
駄目だとは思えど白寿へ意識する  
母の鞭はがきの表まで続き  
ガンジスに浴す輪廻の浮き沈み

田中	薫
岡本	吉太郎
石尾	かつ乃
藤井	正雄
成重	放任
岩津	ようじ
永峰	伽名子
山海	友照
三宅	つえ子
井上	森生
小倉	アサ
宮崎	シマ子
中井	ゆき
板垣	草丘
浅野	房子
富田	蘭水
島	祥庵
丸山	よし津
工藤	吟笑
酒井	輝
小森	正晴

風鈴を鳴らすくらの風といふ  
朝顔が咲いたとポチと話す  
四面楚歌 台風の目に入り込む  
葬列のうしろ退職金にふれ  
突き放す愛が育てた太い幹  
三十年 車線変更なしの道  
仏壇にいちばんうまい梨がある  
涙を流すたびに人間らしくなる  
誰もでぬ受話器の中に海がある  
仁王門くぐると数珠が手になじむ

〈平成六年〉

濡れ落葉誘い誘われひるの酒  
臺が立ち似たもの夫婦となりました  
返事するように仏の灯が揺れる  
軽やかに降り積む雪の軽からず  
おふくろの自慢の味に逢いに行く  
大空へ彩をとかして亡母を描く  
世界一きれいな妻の指ぎつね  
同じもの食べても妻はおいしそう  
究極の味は晒に巻いてある  
出来不出来あるがどの子もみな宝  
新聞を目で追い耳は妻に貸し

松本 ただし  
小玉 満江  
宮本 欣史子  
須郷 井蛙  
野口 節子  
川崎 ひかり  
大角 正道  
大角 幸代  
西浦 小鹿  
石谷 美恵子  
伊藤 武  
北畑 金治  
堀端 三男  
堀 良江  
池内 かおり  
米田 幸子  
千葉 風樹  
片上 明水  
井上 直次  
白石 春嶺  
田中 文時

すんなりと赤くはなれぬ唐辛子  
親のないのが孝行をせよと言う  
島のごとはなれて住む子の家があり  
勲章をつけて他人の顔になる  
老化する五官の中で肥える舌  
制服を脱ぐ朝 妻よありがとう  
蟬とる子 蟬の時計を知らぬだろ  
丘一つ越えると風は風いでくる  
しっかりと食べ湖を涸らさない  
自分史に書くうまい酒にがい酒  
風見鶏 娘住む空ばかり見る  
光さしけり小さきものの足跡に  
意のままに咲いて生きたし水中花

〈平成七年〉

岸 桂子  
菱田 満秋  
近藤 豊子  
寺田 甚一  
中田 純次  
森松 まつお  
山内 かずお  
山地 マツエ  
榎原 公子  
海老池 洋  
安永 暁子  
小林 一夫  
田中 みね  
福田 多可志  
世森 幸雄  
池永 正雄  
玉置 当代  
清水 絹子  
岩本 美智子  
八十田 洞庵  
高瀬 霜石

# 沙湖抄

## 小出智子選

砂の上歩きつづける一行詩

極月やこころの中の雨季乾季

城のない石垣をじつとみつめる

人情に触れると脆い石垣だ

なれあいを嫌う真つ赤な唐辛子

銀行破綻 ぼくは大根蒔いている

晩学の墨をいびつに擦っている

あくまでも加害者である敗戦忌

鳳仙花はじててははが零れでる

清貧は富貴にまさる目刺し焼く

赤とんぼ番のままに湖へ落つ

香水を振りかけ夢のつづき見る

街路樹の驕りにちちを歩かせる

亡母の声こぼして彼岸花が散る

ファックスで届かぬ里の赤とんぼ

欲望という名で鬼を飼っている

古紙を塞ぐ台詞を練る手酌

やんわりと船場言葉に隙がなし

古希過ぎてためらいもなく赤を着る

母の音色は秋に染まって風になる

砂川市 大橋 政良  
 大阪市 西出 楓楽  
 米子市 澤田 千春  
 倉吉市 米田 幸子  
 鳥取県 鈴木 公弘  
 枚方市 前 たもつ  
 倉吉市 最上 和枝  
 鳥取県 新家 完司  
 和歌山市 木本 朱夏  
 豊中市 田中 正坊  
 尼崎市 田中 薫  
 鳥取市 植田 一京  
 米子市 林 荒介  
 弘前市 佐治千加子  
 唐津市 宗 弘  
 名古屋市 藤井 高子  
 弘前市 相馬 銀波  
 寝屋川市 堀江 光子  
 大阪市 稲本 凡子  
 富田林市 池 森子

岩壁に立ち直してひとりぼち  
 つまづいてから迷信をあてはめる  
 たて横のバランスとれてる絆  
 階下の母も眠れぬようだ妻の留守  
 ブランコを漕ぐふる里に届くまで  
 ふところの寒さは妻も知っている  
 一本の紐優しく解けません  
 とれそうなボタンは妻のことが好き  
 しばらくは綻びのまま聞いてもらう  
 昔話になると存在感がある  
 来年のことなど柿を食べながら  
 全巻が終わったように秋深む  
 少年の記憶を戻すラムネ瓶  
 影ちよつと人間臭い羅漢さま  
 昇りつめると裾野は目線から外れ  
 思い出せぬ街よ 更地の草も枯れ  
 今朝も余震 慣れというのはおそろしい  
 齢が寄るほど人がなつかしくなり  
 風邪引いたゴム紐に似ている疲れ  
 一切を寡黙に付して定退す  
 被災地の人の胸にも赤い羽根  
 祝全快 酒飲めぬのが口惜しい  
 また海に戻す少年期の魚  
 決心が遅すぎた花散っていた  
 日暮れ坂同じところでもまた迷う  
 知らぬまにピエロになっていた歲月

八尾市 宮西 弥生  
 京都市 都倉 求芽  
 和歌山市 森口 美羽  
 黒石市 千葉 風樹  
 鳥取県 土橋 睦子  
 尼崎市 田辺 鹿太  
 宝塚市 永田 暁風  
 青森県 田中 叶  
 寝屋川市 森 茜  
 守口市 結城 君子  
 鳥根県 松本 文子  
 和歌山市 田中 輝子  
 和歌山市 青枝 鉄治  
 旭川市 朝倉 大柏  
 和歌山市 桜井 千秀  
 西宮市 奥田みつ子  
 尼崎市 春城 年代  
 鳥取県 乾 喜代志  
 堺市 桜沢あかり  
 大山市 早川 盛夫  
 箕面市 椎江 清芳  
 広島県 田村 新造  
 米子市 政岡日枝子  
 鳥取県 江原とみお  
 吹田市 山本希久子  
 八尾市 高橋 夕花

雑用にふりまわされている元氣  
 来た道を忘れて花を摘んでいる  
 無欲な耳で雑音左から右へ  
 いろはには脱衣場の箆並ぶ  
 おおまかな母の計算狂いなし  
 森の木と話もできた氣も晴れた  
 大波が来るまでこころ休ませる  
 ゆっくりとでも着実に西へ向く  
 妹の自慢を老母にしてやろう  
 受賞式大阪弁が好きになる  
 一つ持つえくぼに運を握られる  
 十葉の土びんこわれるとき天寿  
 罫の太い便箋選ぶ日暮れ道  
 時間潰しをするお話はありませぬ  
 明日の夢ばかり見て来た認印  
 方円の器へ無理が言いやすい  
 無添加と読んでラベルを信じよう  
 子には子の権利があった懐手  
 価値観の違いを秘めるおもちゃ箱  
 一枚の遺影大事に胸うつろ  
 押し入れのスペース 私の逃げ場  
 里帰りまず兄嫁と握手する  
 虫の声ゆっくり歩く浄土道  
 宝くじ当たたらぬが事故にも遭わず  
 使いふるした鍋に磨きをかけている  
 少々は惚けたくらいが愛される

鳥取県 西原 艶子  
 河内長野市 植村 喜代  
 西宮市 門谷たず子  
 京都市 松川 杜的  
 西宮市 牧瀬富喜子  
 西宮市 西口いわゑ  
 米子市 金山 夕子  
 和歌山市 田中 みね  
 寝屋川市 籠島 恵子  
 今治市 渡辺 南奉  
 米子市 石垣 花子  
 米子市 白根 ふみ  
 宝塚市 丸山よし津  
 阪南市 深日白光子  
 兵庫県 遠山 可住  
 米子市 寺沢みど里  
 豊中市 辻川 慶子  
 鳥取県 土橋 螢  
 富田林市 片岡智恵子  
 大阪市 上田 柳影  
 堺市 たにひろこ  
 高槻市 守先 伸子  
 唐津市 岩崎 實  
 青森市 漆戸凡々子  
 八尾市 宮崎シマ子  
 出雲市 園山多賀子

太陽の缶詰 柿は食べ頃  
 とりやんせ許されるならとりやんせ  
 鳩時計秋には秋の音でなる  
 納屋を出たかがし雀と顔なじみ  
 口喧嘩白黒ついたことがない  
 米倉に米を満たした親父の自負  
 秋風にうつつ猛暑もう忘れ  
 玉手箱うっかり覗き鬱続く  
 猛暑猛暑菜のような雨が降り  
 二つの耳で聞いても白は白のまま  
 反省をした夜長い手紙書く  
 優越感 優しいことばかけてくる  
 シベリアの俺を生かした妻の文  
 身についた錆に気付かぬから困る  
 老いて知る涙に重さあることを  
 妥協する潮時を待つ腕を組む  
 追憶の所々は補修され  
 しっかりと書く国勢調査一人分  
 冥土への土産ばなしがまだ足りぬ  
 銘柄の味におとらぬ自作米  
 いい娘だね嘘をつけない眼をしてる  
 メンバーが揃って山車がグイと出る  
 後ろ漕ぐ妻を疑ったりしない  
 諦め切ってみればみんないい孫だ  
 ハンカチで拭けない泪ためている  
 その人でいつも明るい部屋の色

和歌山市 榎原 公子  
 和歌山市 福井 桂香  
 尼崎市 春城武庫坊  
 鳥取市 前田 一枝  
 松原市 小池しげお  
 和歌山市 細川 稚代  
 岸和田市 古野 ひで  
 和歌山市 山口三千子  
 今治市 越智 一水  
 和歌山市 吉村さち子  
 出雲市 吉岡さみえ  
 和歌山市 岩本美智子  
 倉吉市 奥谷 弘朗  
 八尾市 吉村 一風  
 大阪市 日坂 秋子  
 出雲市 久谷まこと  
 今治市 渡邊伊津志  
 大阪市 板東 倫子  
 八尾市 片上 英一  
 福岡県 本田 忠男  
 大阪市 榎本 藤児  
 唐津市 仁部 四郎  
 鳥取県 小谷美ツ千  
 岡山県 小林 妻子  
 和歌山市 福本 英子  
 大阪市 本間満津子

目の高さ変えて足元見えてきた  
 児の瞳吾見る時もたじろがず  
 台風情報冷蔵庫は満杯だ  
 窓口の一輪差しに救われる  
 知恵袋嫁は煙たい者にする  
 聞き上手になってあしたを考える  
 倦怠期真実憎い訳じゃない  
 米櫃の米があしたを考える  
 上段にかまえて呼吸整える  
 禁煙の心を乱す客が来る  
 お陰様でおかげさまでという笑顔  
 歳相応のつましい暮らし好しとせん  
 金が子を生まなくなつてから無口  
 花名刺ときどき妻を刺激する  
 怖いこと雷だけにして欲しい  
 注ぎ上手つがれ上手のうまい酒  
 埋み火が風の誘いを待っている  
 遠近法駆使して妻の長寿策  
 お隣の花が見事に咲いている  
 相槌を打っておくすりたんとくれ  
 風向きが変り長蛇の列にいる  
 師の句碑の草を抜きつつ秋深む  
 もう過去は追うまい鬼が背で笑う  
 寝ついた児竿売りが来てまた泣かす  
 賞罰もなく秋は深まるばかりなり  
 気持ちいい朝だ散歩が長くなる

大阪市 神夏磯典子  
 富田林市 中井 アキ  
 芦屋市 黒田 能子  
 海南市 三宅 保州  
 鳥取県 権代 康女  
 貝塚市 池田寿美子  
 岸和田市 田中 文時  
 倉敷市 小野 克枝  
 和歌山市 松崎 幸子  
 枚方市 濱田 良知  
 和歌山市 宮口 克子  
 堺市 山本 半銭  
 高槻市 乙倉 武史  
 八尾市 山下美津留  
 弘前市 中山 雅城  
 札幌市 三浦 強一  
 高槻市 川島颯云児  
 奈良市 米田 恭昌  
 松原市 玉置 重人  
 寝屋川市 平松かすみ  
 藤井寺市 田中 透太  
 香川県 新川マサエ  
 岡山県 山本 玉恵  
 米子市 木村富美子  
 今治市 塩路よしみ  
 香川県 川崎ひかり

湯上がりの一杯籠が緩みだし  
 メトロノームわたしを失語症にする  
 胸の火を吹き消すように雪が舞う  
 京訛り皆優しい人に見え  
 輿担ぐ黄毛の娘の根は優し  
 ローカル線楽しい視野の窓がある  
 八十の手習い手垢の辞書を繰る  
 再会の旅みちのくに友が待つ  
 時折は婦唱夫随もあつてよし  
 口コミで買う究極のやせ薬  
 恥バネにまた新しい歩を刻む  
 成績は総てじゃないと父が言う  
 二階にも下にも読みさしの本がある  
 倅を探して八十路まで歩き  
 あこがれの独り生活に白い風  
 長生きがご都合のよい耳にさせ  
 奴風所詮はたぐり寄せられる

大阪市 大河末佐子  
 鳥取県 田村きみ子  
 今治市 中村 好恵  
 中島 志洋  
 東京都 瀬戸きん子  
 和歌山市 池永 正雄  
 静岡市 三浦 つね  
 倉敷市 田辺 灸六  
 羽曳野市 麻野 幽玄  
 横浜市 清水 潮華  
 和歌山県 杉山 精子  
 和歌山県 藤井 春子  
 羽曳野市 芦田 絢子  
 岡山県 富坂 志重  
 唐津市 浜本 ちよ  
 鳥取県 岩原 喬水  
 大阪市 中村 淳子

政良さんの句。砂の上を歩く思は時によって異なるかも知れないが、その重い足取りは、川柳の道を歩くに似ていると言う。言い古されてはいるが、「一行詩」でなくてはならない。さり気なく書かれて思いの深い句です。楓葉さんの句。この一年、作者の心の中には大きなうねりがありました。ようやく平常のリズムを取り戻された回顧の一句です。千春さんの句。城跡の石垣は過去への広がりをおぼせて、詩の世界に引き込まれてゆくものがあり、作者の思いを共有させて頂きました。選をさせて頂いていますと、厳しい声や参考になる声を聞かせてもらっています。結果として現在のかたちになっていますが、二句出させて頂けることを願っています。

## 尚香のむ

八木千代選

三枚におろし素性は隠される

満月にすっぱり切り切れ動けない

納期限この世の事は治まりぬ

似たような風景オリジナルの道

私より若いと惜しむ死亡記事

人間の匂いしている古本屋

物笑いの種になるなよホトトギス

老いた今 負ける勇気を惜しまない

好ましい音のひとつに種袋

大皿も小皿も秋は欠けやすい

飯の世に飯の姿でいる私

白紙いちまい軽いコントで済まぬなり

白猫をだらりと抱いて女の時間

悲しみは手の甲にのせ飼いならず

冬空と一度握手をしておこう

雪空を仰げば手紙降ってくる

髪洗う 昨日一昨日押しやって

消えてしまった虹を探しにローヒール

円をかくとても大事な日課です

米子市 政岡日枝子

西宮市 西口いわゑ

西宮市 牧瀬富喜子

島根県 松本 文字

米子市 新 正子

和歌山市 古久保和子

鳥取県 さえきやえ

米子市 小塩智加恵

寝屋川市 宮崎 菜月

米子市 青戸 田鶴

西宮市 奥田みつ子

藤井寺市 高田美代子

尼崎市 春城 年代

米子市 茂理 高代

和歌山市 田中 輝子

米子市 林 瑞枝

名古屋市 藤井 高子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 野坂 なみ

としよりの無駄を無駄とは思わない  
千円の靴が強く可哀相

レモン噛んで言っつていいこといえぬこと

スランプな午後 錠剤はなまめかし

道草いくつか 仏にも会いました

背凭れのやさしい椅子に根を下ろす

体調よろし柿もみかんも美しい

モノクロの夢を染めゆく冬薔薇

糸口が見えない 秋の灯となりぬ

塩ふって無駄な力を抜いてやる

なにかして上げたい思い なんだろう

いつも何か読んでても何も知らぬ母

捨て石でよしバランス揺るがないための

踏み台の視点 見通したてている

立場を変えて見ればわたしが許せない

影ぼうしひとりで踏むは悲しすぎ

北向きになるとわたしが見えてくる

梯子の下で勝手なことを言わないで

極限に追いつめられて莫迦騒ぎ

やさし過ぎる男を嘆く床柱

凹凸をつける乱が起こりそう

叫びたいことあり太鼓鳴り止まず

秋のひまわり何もかも晩生なり

吹き荒れてみても女の砂時計

間をおいて見るから雲も美しい

吹田市 栗谷 春子

鳥取県 田村きみ子

堺市 桜沢あかり

寝屋川市 森 茜

八尾市 宮西 弥生

和歌山市 木本 朱夏

大阪市 堀 いくの

米子市 林 風子

堺市 たにひらこ

米子市 寺沢みどり

大阪市 本間満津子

米子市 石垣 花子

和歌山市 桜井 千秀

芦屋市 黒田 能子

鳥取県 岩崎みさ江

大阪市 鍛原 千里

和歌山市 榎原 公子

八尾市 村上ミツ子

米子市 金山 夕子

熊本市 永田 俊子

倉吉市 米田 幸子

富田林市 片岡智恵子

枚方市 森本 節子

倉敷市 小野 克枝

米子市 澤田 千春

蟻の話聞こえるような蟻の列

孤独感あら手あら手でじわり来る

朝晩に育ちそこねた木を見舞う

「礎」に亡母の呪文のありがたや

第三者の前での彼女見ていよう

下り坂の吐息を風に盗まれる

誰かれに叛きコスモス味方にす

私がわたしに惚れた竹の秋

雨の日は夫婦の話 底をつく

他人事のように身の上ばなしなど

胡坐から椅子へ明治も軽くなり

秋の天 言いたいことの山ほどに

古い二人ひよつとこ面でもつけようか

相当な震度でないときめかぬ

ドンキホーテになってタブーを破りたい

高笑い隣も元氣いらしい

怠け癖まだひきずつて冬にいる

潮騒を静かに聴いているのです

太陽の真下で消えた影法師

お互いに下取りきかず添い遂げる

里芋がやんわり煮えて第二章

菓子パンを食べて過ごして一日か

それからは心を鬼に子離れする

風化した割符 文箱の底にある

指先を他人に向ける軽い罪

弘前市 佐治千加子

松江市 安食 友子

米子市 中井 ゆき

岡山県 土居ひでの

寝屋川市 籠島 恵子

鳥取県 羽津川公乃

米子市 白根 ふみ

和歌山県 小倉 アサ

出雲市 園山多賀子

岡山県 矢内寿恵子

和歌山県 福本 英子

羽曳野市 芦田 絢子

岡山県 山本 玉恵

倉吉市 野口 節子

貝塚市 池田寿美子

米子市 木村富美子

八尾市 高杉 千歩

鳥取市 小谷美つ千

和歌山県 宮口 克子

和歌山県 田中 みね

今治市 野村 京子

寝屋川市 岸野あやめ

米子市 木村 春枝

今治市 塩路よしみ

和歌山県 福井 桂香

ひとつふたつは許してあげる萩こぼれ  
綻びを繕う爪を丸く切る

野良犬をいとしく思う秋なれや

止まること知らぬ文化に不安抱く

墓参り背中擦った感触よ

今日もまた倅せなふり努力する

今では辛抱実行と書き替えた

マイウエー母に遮断機ないらしい

さりげなく蹴られた石が目を覚ます

スランプになって私の海が風ぐ

ゆるゆると浮世に戻る肘枕

核家族思い思いの皿洗う

句読点打つたび故郷遠くなる

シナリオになかったきょうを生きている

西宮市 門谷たず子

大阪市 三浦千津子

八尾市 高橋 夕花

大阪市 町田 達子

堺市 山本 半銭

岡山県 富坂 志重

寝屋川市 井上すみれ

大阪市 日阪 秋子

豊中市 辻川 慶子

松江市 佐野木みえ

寝屋川市 堀江 光子

兵庫県 中野とよ子

香川県 川崎ひかり

宝塚市 丸山よし津

政岡日枝子さんの句は素性を隠す魚です。ふつう、その素性を

かくすためには美しい衣を着せます。ペールで覆います。この魚

は自分の中身を曝して、我が身の弱所を優位に立たせています。

作者も捨て身です。西口いわゑさんの月は、研ぎ澄まされた刃先

でしょうか。すべてを刺し通してなお迫る月光。切られたのは内

なる魂。これでは動けません。牧瀨富喜子さんの納期限こそ人生

そのものです。神さまはお忙しいので、世のことをみんな把握は

難しいでしょう。そこで期限が生きてきます。この世の営みは生

きるも死ぬも動くも眠るも、すべからく納期限あればこそ。松本

文字さんの道は私にも思い当たることがあります。全くオリジナル

の生きかた、誰にも転嫁できない選択で歩いた道に、昔が立ち

はだつたり、一昨日が待ちぶせしたりして、はて、これはいつかの風景。母も通つたらしい道。不思議です。ねえ。



毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

川柳クラブわたの花 片上 英一報

枕屏風虚ろな母を守るよに  
おおらかな心を持って君を待つ  
ひざ枕一炊の夢何を見る  
幼子が眠るまくらはドラエモン  
居酒屋で子との結びを確かめる  
結び目がだんだんゆるくなる不安  
決心がついたら急に腹がへり  
満月に未練な背なをのぞかれる  
さりげなく未練をかくす処世術  
蟬取りの孫が未練の登ごはん  
火種まくおんがやけどしたそうな  
妻病んで初めて炊いた三分粥  
秋を呼ぶ雲が流れる髪洗つ  
机上より見下ろす雲に二の富士  
茸雲あの恐ろしき黒い雨  
振り返らぬ子を見送って夏の雲  
よっやくに雨雲来るもすぐに晴れ  
十五夜に風流のない雲が出る  
雲掴むよっくな話のれもせず

シマ子 弘直 龍 じゅん子 一風 ミツ子 剛治 隆 泰成 幸枝 朝子 君江 春子 道子 トシエ ますみ 明子 幸子 春江

ひまわりのバックに入道雲がいい  
葉さんの髭が笑った雲の峰  
いつ晴れる原爆の雲この悲願  
紺青の真つ只中にちぎれ雲  
枯れ落ち葉水面の雲と行き違い

堺川柳会 河内 月子報

車椅子明日の試歩に夢がある  
黒子の反乱主役を食って歩き出す  
活き造り罪の意識の箸の先  
一気飲み罪を遊びで救急車  
つい軽い荷をさげたがる私の手  
愛すべきゴミがいびきをかいている  
妻と言う美学でゴミは作らない  
罰金はいくらと罪の意識なし  
もう路線変えずに歩く真珠婚  
罪意識一人相撲になっている  
塵の山片付けに母上京す  
もつとい事がありそうだと歩く  
写経する穂先で洗う罪の影  
地球破壊シラクに届けこの怒り  
あの人はいい人ですが罪は罪  
闇米を運んだ罪が肩にあって  
罪のない嘘をふんふん聞いてやり  
大股の道へわたしたは忙しい  
回り道こつこつ懲りず歩きます  
時々丸めた罪が疼きます  
深呼吸してからエイッとゴミに出し  
ポイ捨てに罪のかけらもない顔だ

春蘭 途女 紀美女 道胤 みつこ たつお 美子 頂留子 りつえ 半銭 洞庵 美代子 勇太 八千代 冬虹 喜代子 菁風 ころも 満州 かりん 春香 小雪

曖昧な返事で待たす罪人  
生涯を地味に歩いた日記帳  
爽やかに最後の日まで歩きたい  
職退いてぶらり歩きが多くなり  
ゴミにされ森の木が泣く物余り  
矢印を必死でたどるターミナル

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

うれしきはゆるゆる走る汽車の旅  
汽笛遠く聞いているのかな夜の霧  
二日酔い行こか休もかだるい朝  
チャンバラのテレビの音に気がつかい  
音たててスーブ飲む子を黙らせてる  
リストラは一円玉の音がする  
雨の音いつかの夢がまた戻る  
あの日から積木くずれの音のまま  
曲つたら視野が開けるかも知れぬ  
愛のある方へ方へと曲がる松  
普段着て行くお見合に親が惚れ

お祭りに弾むボインのギャルみこし  
円高に弾みをつけるバスポート  
黙つとく貰った松の木枯れたこと  
報道のマル秘は困る核疑惑  
虫だって生きる秘密の毒をもつ  
妻だけが知らぬ話で通夜の客  
顔に出るタイプで秘密ありません  
あの人があふところ刀と言うお方

摩耶 一三三 彰 樟 健吾 文 香住 弘直 留吉 シマ子 千枝子 欣美子 喜美子 能子 田実子 あずき 清芳 敏光 狸村 昭二 一斉 洞庵 金太 朝一

岸和田川柳会 田中 文時報

考えが休み休みのふところ手  
昔トス今ピストルを呑んで居る  
小さい力士ふところ深き攻めあぐね  
ふところをポンと叩いた纏め役  
ふところは空でも大法螺吹く男  
弁解を見通す妻のうす笑い  
素顔ではできぬ弁解酒にさせ  
弁解に秘書の名を挙げ逃げを打つ  
出しゃばりが余計な弁解して揉める  
はがらかに見せて左遷の駅を発つ  
はがらかな子も妙妙になる受験  
はがらかなお人でストレスためている  
さざえさんに負けぬわが家のはがらかさ  
はがらかな友ひとりいて座がなごみ  
はがらかな嫁が一家が丸くなり  
核のある地球はがらかにほなれず  
ライバルを葬りはがらかさうな顔  
天衣無縫持つて生まれたよい笑顔

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

信博 文時 東雲 盛之 萬的 呂万 甚一 通彦 柳宏子 苑子 富志子 さよ子 ひで 一弥 ダン吉 勝晴 白光子 善代 志重 禅心 富士野 知世 すみれ 伊久栄 久子

自信もつ余裕しやくしやく辺りに目  
余るほど植えてなりだし困る処置  
龍彦ちゃん余りの無惨さ胸いたむ  
好天の垂れ穂へ余刺の重い風  
余ってる力が光るボランテア  
亡父言つた余韻が残るあの言葉  
身に余る恩を覚えて虫の声  
温泉に昼間のんびりいい湯だな  
昼下がり田圃の畦で小会議  
残りもの寄せて留守居の母の昼

川柳塔おつぱご吟社

木村あきら報

美惠子 光水 秀香 亜矢 智恵子 甫正 吟平 旭泉 のぶ子 つた子 くに子 ひかり あきら 吟笑 かおり マツエ はつ恵 坊太郎 放任 よしみ いさむ ふみ 治延 正雪 マサエ チカエ 中2 なみ子

風鈴の音色も冴える秋の風  
川柳後案吟社 従野 健一報 文仙  
飽食の街でモラルを食へつくす  
肩寄せてごらん心が熱くなる  
丁寧な道を教わり畏まり  
省略をまだ知らぬ少年達の汗  
風と私の戯れだった午前二時  
騙された耳が屋台に落ちて居る  
またしても古きを追ってこじれさせ  
仮設の軒に朝のピアスの生き生きと  
青春の切符で古希は詐欺ですよ  
草むらの小さな秋を書きとめる  
太陽の笑顔に感謝穂が垂れる  
底辺で枕を高くする男

佳句地十選 (11月号から)

井上喜 醉

立ち上がる街にコスモス乱れ咲く  
人生の余白きつちり埋めていこ  
夫婦茶碗欠けたくはない五十年  
泥舟に乗せられたのは軽い舌  
寝言まで言つた大役無事に終え  
ハンドルは妻にまかせている平和  
若い氣でいても鏡は正直な  
つまりいた石を忘れないように  
山水画掛けて聞こえる滝の音  
今日も無事それから上は望むまい

知香子 みよ子 重人 森子 実満 鉄治 治延 静風 一浪

いまもなお亡母の茶碗で食べてます  
皺の腕細くなったと秋思の夜

この駅に降りれば会えるか友の事  
川の字が猫に変わって老夫婦

久しぶり墓参をすれば連れが出来  
ポイントの切り替え違ふ白昼夢

売り家の庭に君子蘭一鉢  
花束に父の涙が堰を切り

年金を待つて器の独り言

東大阪川柳会

森下

愛論報

日本から何かが消えた五十年  
五十年まだ人生の二幕目

キノコ雲渴きを忍ぶ五十年  
恥を知る限り一本道を行く

恥をかく度に大人になっていく  
恥かいてかいて一人前の腕

青春の伸とりもったあのポスト  
少年の夢を運んで来たポスト

鳥合の衆ポスト村山次は誰  
芽が出たは掘り残された芋の意地

残るほどあればパートに出さぬ妻  
好物を最後に残す一人っ子

残高の無い通帳がゴロゴロと  
がま蛙天下をとった面構え

ビール腹殿様蛙に勝っている  
年の功蛙に水と逃げきろう

鳴く声が悪い蛙も雨不足

まさお  
柳五郎

博友

青銅

吟平

照路

草風

秋月

鮫虎狼

一志

頂留子

庸佑

愛論

湖風

文秋

孤舟

恭昌

朝子  
賢子  
シマ子  
太一  
度  
東雲  
弘直  
猪太郎  
三重子  
章久

高槻川柳サークル卯の花 川島風云児報

実力がないからでかい声になる  
肩の力抜くと仕掛けがよく見える

ライバルの影思い切り踏んでおく  
不用意に虎の尻尾を踏みつけた

踏み慣れた道と別れてスニーカー  
いつまでも戦争の影を踏んでいる

薄氷を踏んで森の静寂を乱す  
八月の記憶うすれて行く平和

クラス会タイムスリップする記憶  
妻の記憶は自分有利な事ばかり

爆音が記憶をよぎる防空壕  
モノクロで過去の記憶をたどらせる

母の記憶へ確かなものがひとつある  
敗戦の記憶あかるいりんごの唄

おぼろげな記憶にひたる秋の酒  
まだ元氣とほげ上手な姑と居る

息子等と考え合わせ老い静か  
考えてもどうにもならぬ事だらけ

考えてみたが答は一つだけ  
考えの変わらぬうちに急かされる

考えすぎては父の良い返事  
もうそろそろ考えよつかアデランス

妻に勝つことだけをひたすら考える  
逢うたびに上手な別れ考える

考えておんなの駅へ来てしまふ  
横槍をしごく気配の総裁選

鈴虫の音に聞きほれてする長湯

しげお

武庫坊

英一

あきら

秀夫

彰一

惠美子

マツエ

庸佑

東雲

稲子

二南

節子

重人

求芽

静江  
ふみ  
ルイ子  
艶子  
克治  
茶の子  
芳子  
波留吉  
諷云児  
薫  
猿沓  
よ志子

こだわりを捨てると澄んで来た絵の具  
嘘まこと揺れが止まらぬ耳飾り

本人が目立てばそれでよい見合い

溝口川柳会 小西 雄々報

告げ口をされて心が疼きます  
告げ口をされて忍従だと思ふ

告げ口へ耐えてにっこり倍返し  
告げ口を真に受け気持ゆらく母

告げ口が好きな男の出世欲  
告げ口をされても道理通します

告げ口は心さみしいものと知り  
ガムテープ張って告げ口ふさぎたい

口裏を合わす告げ口 白い風  
告げ口が一人歩きをして困る

南大阪川柳会 金井 文秋報

募洗い尽くせなかつた詫びを言っ  
あだし野の風に落葉が渦を巻く

他人から見ればもの足りない渦だ  
人の渦無駄な抵抗せず流れ

尽くしたい人を持つてる花時計  
綱渡り我が人生の浮き沈み

再会に話は尽きぬ同期生  
パーゲンを漁る女のスリルかも

湯を落とす渦に安心感がある  
泣きごととは決して言わぬ細い肩

苦しみに耐えて人間らしくなる  
エリートな渦でもがいてはかりいる

澄子

龍小

白漢子

豊枝

正光

智恵子

静江

鈴枝

久子

康女

信敬

雄々

弘子

楓楽

萬的

重人  
庸佑  
千里  
勝美  
志華子  
文秋  
度  
柳伸  
憲太郎  
凡子

良心を売って苦しさから逃れ

船頭の竿一本の川下り

母の辞書尽くすことしか書いてない

ぬけぬけと飲んでいるのは税金で

ぬけぬけと真実の壁に嘘を塗る

万引のスリルへのめりこむ速さ

初物のフグの白子を食うスリル

声かけてけんかの渦にまきこまれ

尽くしても足りない亡母へ写経する

顔色の奥が語っているスリル

無免許で飲酒運転してみたい

やる気満々彼の行くとこ渦が出来

新築の柱に染みている苦勞

暴走ヘスリルもとめる青春期

公約を守り渦中の人となり

節高い指尽くしたとは言わず

残されて四十年のお香たたく

川柳大坂

坊農

柳弘報

あの人はとても律義で優しい子

交流と言う名の集団見合い場

このブラン一生のユメ託してる

空白なブランの中に俺がいる

交流会本音で喋る国言葉

空席に胸ときめかせあな待つ

どちらかが折れているのか丸い仲

敬老の日にだけ家にいる祖父母

義理返す生まれた所にブーメラン

ポケベルで交流秘密のあるふたり

寿美

真砂

柳宏子

東雲

悟郎

良

章久

頂留子

トミ子

シメ子

国公

三男

公一

信博

智久

千梢

民代

交流があつて互いの長を知る

交流は膳をまたいでく握手

旅プラン犬一匹の議論する

交流がついはずんでる空銃子

交流で何とか切つ掛けつかみたい

兄弟が多くてプランまた流れ

暇だけは充分老いの旅プラン

すくすくと交流の場に育つ愛

核実験してて反対派を非難

披露宴ひみつの交流バラされる

秋夜長プランで走る時刻表

還暦が米寿を祝う親子酒

敬老が敬老介抱してる過疎

敬老へ夫婦茶わんが揃つて

都会派の敬老ミナミをぶらついで

長生きの秘訣聞かれる敬老会

敬老日うれしいキヌを待つてます

草の根の交流肌の色越えて

齒の浮いた敬老祝辞聞いている

老いてなお人敬いで長寿なり

竹原川柳会

時広

一路報

私だけ守るあなたはスーパーマン

体育祭いつもとちがう青い空

大樹一本故郷は美しいところ

大空は下界の暑さわかるまい

大丈夫母の言葉に励まされ

ベタ風の大海原が不気味なり

大好きな秋が詩人にしてくれる

末坊

希久志

柳昌

美花

多香

司

しげお

雅巢

本蔭椿

川童

一步

まつお

鉄心

洛醉

比呂志

敏

重人

金太

美津留

柳弘

労働者ですが大きな肝がある

てのひらの大きな父にある温み

離れたら解る大きい父の影

ふところ手しつよい知恵でこない

傷心へふところ抜ける秋の風

ふところの大きな人について行く

いつもいつもふところにある石の塔

母がまだ山ふところに独り住む

少年の夢をかえなえた翼です

ゆつくりと余生の翼置いてある

六十路だつて翼はまだ欲しい

離解る翼の中の温もりよ

もし翼あれば逢いたい人がいる

宙返り燕は翼強くする

少年よ翼ひろげて夢を追え

休み過ぎた翼が駄目になっている

大空を吸い取り海は深い色

ほたる川柳同好会

井上

直次報

せり市の指は口ほど物を言う

紙障子指の穴から出る笑顔

ゴルフアールは指のつけ根で勝負する

指先で人形泣かせ客泣かせ

あの時にお金惜しんだ指輪です

旅土産小指の分は宅配便

愛ひとつ指からこぼれ戻らない

呼鈴の指が思案をして困る

休日の料理まかせば指を切り

もてなしの酒の追加は指で言い

正宏

一枝

静風

笹舟

静佳

勲

笑子

房子

節夫

規代

貞子

清水

栄恵

螢

のぼら

菁居

一路

福一

眞郎

純次

直次

方郎

祥風

保子

瀧小

恭子

昭子

後ろ指振り返られて手招きし  
 事もなく暮しに慣れた貯金箱  
 使うだけ貯まってくれた井戸の水  
 貯めに貯め使わず逝きし友あわれ  
 あの世には持つて行けぬに貯める癖  
 貯めてから貯めてからとて兎小屋  
 年金をコツコツ貯めて孫に遣る  
 日々貯めてばあつと旅行主婦の夢  
 何べんも貯めて味わうわしは牛  
 貯金よりローンの額を彼女聞き  
 貯めていろいろ悩むもあるらしい  
 貯めるより使い上手とあきらめる  
 神さんはきつといてはる百度石  
 神仏に妻の安産願う医者  
 靴紐を結び直して十秒前  
 休ませてあげたい父の古い靴

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

酒入れは無口な男よく喋り  
 三人連れ名護屋城跡は秋時雨  
 若き日の憧れ今も持ち続け  
 良心をかすかに信じ印を押す  
 ライバルを避けて渡った石の橋  
 追伸に息子の願ひ込めてある  
 姑の目と耳をのがれて夢ホテル  
 涙腺が溢れるニュース多過ぎる  
 二代目へ梯子を外す祖父の愛  
 憧れる弥勒菩薩の横顔に  
 吉報を待つ日の日脚長すぎる

ちぎれ雲夜には消えよ名月だ  
 意気込みが手にとるように感じられ  
 次の日に続く喜び分かち合い  
 落陽の速さに予定こぼれ落ち  
 大部屋のカーテンレールに芸の虫

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

恥いくつ重ねて座る回り椅子  
 菊花展などは知らずに咲く野菊  
 乗り移る心を弥陀の像に彫る  
 軒の深さへ太る暇ない女紋  
 来客へ秋満載の市場籠  
 抒情詩にひたる一時期の雨  
 昔噺が無性にしたい秋夜長  
 移り気の性が哀しい髪洗う  
 御近所へ五感澄ましている移転  
 移り気な私のわるを認めてる  
 どの星も優しく光る秋の夜  
 移り気な人でみんなを振り回す  
 吹く風にいのがあずけて木が太る  
 太つての方が好きだと言つたはず  
 苦しみを分けあい太くなる絆  
 恥かいた事も話せる歳になり  
 退職後その晩学を恥とせず  
 生きのびて恥の上塗りしています  
 行間にひっそり恥も埋めておく  
 恥を知る男が残す懺悔録  
 優勝の美酒おとこ涙を恥とせず  
 恥らいがこぼれ女に色香みる

恥をかかすとこなごなになる白い皿  
 大らかな天地に恥じめ母の海  
 恥かいて色の増えたる絵の具箱  
 いつも本気になってしまつて恥をかく  
 恥かいてかけがえのない知恵もらう  
 恥多き指が数える銭の音  
 合掌の指から洩れる恥の数  
 太い目の女性と豊かなる会話

愚痴いっぱい無口な母は聞けばかり  
 取る受話器無口のまんままたも鳴る  
 朝がえり妻の無口が恐ろしい  
 賛成の手だけは上げている無口  
 香典の返しを貰う日の早さ  
 ネットタイの派手子供等に負けてない  
 同窓会リードしている蝶ネットタイ  
 師の門を叩くネットタイ締め直す  
 出発に父がネットタイ締めてくれ  
 ネットタイをきつちり締める面接日

輝子 めぐみ 公子 美羽 富美子 紀美女 稚代 克子 弘治 末貞一 鹿太 紫香 定人 夢之助 十四郎 向西 尚利 勇次郎

尼崎小園川柳会 立谷勇次郎報  
 はびきの市民川柳会 榎本 吐来報  
 点数に数えられない医者の腕  
 アンケート職業欄で手が止まる  
 政治の臭い残したままの廃止線  
 割勘は出来れば遠慮したい下戸  
 天高く味覚の秋にカメラ飲む  
 形状記憶シャツは賢くなりました  
 ポートタワーに復興神戸の輝く灯

晋 俊男 聡 かつみ 美喜 みつこ 四三郎

何となく聞いた言葉が耳につき  
只今の声が何かを提げている  
良い天気二階同士がご挨拶

ベランダの二階同士のお付き合  
階段を孫がとりもつ二世帯

お二階で威張らせておく嫁の知恵  
夕ごはん猫が最初におりてくる

幸せな音が二階を降りて来る  
あなたの浮気じやないから困るのよ

妻の愛野菜が少し多すぎる  
長生きをしてやと妻に言うてある

狙われて困っています僕の椅子  
名利を傷つけ旅の記念とは

記念品始末したと判る品  
腕白の記念に傷がまだ残り

廃校に記念樹だけが咲き残る  
治つたら飲む約束を置いてくる

お見舞いの言葉やさしい嘘も混ぜ  
見舞い客帰って熱がぶり返す

見舞い客帰って熱がぶり返す

城北川柳会

吐田

公一報

無料バス使える幸せ噛みしめる  
職を持つ嫁が家風をはじきだす

沿線の更地に初盆の供え花  
北国に奢る平家の夢の跡

旅帰り一汁一菜性に合う  
公園の樹々もあえて雨恋し

公園の樹々もあえて雨恋し

さとみ 重人 敏

治代

泰来

吐来

ゲン吉

一壺

扶美代

美代子

たけし

まつお

洞庵

利武

希代司

金太

絢子

志洋

りつえ

鴨川に涼を求めて老い二人  
清潔なシャツで人柄忍ばれる  
出世した友が大きな名刺くれ  
プレミアで生きる余生を感謝する

散髪の色跡青し白いシャツ  
すんなりと家風に溶ける嫁の腕

部分品まめに手入れをして達者  
家風など古いと嫁につく息子

シベリアに八十路を埋めて叫ぶ声  
風なくて竹の声を聴く嵯峨野道

受け皿を妻は大事に持ちつづけ  
別姓を望む家族とは何だろう

水中花私もほしい花言葉  
過疎などと言いま先祖の墓があり

残暑への命を燃やす蟬の声  
束縛の嫌いな花を投げ入れに

親友の訃を聞く受話器まだふるえ  
高原の残暑の空に赤トンボ

へそくりがばれてしもうた木津信で  
ラモンテイー短き逢瀬君と僕

ガラス器にひやしうどんを盛る残暑  
肩の荷をおろしてからの母の老い

子には子の家風生れる新家庭

三幸川柳教室

非常袋隅へ隅へと追いやられ  
カタカナ語覚えられない糠袋

政界は袋小路の無策ぶり  
繕って堪忍ぶくろ厚くなる

三宅

保州報

登美子 久留美 扇帆 トヨ子 昭子 達子 満津子 あい子 寿美子 睦子 典子 倫子 高栄 あき子 純子 とし子 柳影 白峰 八重 春蘭 一枝 公一

久留美

扇帆

トヨ子

昭子

達子

満津子

あい子

寿美子

睦子

典子

倫子

高栄

あき子

純子

とし子

兄妹が同じ夢みる種袋  
談合の袋欺瞞に充ちている  
謎が解け笑い袋が締まらない  
郷愁を秘めて行脚の頭陀袋

いい意見受け売りしての私です  
同感でないがここらで妥協する

皆が皆同感すると怖くなる  
同感の相槌打って敵が増え

前向きに考えますと顔を立て  
本人の前では君の言う通り

シングル思考同感だとは娘に言えず  
同感をして矢面に立たされる

抗議しに行つて相槌打つてくる  
言い得たと同感してる投書欄

孫達に遊ばれるのも消夏法  
ままごとで使い走りは男の子

遊ぶため大学に行く病んだ国  
我が家では貧乏神がよく遊ぶ

遊んでいる間にからまれた蜘蛛の糸  
遊べない子が捨て犬を抱いている

遊び疲れた服伸びている衣紋掛け  
気弱さに愛のサインが掴めない

グーチヨキバームんな弱さを二つ持つ  
ピアニシモ私の歌うひとり言

弱そうな夫に髭をつけて見る  
人間の弱さよとかく群れたがり

川柳塔鹿野みか月

土橋

保州

保州

百合子 町子 さち子 正雄 初子 美羽 当代 親路 みね 章子 朱夏 三子子 義男 正一 孝子 秀男 鉄治 美智子 高夫 千秀 めぐみ 武春 和子 よし子 保州 隆風

町子

さち子

正雄

初子

美羽

当代

親路

みね

章子

朱夏

三子子

義男

正一

孝子

秀男

黙々と子の見る背中で生きている  
 焦っても寝言大きな声が出ず  
 菊なますかなう地酒に老いの幸  
 冷やでよし爛はなおよし妻と呑む  
 両の手を合わせ懺悔の声が出る  
 いやなことはかり赤色灯走る  
 赤い羽根胸に心も満ち足りる  
 赤い花福祉の庭に咲かせよう  
 葬式に真つ赤な服を着た女  
 赤い着物が似合うところに来てしまふ  
 夕焼けの赤が約束した明日  
 むつまじい胃は話し合うことが好き  
 胃潰瘍と信じたまま母が逝く  
 蟹料理別の胃袋持つてゆく  
 いただいた言葉が胃から出て行かぬ  
 人びとの顔が幸せ呼んでいる  
 人びとの声援うけて走り走る  
 人びとにつるべ落としの秋さなな  
 札束の前で人びとと乱れだす  
 人びとの愛を両手に生きている  
 人びとよ入っておいでカゴメの輪  
 人びとの世紀迎える願いななり  
 人びとが一体となるじげおこし  
 人びとの情け嬉しく目がうるむ  
 掌に受ける思を入びとから貰う  
 人びとが寄れば囲炉裏の火がおどる  
 週休二日稲刈る人遊ぶひと  
 人びとでない者がするまつりごと  
 長生きをする人びとの処世訓

実満 幸枝 明美 野草 喜与志 八重子 智恵子 汲香 みさ江 早笛 睦子 和子 公子 富久江 盛桜 弘子 節子 茂 かつ乃 久枝 くに子 三千代 きみ子 孔美子 螢

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

弱者集いて一本の矢となりぬ  
 弱いから黙って風に揺れている  
 弱虫が鏡の中で意地見せる  
 弱みかくして元気に返事する  
 ひよつとこの面にかくしている弱み  
 弱腰になると呂律が回らない  
 ノーサンキュー言えず追風吹くばかり  
 地球儀に救い求める声が満ち  
 あの星も弱虫明けにそと出る  
 十字架のおくに隠れているコント  
 秋のコントに一羽のクラス付きまとう  
 物干にふたりのコント吊つてある  
 街へ出てこらんコントが落ちていて  
 コントにもならぬピエロを演じてる  
 脚色をした自分史にあるコント  
 大阪弁のコント始まる河原町  
 微熱少々うまい話は避けておく  
 優秀の風は身分を超えて吹く  
 病んで知る薬に優る子の便り  
 優るものないが此の灯は守り抜く  
 遣伝子の悪戯優れたものがない  
 文楽の所作のうまさに泣いている  
 味噌汁がうまいと思う秋深む  
 名物にうまい物あり食へ歩く  
 ジャンケンで負けてもぬくい父の手だ  
 言っても言っても信じてくれぬ人  
 人生の余白拾つて趣味生かす

いわゑ みつ子 澄子 能子 涼子 二南 文 曙蝶 哲子 義子 富喜子 佳秋 鹿太 ふじ子 房子 武庫坊 萬的 はつ絵 ひろ子 重人 ルイ子 道胤 正坊 トミエ はず子 泰子 春蘭

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

湯の宿の長い廊下で旅心  
 更地にもいのちありけり曼珠沙華  
 夜遊びの過ぎた欠伸が止らない

やがて来ることを信じて待つ果報  
 銃社会やがて地球がはちの巣に  
 美容整形やがて女の絵が変る  
 やがて来る良い知らせをば待つ夕べ  
 月下美人の開花静かに待つ夜半  
 待たされた揚句勘定持たされる  
 開通の一番乗りへ待つマニア  
 待つときの赤信号が長過ぎる  
 吉報を今か今かと鶴の首  
 ベンチ裏今日も出番のないバット  
 赤信号待てはながしい一秒だ  
 湯の宿の枕に眠り浅いまま  
 母恋うてぬむる幼児が枕抱く  
 明日逢える嬉しい鼓動きく枕  
 子の寝相北も南もない枕  
 あの夢の続き見ている蕎麦枕  
 座布団の枕眠ったふりをする  
 うぬぼれの強さ枕を高くする  
 暗号で示し合せて待っている  
 ピノキオの鼻見て未練断ち切れた  
 秋の樹海は未練を敷きつめる  
 一瞬の未練に酔った遠花火  
 さよならのドアの向うにある未練  
 ポケットの拳に溜めているみれん

絹子 まさお 透太 柳宏子 頂留子 夕花 弘直 三男 柳伸 祥一 美幸 欣之 とみを 一度 一風 和子 シマ子 ますみ たもつ 泰 透太 春堂 美津留 鎮彦 年人 春子 隆

追伸の未練を抱いて秋が逝く  
覗き見るカルテは読めぬ文字ばかり  
不条理を覗いて少年期が終る  
覗いたらあかんあかん嬉しそう  
のぞいたデオで果実が狂うの見える  
叶うならあすをちよっぴりのぞきたい

川柳高知

川竹 松風報

予定では悠々自適のはずだった  
予定にはなかった計報突如来る  
汗の靴頂点のない棒グラフ  
猛暑でも案山子はノルマ崩さない  
真夏日が続く暦のうえは秋  
日まわりも私も耐えている酷暑  
農婦です基準法など口にせず  
五十年経って戦後が終らない  
すいとんの味に戦後が生きている  
戦争を知らぬ世代が謝罪する  
満願の寺へ線香たばのまま  
線香の煙にむせている先祖  
線香は細目亡母がむせるから  
線香をたいて仏に話しかけ

京都塔の会

松川 杜的報

好きさきらい素直に言うて気に入られ  
ご詠歌にのつてる酔うてる数珠の房  
哀しみを乳房に持つて帰ります  
髪飾り東寺で買った稲の房  
夫婦別姓乳房が二ツついている

英一 東川 祥文 洋 元紀 朝子  
千鳥 菊野 春枝 有佳 竹萌 功 幸 雄 風 龍 三郎 佳風 松風

はこせこの房が揺れてる千歳あめ  
歴戦の軍旗は房を残すのみ  
新涼や白磁の花器に花添えて  
みの虫の心になって添い遂げる  
付添いが美人で見合まとまらず  
ついて来いその一言に賭けて添う  
寸志でもそこを添えておけばよい  
追伸の添え書きしかと胸を打つ  
一言を添えて絆を深くする  
ひとつまみおまけを添える量り売り  
遅刻した駅から休暇とる電話  
自信ある女性デートに遅刻する  
遅刻者にふりまわされたバスツアー  
遅刻してもよく伸びている棒グラフ  
遅刻したばつの悪さで石を蹴る  
踏切で地団駄踏んでいる遅刻  
家中で急かされているのにまた遅刻  
遅刻して気の張る席が空けてある  
旅支度震災ルックの老姉妹  
世間話のつともうまい和尚さん  
梅雨あけて長びく風邪もやつと癒え  
蟬の声変って少しだけの秋  
年上の女房がはやる世とはなり  
勅語みな暗記している箱の房

川柳ささやま

酒井 靖子報

帯きりりしめて本音を覗かせぬ  
星空に亡母の笑顔が浮いている  
突然の計報へ秋が寂しすぎ

栄 倫子 春蘭 杜的 白漢子 友照 巨詩 ただし 紫香 圭坊 百合子 波留吉 年代 芳子 庸佑 英一 てる 達子 笑女 美穂 水客 飛鳥 純子 恵美 とよ子

コオロギの合奏和む終い風呂  
この辺で夫婦腕組み直す  
晩学へ蛾の一匹が邪魔をする  
いつからか手酌になった夫婦酒  
お怖い虫の居どころ悪そうな  
一本の絵筆余生の友となる  
吊り橋が揺れて夫婦の手の温み  
大声の割に虫けら小さすぎ  
子が巣立ち夫婦の絆皿に盛る  
信じ合う夫婦で渡る丸木橋  
オイハイで小言も言えぬ夫婦仲  
支え合う夫婦で越えて来た八十路  
目をつむることを覚えて添い遂げる  
不意の日へ葬式代は置いとかな  
一病を持った夫婦の和が温い

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

困つぶすほどの美人が今は無い  
心が美しい道連れになろう  
親と子のつなぐ愛の手忘れまい  
大山の屋根が台風通せんば  
カラフルな屋根が日本を変えてゆく  
本家より屋根を一寸低くする  
大屋根でじっくり見よう世の動き  
鬼瓦主は儂じやと威張ってる  
北向きの鬼瓦の目ほつとする  
肩寄せて葺葺きに住むお二人  
神さまの屋根ふきかえて餅をつく  
文化財になって不便な草の屋根

芳の 美智子 多美子 すす子 末野 市三 八重子 素水 とみ子 つや子 ヒサ子 和子 芳郎 可住 靖子 和歌子 玲子 一夫 すみ彥 春枝 千春 弘子 保子 正子

異人館うろこの屋根は修理中

光つてる屋根の隣が僕の家

早くお帰りに掲げる大時計

大屋根を信じてねむる羽根ぶとん

たましいを屋根に遊ぶす古い家

屋根ばかり眺めて足をすべらせる

石乗せる業も受けつぐ島の屋根

屋根の反り寺は昔を繰り返す

大屋根が老けてうたがい深くなる

大屋根が世代交替い出した

ひとり棲む屋根から一人分の湯気

屋根になる母でありたし空を見る

そのうちに子も一族の屋根になる

ひとつ屋根二人の世界うらおもて

手をつなぐ友が多くて良い余生

万灯会薄い絆の灯がきらり

川柳岩出

小倉

アサ報

前に出す素直に妥協して平和

青春のベタルが軽い秋の道

愛情を注ぎ素直な芽が伸びる

忠告を素直に聞ける風の世界

裏山の小道歩いて父思ふ

回り道させたあなたは罪な人

主婦だって横道それてみたくなる

虹を見た日から一本道進む

よく聞けば反論がすじかも知れぬ

帰れない道を此処まで来てしま

晩秋へ何故か素直になる夫婦

寿々子

天雀

美月

富美子

瑞枝

てい子

花子

荒介

晶子

ゆき

日枝子

恵子

千代

紫布

八重子

夕子

五十年道連れ共に白髪増え

反論もせねば世間じやお人好し

それぞれの道行き先は同じでも

二人なら支え合いつつ坂を越す

政治劇素直な先生役立たず

道急ぐ事も無いのにコセコセし

孫のせいにするにはしたが気が咎め

文読ます長きものよと秋の夜を

子は叱り孫なら褒める無責任

またこれも我が身になって知る痛さ

孫と乗る八〇〇型のカッコ良さ

秋空へキャッチボールの音が澄む

無農薬虫の穴あるキャベツ買う

見合い百遍蓼喰う虫と住んでいる

納得をして秋の虫の音聞いている

あやとりを教えフアミコン習う仲

ふところ風に残して孫帰る

生きた仲間だ虫けらなどと言わないで

孫に足踏ませうつとり虫を聞く

くやしいが孫は手痛い泣きどころ

サークル樺樺

小林

一夫報

あなたたく汚されてゆく猫の碗

ちちははの茶碗が両の手に軽し

旅帰りに茶碗が妙に手になごむ

鏡に向けて撃つ 輪ゴムのピストル

疑問符を抱いたまま死にたくはない

重徳

良一

紳一郎

悦男

忠雄

与呂志

ミサヲ

キク子

みつ子

藍

哲子

トミエ

まさお

年代

貴代子

いわゑ

はつ絵

民平

義子

体臭のきのうより今日仄か

夢は愚かに秋の夜の影を踏む

お祭りに隣近所が顔合わす

書き留めて置こうわたしの老い支度

彼岸花苦楽を越えた顔に見え

鴉溶け行つたよ夕陽の真ん中に

あだし野の風にあしたを尋ねても

さびしくて等身大の穴を掘る

前を歩いている人が胸張っている

茶碗酒呷る父見た幼い日

被災して知らぬ土地での句会あり

ゲームのような恋が終って秋深し

浮世小路そろそろ歩きとまいろう

遠すぎぬ所へまりは投げておく

許せない男を許す着い部屋

話す度大きくなって行く魚

蒲団が泡と吞まれて行くゲーム

夫ゆるし自分も許し手漕舟

手術らしいどうか神さま止まる

少年の影ゲーム屋で立ち止まる

何の憂さ晴らすかもぐら叩く妻

バス代を節約すれば遠い道

呼び込みにつられれ出口でふんだくる

出口まで来れば銃口待っている

母はもう遠くにいます天の川

病院の出口嬉しい退院日

芽の出ない親子どっちもゲーム好き

薫

希久子

雅子

智恵子

いわゑ

喜美子

楓楽

正坊

智子

薫風

富柳会

池

森子報

文子

紅月

宗一

扶美代

紅紫朗

鐘造

トシエ

アキ

昭水

美代子

智晋

智久

柳太

花梢

文次

さくら貝遠い私の落し物

ゲーム機の前でわたしを考える

産声へ遠い未来をかがやかす

のはせ性ゲームでしたと逃げられる

宝物というには遠いガラス玉

堤防が切れそうになる恋の呼吸

出口から太平洋がよく見える

引き出しから首を出そうとするむかし

川柳ねやがわ

江口

度報

北山の風が恋しい床柱

握手してもつれた糸が解けてくる

サラエボのもつれた糸がほどけない

もつれ糸ほぐす根気を見込まれる

負けたとは言わず強気の捨て台詞

切り札をちゃんと握っている強気

押せ押せのムード裏目に出たバンク

労働歌強気で通る蟻の列

何かある強気の妻がしおらしい

スルメイカ味も出る溜めであこも出る

あご髭に忌中の疲れ溜めている

料理番組子供のあごが細くなる

あご出た坂を夫婦で這い上がる

せちがらい空気を吸って来た柱

ご先祖さまずしと詰まってる柱

口ぐちの褒め言葉聞く床柱

柱のキズは妻がかわした変化球

あの日から母が柱となる暮し

震度七買いかぶられていた柱

冬虹

緋子

維久子

二三子

方子

欣之

岳人

森子

度報

かすみ

高栄

勇太郎

文秋

一途

小路

洋

シマ子

庸佑

忠秋

博泉

黎之助

一風

雅文

英王子

ルイ子

冬葉

朝子

敬老日やつと実らず老いの恋

内緒にしてはしかなかったらとおごらされ

物があり過ぎてほんもの分らない

二枚舌まるでコビーしたように

夏すぎて後の季節の来る早さ

孫の眼には小さき人らしい

ドンと胸で受けたつもりが捻挫する

ポケットベル鉄砲玉になりきれぬ

左遷地で狼煙を上げているのだが

銀行破たんばくは消しゴム探してる

老い二人生きる秋刀魚を二匹焼く

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

逆転に力いっぱい旗を振り

人生は逆転なしで老いて行く

逆転があるかも知れぬ紅をさす

逆転へ父が無口になるナイター

逆転の逆転もある泣き笑い

何時からか女房が尻に敷いている

逆転劇をじっと見ていた鱗雲

逆転へ幸せな灯を消して寝る

酒断つと舌の乾かぬうちに飲み

舌打ちをして銀行を出ていった

久し振り舌が知ってた母の味

甘い舌甘党だとは限らない

舌の根へ一本釘を刺しておく

褒め言葉まったく知らぬ夫の舌

耳鳴りの老父法話の前に座し

波留吉

頂留子

時弘

とし子

ヤエノ

あやめ

光子

惠子

磔

たもつ

吉之助

米子

ひふみ

邦代

早苗

昌枝

義良

雄々

たつみ

清子

螢

一葉

日出子

太泡

静江

日青人

多賀子

耳鳴りがいやな予感をつれて来る

耳鳴りのせいにしておく馬耳東風

耳鳴りの中で約束した秘密

耳鳴りと仲良く暮らす老いの日々

あれこれと迷ってからは離れない

思惑するコスモスの揺れあれこれと

あれこれと着いて治まる妻の乱

あれこれと買って治まる妻の乱

あれこれと目移りがしてくる値札

チャンス逃がして平凡な朝になる

三つ指が秘めたチャンスを狙ってる

幾度のチャンス見送り臍を噛む

またとないチャンス冒険してみよう

口はさむチャンス与えぬ弁舌家

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

手話ならば竹人形と通じ合える

竹割った気性の女笑ってる

竹林を歩いて秋と対話する

脚色にいい事ずくめの手帳

老人にさせぬ手帳のスケジュール

影ばうし背中をまけてついでくる

父の背に僕の涙の跡がある

擦り減った広辞苑の背二人の歴史

敗北の背をいたわる夕焼けこやけ

ネクタイがだんだんゆるむ縄のれん

活断層眠る辺りに曼珠沙華

私が変わらねば何もない朝

房子

茂美

きみえ

登美子

桂子

畔

みえ

与根一

叮紅

知恵子

とも子

寿美子

静恵

佳江

年代

一笛

すみ

キク子

ハツエ

千恵

夢之助

武庫坊

颯云児

比ろ志

まさお

澄子

光穂

コスモスが多情の風を連れてくる  
 しろい月たそがれに浮き私もひとり  
 加速する老いを憎んで割る鏡  
 復興の神戸引つ張る背番号  
 夕やけ小やけ母を忘れてたんぼ捕り  
 旅三日島の人情も忘れて去ぬ  
 美しい人の踏絵に嘘の影  
 踏切に行きも帰りに待たされる  
 思わずも席ゆずられて戸惑う帽子  
 馬鹿だと言いつつ秋の蚊を叩く  
 旅人に阿弥陀如来の肩のやさしさ

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

野に咲けど薊しっかり身を守り  
 花ざかり薊も青春しています  
 回転ドア出番いまかと花言葉  
 徹夜したことは語らぬこの眼鏡  
 おろかにも薊のトゲに負けている  
 手に針をもては昔がよみがえる  
 糸通す針へ無口になつてきたぬ  
 七十歳針のむしろにもう踏まぬ  
 何はさて五十年忌の鬼薊  
 鬼薊裸になつた夢を見る  
 一本の針で戦後を渡りきり

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

フランスパンあなたの国へ忠告を  
 言いわけに酒の上とは無責任  
 無責任の軽口一人歩きだす

正治 正子 芳子 伊三郎 正一 源一 瀧小 白漢子 義芳 鹿太 兼

生きる者の責任果たす暮まいり  
 責任を質して椅子が軋みだす  
 鬼責責任重く身構える  
 イチローで神戸復興意気拳がる  
 蛇口から亡母の叱咤がほとばしる  
 師の鞭が自信過剰の身を叱る  
 寝がびれて秋の夜長を持て余す  
 三分褒め七分叱つて子を育て  
 失敗へ自分を叱ることはかり  
 叱られてそれから無心子の寝顔  
 叱られて空見上げれば星が降る  
 叱られて肌で覚えた芸の道  
 叱られて不思議な貌をしてる猫  
 子を叱ると猫まで耳を低くする

とつとり川柳会

武田 帆雀報

天衣無縫危険な仲になつてゆき  
 若さかな危険水位を越えている  
 危険です夜道ひとりとは歩かせぬ  
 矢印は危険な方を向きたがり  
 私の線路に神が石を置く  
 止り木で危険な人と飲んでいる  
 危険だと聞けばさわつて見たくなる  
 赤い色危険と知らず食べている  
 錆ついた耳に危険な音がする  
 危なくなるのと特別室に入れられる  
 善人の足引つ張つて競い合い  
 無二の友ながら首席は譲れない  
 彼のためこの競争は勝たなくちゃ

昌子 澄子 十四郎 一閑 末貞一 弘治 鹿太 正治 すみ 六浦 美智子 勇次郎 夢之助 紫香 粗粒 宣子 孝男 一京 悦枝 圭一郎 和歌子 螢 完司 雄人 舎人 美津子

わんこ蕎麦競争味は二の次だ  
 競争のチラシまとめて捨てられる  
 ライバルと競争長い一日た  
 競争に負けて双葉の芽がちぢむ  
 満月と競争しての嫁の腹  
 競争に負けて屋台を引いている  
 ライバルにアキレス腱を握られる  
 片隅で老人会の顔になり  
 片隅に住んでも金を追い続け  
 片隅で暮らし仁義はかかさない  
 理由なし片隅にある黒い壺  
 片隅で悪妻昼間酒を飲み  
 片隅に浮世の垢が浮いている  
 片隅で法話聴きつつ眠つてる  
 片隅でいじけた酒を飲んでる  
 片隅にふられた時の靴がある

川柳藤井寺

高田美代子報

ぼちぼちと歩いてたのにこけました  
 妻の留守ぼちぼち食事いたします  
 ぼちぼちと犬も歩幅を思案する  
 ぼちぼちと郵便局へ預け替え  
 あの派手な服はやめてネ参観日  
 面映い派手な傘借る俄雨  
 派手になつた晴着は夢で手を通す  
 戦中派いまを派手めに生きている  
 負けそうになると女は派手に泣く  
 派手な妻おかげでばくがおぼえられ

一夫 喬水 山人 正光 黙とみお ひろ子 行男 よしお 静生 明美 多哥由 輪多朗 侑里 帆雀 大漁 六三郎 三郎 敦子 二南 初枝 恒雄 よしえ みよ子 花梢 昭水

赤とんぼわたしも赤を着たい秋  
葬式の中にまじった派手な服  
長雨に派手な台詞がほしくなる  
近く夏を派手に見送る曼珠沙華  
損得がないので派手に手を叩く

台風が北へそれたて出掛けよう  
待つ人のない身軽さにある孤独  
美しい顔でつれもないことを言つ  
言いつてまでと言つて歳になり  
叱られる猫も言いつきつとある

堂に入る言いつきすが苦勞人  
言いつはしない明日の風に舞つ  
言いつもせずには戦犯刑死した  
見栄を張る言いつばかり考ふる

深すぎるソファ―言いつ聞きもらず  
言いつをするより父の手が早い  
すらすらと言いつをする空手形  
くどくどと言いつ金のことらしい

言いつの下手な男を待つロビー  
三枚目また言いつの使者にたつ

赤とんぼわたしも赤を着たい秋  
葬式の中にまじった派手な服  
長雨に派手な台詞がほしくなる  
近く夏を派手に見送る曼珠沙華  
損得がないので派手に手を叩く

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

だまされてそれから頑固者になり  
やりくり慣れにエプロン白く着る  
やりくりを秘書に任せて分刻み  
やりくりで上手に妻の座を保つ  
頑固だが話の解る父だった  
ハイはいと頑固転がす妻の知恵  
二歳児は教えなくてもパパの真似

博文 雄々 松盛 喬水 佳女 仙岳 一浪

大臣の印を教え子だと言つ  
学歴はないがやりくりうまい妻  
やりくりの苦勞忘れる歳になる  
任されて嫁はやりくりうまくなる  
やりくりはつかず無心の重い足  
鵜呑みなどやはり駄目だと教えられ  
電波に乗った野茂の人氣は跳んでいる  
人氣だけ追いかけている駄目な奴  
三文判ですぐに間に合う名前です  
頑固だと言われ煙管が性に合い  
世に出れば名付の親もしゃり出る  
親の名に下口をぬるなど叱られる

隆風 猿沓 信子 みほの 善坊 玲攻 季芳 勝見 玲子 幸子 節子 弘朗

一回り大きく明日の夢を描く  
物騒で困ったものですこの世相  
今日の雨を明日と言わず頑張り  
収穫を終えて安堵の秋祭り  
豊作へうれし客呼ぶ祭笛  
豊作の祭り太鼓ははずんでる  
玄関にコスモス秋の風情なる  
困りますうそで固めた合言葉

楓楽 東雲 叔子 希久子 千梢 佳秋 志華子 正坊

むらくも川柳句会

藤井

明朗報

言いつ寄つて蝶が舞つてる秋桜  
明日またきつと会えます夕茜  
明日逢える靴をきれいにみがいとく  
コスモスが風に戯れ愉しそつ  
コスモスに背伸びしているランドセル  
夕茜明日は晴れるか冷えてくる  
コスモスに花のメイロに蝶と舞  
一回り大きく明日の夢を描く  
物騒で困ったものですこの世相  
今日の雨を明日と言わず頑張り  
収穫を終えて安堵の秋祭り  
豊作へうれし客呼ぶ祭笛  
豊作の祭り太鼓ははずんでる  
玄関にコスモス秋の風情なる  
困りますうそで固めた合言葉

義良 一文 朝子 島子 ふみ 藤子 やす子 定子 績子 まさこ ます美 しげ子 久仁 ゆき子

言いつ寄つて蝶が舞つてる秋桜  
明日またきつと会えます夕茜  
明日逢える靴をきれいにみがいとく  
コスモスが風に戯れ愉しそつ  
コスモスに背伸びしているランドセル  
夕茜明日は晴れるか冷えてくる  
コスモスに花のメイロに蝶と舞  
一回り大きく明日の夢を描く  
物騒で困ったものですこの世相  
今日の雨を明日と言わず頑張り  
収穫を終えて安堵の秋祭り  
豊作へうれし客呼ぶ祭笛  
豊作の祭り太鼓ははずんでる  
玄関にコスモス秋の風情なる  
困りますうそで固めた合言葉

登美 艶子 宏章 千秋 真一 俊路 道子 佳子 仲子 惠美子 明朗

川柳塔おとり

上田 俊路報

幸せに明日は他人になる娘  
コスモスがやさしい風を連れて来る  
働いた幸せ明日へ望み湧く

寺護る尼僧やさしく輪廻とく  
受験生お寺の鐘も鞭と聞き  
ご先祖の顔がちらつく寺の寄附  
食べたみ果物の種種植えて  
誤植した愛の一字が見付からぬ  
天までも届けと杉の苗植える  
母らしい印象を子へ植え付ける  
散る落ち葉表と裏の舞い見せる  
色づいて未練もないか落ち紅葉  
枯れ落ち葉秋の終りを告げて舞つ  
落ちてなのお二人連れです枯れ松葉  
来年に賭ける落ち葉に悔いはない  
松葉蟹皿一杯に一人じめ  
ハングルで身の上話してる蟹

翠洋会

米田 恭昌報

青春の絵とても額にはおさまらぬ  
足止まるヌードの額に根がはえた  
四時半に朝刊読んでまた眠り  
新聞に載らないほどの嘘をつく  
新聞に包んだみやげならもう  
川柳にまだ冷ややかな新聞だ  
こっぼりの舞子あでやか古都の秋  
おとなしい長女が嫁にいつて秋

正坊 志華子 佳秋 千梢 希久子 叔子 東雲 楓楽

コオロギが家の庭まで赴任する  
食欲の秋松茸の宅急便

秋深く母がセーター編み急ぐ  
花屋から愛が届いた誕生日

マザーテレサの愛と笑顔のあるかきり  
伝わらぬ愛に思わず平手打ち

井池に浮き沈みする人の群れ  
おっとりは大阪だけの褒めことは

大阪弁悪さもあるが温かし  
道具屋筋ゆきつもとどりつ老夫婦

石切へいつもと違つ祈願抱き  
留学生お好み焼きをます覚え

太鼓橋あな明日が見えますか  
信号機銀杏が隠す御堂筋

ぼろぼろだすと言つて支店をまた増やし  
家康が嫌いでアンチジヤイアント

大阪も船から見れば異国だな  
吹き流し息災祈る道修町

まぼろしの豆秋がゆく旭町

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

孫たちは斜めに読めるマンガ本  
今夜また嘘にまみれた髪洗つ  
百山を目指す男のシャツ洗つ  
しとやかに人の心をなごませる  
しとやかな女にも似て秋桜  
木石に心を問うてなんとなる  
石舞台 昔話をしてくれる  
石庭の石が私を見えています

蛙

千歩

真砂

凡子

宏子

みつ子

久峰

春子

綾子

絹子

さと美

ひろ子

英一

正雄

光子

恭昌

宣司

英千子

鬼遊

英子

瀧小

悟郎

正坊

明光

きく子

つえ子

博史

石くれに還る仏もあつて秋  
雨だれの窪みがついた寺の石  
真実に突き当たるまで磨く石

男勝りのお転婆さんが世を変える  
以心伝心 妻も機嫌の悪い顔

愚痴話 蛇の翅音のように聞き  
影法師と一緒に護る守備範囲

バスポート洗いざらしのジーンズで  
ぶぶ漬けでお昼を済ます日曜日

凡足でよし足音の合う親子  
時代祭 十二単がしとやかに

「旅人」の中に千円札があつた  
日替り定食ほんのちよつぱり夢がある

日日好日 朝の卵がポンと割れ

みつ子

紫香

ただし

吉太郎

重人

計光

求芽

芳子

一笛

メ女

圭坊

路児

武庫坊

杜的

みまさか誌上川柳大会

課題 「雑詠」「男」(2句・共選)

参加費 500円(発表誌呈)

締切 平成8年2月末日(4月発表)

喪中につき年賀の御挨拶は  
遠慮させていただきます

西尾 美与子

### 第十回 国民文化祭受賞句

文部大臣奨励賞

ことさらに黒髪へ雪降りたがり

栃木県 五百部長洋

国民文化祭実行委員会会長賞

陽は真つえ卑弥呼に戻る世も近し

三重県 小河 柳女

栃木県知事賞

樹が神にならなくなって森が死ぬ

静岡県 吉村 小名樹

栃木県実行委員会会長賞

二十一世紀の棚にも源氏物語

鳥取県 野坂 なみ

栃木県教育委員会教育長賞

象の目にいくさ嫌いが寄ってくる

栃木県 町井 葉月

宇都宮市長賞

エンピツの木の香私の小さい森

神奈川県 青柳 おぐり

宇都宮市教育委員会教育長賞

一冊の校史となつてグムの底

愛媛県 山ノ内さち枝

全日本川柳協会会長賞

頂上に割れた仮面が落ちてゐる

富山県 小嶋 旬月

栃木県川柳協会会長賞

黒髪はいいね日本で気がするよ

栃木県 中山 ささえ

寺

宮尾みのり選



男にも駆け込み寺が要る時節  
山門を出て俗人の眼に還り  
名利と名湯があり母の旅  
名習を捨てた遍路の寺参り  
寺の屋根ビルの谷間で座禅組む  
やりくりの寺を維持する駐車場  
ライダーのように檀家を一回り  
住職の消えたお寺に落ち葉舞う  
後継ぎがないお寺が揺れている  
煩惱の捨て場にくぐる寺の門  
定年になったら行こう寺巡り  
花街のお寺脂粉の香になじみ  
なにもかも拝んで遍路寺を去る  
仏像のならぶお寺でコンサート  
花の寺本尊さんはそっちのけ  
寺だけで食えぬ坊さん背広着る  
寺に来て亡母の思い出風の色  
ご先祖の顔がちらつく寺の寄附  
住職が消えて寂れた過疎の寺  
禅寺で突如厳しい怒号さく  
寺詣り今日は素直な我になり  
万歩計丁度手頃な寺があり

武史	タミ	宵明	清史	俊路	博友	艶子	豊主	明水	重人	玉恵	旋風	幸次郎	一花	正剣	宵草	武春	希久子	大柏	芳水	
跡取りへ寺も先祖ものしかかり	軸	国宝の寺ふるさとの歴史抱く	天	ぼつぼつと寺と仲良くしています	地	寺の門出ると人間臭くなる	人	幸せな時はご無沙汰がちの寺 石段を下り切るまでのいい法話	足音のリズムを直す寺詣り	無住寺に遠い童話の庭がある	住	ふるさとの寺はいつでも開いている	沙羅の花散って寺観る人静か	寺の坂異界の人に逢えそうな	菩提寺で上等兵の子が眠る	お寺の寄進今も月賦で払ってる	緋の衣和尚が示す寺の格	フルムーンぼつくり寺も入れようか	実家という駆け込み寺を持つている	
		森脇 和子		圭一 郎		ちかし		南 奉	めぐみ	鉄 治	さち子	満 秋	照 子	新 造	和 歌 子	章 久	あずま	保 州	年 代	
								可 住												通彦

度忘れ

林 瑞枝選



度忘れを支えてくれる嫁がいる  
度忘れをしていて風呂の湯が溢れ  
待ち合わせ度忘れをして呼び出され  
老夫婦言った言わぬで揉めている  
度忘れは陽気のせいにしておこう  
度忘れに見せて会話を盛り上げる  
度忘れが重なり娘等が騒ぎ出す  
免許証度忘れしてたでは済まぬ  
そっぴいえはさつきも引いた広辞苑  
目的地トンネル抜けてふと忘れ  
面影へ名前の出ない同窓会  
あつと叫んで約束は昨日と気づく  
度忘れを思い出すまで眠れない  
つまらんことみんな忘れて無事に生き  
度忘れじゃ済まぬ師走の風が吹く  
度忘れた菜筍が怒り吹き上げる  
度忘れを重ね近づく花いちもんめ  
度忘れの賀状二枚目が届く  
出先から自宅の電話度忘れ  
度忘れで済ませるうちの七光り  
度忘れのお経ごまかす咳払い  
度忘れをせぬ蝸牛 風を読む

雄々	章久	柳弘	正剣	好恵	正子	喬水	虹汀	武庫坊	智加恵	希久子	ひで	和歌子	芳郎	はるお	富美子	艶子	さち子	忠雄	よし津	通彦	めぐみ
----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	----	-----	----	-----	-----	----	-----	----	-----	----	-----



# 初歩教室

題一飾る

吉岡美房

初歩教室の場合、本社あて送付されますと私の手許に届くのは締切り後、数日を経てからとなり、取り上げるのが物理的に無理ですので、はがきて三句を直接、私あてお送り下さいませようお願いします。

なお、内容については言い足りない句、言いきる句のどちらも多いのですが、初歩の間は言い過ぎる句の方が多いようです。あまり正直に一句の中にもあれもこれも入れようとせず、最小限の言葉で作者の思いを表現するようにして下さい。

## 添削句

- 幼な子が飾られている七五三 トヨ子  
 (思い切り親子で飾る七五三)  
 ひな祭さしきに飾り家族笑 タツエ  
 (三代の女を飾るひなまつり)  
 ひな飾り亡母との思いめぐらせる 方子  
 (思い出を飾る亡母との難まつり)

引退の花道飾るよい男  
 (引退の花道飾り湧く拍手)  
 多哥由

情けなや嘘で飾った箔がはげ  
 ミツオ

(見栄張って飾った暮し箔が剥げ)  
 身を飾る心も飾るすこしむり  
 よし子

(飾ろうとしない心に光るもの)  
 飾り気の無い人品をにじませる  
 美恵子

(目立たないところで飾る品のよき)  
 飾るものなくて平和な朝が明け  
 八重子

(飾るものなくて我が家にある平和)  
 飾り立てぬ素顔がとても美しい  
 レイ子

(飾らない素顔光っている若さ)  
 晩節を飾る一つに句を作る  
 勝巳

(晩年を飾る一句に賭けるもの)  
 飾らない言葉に娘攫われる  
 正

(飾らない男の魅力娘を攫う)  
 老いてなお飾る心を温める  
 武治

(老いてなお飾る心を温めない)  
 飾り気のない友達で許し合う  
 高栄

(親友と言えぬ二人で飾らない)  
 ネットレス飾って一人古稀祝う  
 ふうこ

(女です古希を飾ったネットレス)  
 クラス会ダイヤヤファイヤ飾りたて  
 文子

(着飾って一人浮いているクラス会)  
 飾ること久しくなって身がいとし  
 郁子

(飾ること忘れ久しい身がいとし)  
 お見合いに髪を飾って撮りしもの因静  
 子

(精一杯飾って見合いした写真)  
 飾りすぎあなたが霞み個性とぶ  
 りつえ

(飾りすぎあなたの個性霞んでる)  
 着飾った女に弱い色男  
 志重

(着飾ってみても所詮はうわべだけ)  
 着飾って見栄を張りたいクラス会  
 春枝

(見栄と見栄着飾って出るクラス会)  
 飾る気はないが見栄が飾ってる  
 和歌子

(着飾って見栄がぶつかるクラス会)  
 影法師飾る自分に笑いだす  
 三津子

(着飾ってみても変らぬ影法師)  
 着飾った孫の姿にうるむ老  
 ふゆ子

(着飾った二十歳の孫に目がうるむ)  
 女心満艦飾で充ち足りる  
 ふさ子

(満艦飾女同士にある敵意)  
 満艦飾少しくずれて終電車  
 淳子

(満艦飾かなり崩れた終電車)  
 買った絵を飾り何度も足運ぶ  
 ふみえ

(絵を買って飾り一日見て飽きず)  
 シャンシャンと飾って馬は踊らされ  
 鐘造

(飾られて馬シャンシャンと行く祭)  
 飾る食器それぞれ思い盛っている  
 失名

(ささやかに食卓飾る誕生日)  
 自治功労前歴飾るよすがかも  
 一乗

(前歴が余生を飾る賞を受け)

オーロラ—天の飾りと信じたい

（オーロラは天の飾りか魅せられる）

会長は飾りの役と心得る

（飾りでもいい會長頼まれる）

野を飾る曼珠沙華の朱素晴らしい

（彼岸への道を飾って曼珠沙華）

新築の客間ブランド飾り立て

（新築をブランド品で飾り立て）

弔辞では皆善人に飾られる

（思い切り飾る弔辞で送られる）

アクセサリー期待外れて気落ちする例静

（飾りすぎアクセサリーに負けている）

亡父のまねしてころ柿飾りつけ

（自家製の柿で飾った鏡餅）

体裁で飾り中味の無い祝辞

（肩書きの祝辞に多い修飾語）

晩学の机に飾る絵を探す

（晩学の僕を支える絵を飾る）

色紙飾る亡夫の好きな朱い柿

（好きだった柿の絵飾る亡夫の忌）

故郷へ錦飾る夢遠く

（故郷へ錦飾れず遠く住み）

床の間に新栗の毬飾つてる

（床の間を飾る実りの秋を活け）

家中をきれいに飾れば誰も来ぬ

（家中を飾ってだれも来ぬ独り）

隆

太郎

アキ

君江

佳典

子

辰男

義男

忠男

正子

彰

日出子

行子

飾っても飾り映えない老いの部屋

（飾り映えない独りの老いの部屋）

一人きりバラと一緒にとる食事

（単身赴任妻が飾って行った薔薇）

勲章を胸に飾った遺影笑む

（勲章で飾った遺影呪んでる）

嘘飾る恋は悪魔のキューピット

（すぐばれる嘘で求愛飾られる）

飾られた宝石を見る卑しい目

（溜息は宝石店の飾り窓）

会席を飾る松茸栗かえで

（松茸がついても庶民飾りほど）

金婚のカメラへ少し飾り立つ

（金婚のカメラに飾る孫曾孫）

表現・着想とも立派な句

銷浮かぬほどに飾って老いの部屋

飾り言葉多くて心伝わらぬ

マネキンの眼が淋しそつ飾り窓

飾らない主婦引き立てる紅をひく

飾らない母の言葉が身に沁みる

錦飾るふるさと母はもう居ない

阿吽の仲飾る言葉は要りません

飾られる言葉が人を隔ててる

飾るほどつろになつて行く言葉

着飾って出かけたけれど当てはなし

着飾った娘の成長にはつとする

美寿子

こころ

幸次郎

ツネ

志華子

まさこ

ますみ

利勝

絢子

三九

君枝

芳水

彩子

孝子

披露宴飾る言葉で彩どられ

しめ飾りつけて新たな風を待つ

門松を飾る冥土の一里塚

飾り棚すらりと父のコレクション

土俵入り国技を飾る晴れ姿

飾り気はないがわたしの好きな人

シヨーウインドー見たい値札は裏を向き

目の毒とシヨーウインドー駆け抜ける

本物という美しさ飾らない

定年を飾る家族のありがと

長持ちの秘訣飾らぬお付き合

飾り窓季節先取る彩あふれ

飾らない言葉信じてなざる海

天衣無縫飾らぬ笑顔持つっている

飾り気のない娘で先に嫁に行き

本物に飾りは要らぬ野茂の口

いずれ逝く最後きれいに飾りたし

飾らない人柄同士仲がよい

着飾ってみてわたしはわたしです

着飾って皿に正座の松葉がに

私の句

年金で心に飾る花を購

題「許す」12月15日締切り（2月号発表）

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

孝男

宏章

木管

幸子

タミ

幸夫

美子

ミツ子

剛治

強一

碧

例静子

さち子

めぐみ

# 旧満州を往く

大連からハルビンへ

田中正坊

九月二十日から二十七日まで大連・長春・ハルビン・瀋陽と中国東北地方（旧満州）の三省・四市を周遊するツアーに参加した。私は今まで三回にわたって中国を訪れている。それはいずれも「未知」の国を知る旅であったが、今回は旧満州に住んだことも行ったこともない私が、長く頭の中に描いてきた「既知」の土地を再認識する旅となった。

第一日、関西空港から中国国際航空機で出発し、夕刻、大連空港に到着。第二日は朝からバスで旅順へ向かった。私たちの世代の子どものころは、「戦争」と言えば日露戦争のことであり、旅順はその有数の戦跡である。まず、二〇三高地に登る。日露両軍が死闘を



關靈山（忠魂碑）

繰り返した激戦地は今、草や木が生い茂る静かな丘陵地帯となっている。頂上には「爾靈山」と刻んだ小銃型の忠魂碑が当時の姿そのままに建っており、「山川草木」と詠んだ乃木大将の漢詩がふと脳裏をよぎった。

次いでロシア軍が要塞を築いていた東鶏冠山へ回り、分厚いコンクリートで造られた北堡塁の内部を歩いてつぶさに見学したが、この戦跡一帯は遼寧省と大連市の文物保護単位（指定史跡）とされており、今年から外国人の立入りが許されるようになったという。水師営跡にも立ち寄ったが、建物や藁の木など往時を物語るものは何もなかった。今年の日露戦争終結後九十年目にあたる。

午後、大連の市内をバスで一巡したが、戦前、この地に住んだ詩人、清岡卓行が書いた『大連小景』などで私には初めて見るような気がしない。人口二百万の市の中央に中山広場があり、ここを中心に街路が放射線状に走っている。十九世紀末にこの地を租借したロシアが、バリをモデルとする都市づくりを始

め、日露戦争後、日本がこれを引き継いで完成したもので、市内には石造りやレンガ造りの洋風建築が多く、ヨーロッパ的なたずまひを見せている。

広場の周囲には、旧関東州庁、裁判所、警察署などのクラシックな建物がそのまま残り、今も同じ用途に於てられている。よく知られるヤマトホテルは、「大連賓館」として利用者が多い。街路樹はほとんどアカシヤだと思ひこんでいたが、ポプラ、プラタナス、柳と多彩であった。景勝地、星海公園に寄り、大連空港から中国北方航空のプロペラ機で次の訪問地へ向かった。

第三日は、吉林省の省都である長春で一日



大連賓館（旧ヤマトホテル）

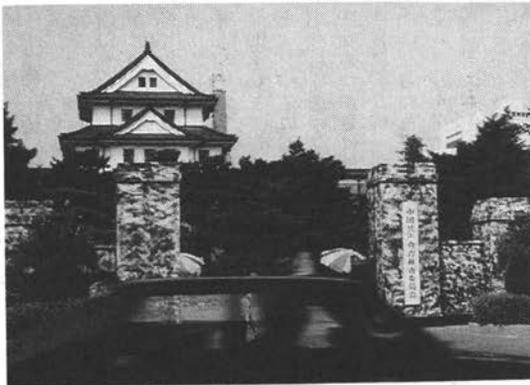
を過した。堀口塊人の句に「古切手かつて満州国在りき」があるが、満州国は私たちにとっては幻影と現実が交錯する国であり、その首都が「新京」と呼ばれていた。ここではまず長春電影製片廠（映画製作所）の見学からスタートした。この撮影所は満映（満州映画協会）の施設を継承したもので、さまざまな展示とともに、清朝時代の町並みを再現したオープンセットが目をついた。

この日はバスで南湖公園はじめ市内を回ったが、現在の長春の顔は森林城・汽山城・電影城・文化城と呼ばれるように、市内は緑に恵まれ、撮影所のほか、中国最大の汽車製造廠（自動車工場）や吉林大学など二十の大学がある文化都市となっている。新民大街を中心に満州国の國務院・司法部・治安部・外交部などの建物があり、大学や病院として使われているが、ひときわ目立つのは二基の小天守閣が塔屋としてそびえる旧関東軍司令部庁舎で、現在、中国共産党吉林省委員会にある広大な建物でホテルに転用されている。

さて第四日は「偽満州国帝宮」を訪れた。ラストエンペラーで知られる愛親覚羅溥儀の帝宮で、勤民楼・緝熙楼・同徳殿と名はもつともらしいが、ガイドの解説によると清朝時代に塩税を扱った役所の庁舎を転用したという建物で、内装や調度品は立派だが、とても帝宮と呼べる代物ではない。先に見た関

東軍司令官官舎とは比較にならず、満州国の真の支配者が誰であったかを明らかに示している。特急列車でハルビンに向かう。

第五日のハルビンは、松花江からはじまった。黒竜江省の省都で、市内には帝政ロシア時代に建てられたロシア正教会の寺院などが残っている。まず、市の北部を流れる松花江（スンガリー）を船で往来し、一時間のレジャーを楽しんだ後、「東北烈士紀念館」を見学した。「東北烈士」とは満州国時代、「匪賊」と呼ばれ、ゲリラとして関東軍を脅かし



旧関東軍司令部庁舎

た抗日義勇軍の戦士たちで、ここで澤地久枝の『もうひとつの満州』で知った楊靖宇にめぐり会った。

義勇軍第一軍の隊長であった楊は、討伐隊に追われて食糧も尽き、射殺された時は腹中に「草根木皮」しかなかったという不屈の戦士で、その塑像が最後の抵抗をする姿を描いた油彩画が飾られていた。このほか、何室にも分かれて数百人の「烈士」たちの遺影と遺品・事績が展示されており、肅然として見入った。私の兄も弟も、彼らと戦った関東軍兵士の一員であった。

ハルビンから空路、瀋陽に着いたが、第六日朝、街は濃霧におおわれていた。元の奉天で、日露戦争で大会戦が行われた所だが、今は人口六百万人、遼寧省の省都であり、屈指の工業都市として中国第四の市である。この見どころは東陵・北陵と故宮で、福陵と呼ばれる東陵は、清朝の太祖ヌルハチの陵墓で、殿堂内に各時代の衣装をつけた歴代皇帝のろう人形が展示されている。北陵（照陵）は第二代皇帝の太宗ホンタイジの陵墓で、故宮は北京に遷都するまで初代・第二代皇帝が使った皇宮、紫禁城（北京の故宮）の十分の一くらいの規模だが、その原型とされている。第七日は再び大連に帰り、第八日は大連空港から一路、帰国の途にいたが、今回の旅を終って、私は長く私自身に課していた宿題をやつと果たしたという思いにひたっている。

# 本社十一月句会

十一月六日(月)午後五時半  
メンズフアツションセンター

しばらく晴天が続き、十一月とは思えぬほどの暖かさであった六日夕刻、八十五名の参加により定例会会は開催された。

日曜日毎にあちこちで句会、大会が催される地方へは宿泊して出席するなど、それぞれのスケジュールをかかえて秋は深まってゆく。

お話は黒川紫香氏、ぶっつけ本番の雑談風であるがとことわり、今回出版された川柳万画の紹介、兵庫県ふれあい川柳大会で訪れた相生市が風光明媚で歴史ある街であること、また、私的な用事で訪れた福山市から耕三寺の旅の途中、娘婿が急病になり、観光客に助けられたことなどを語る。連日のように句会や、川柳関係の用事で遠出される紫香氏は、とても米寿を過ぎているとは見えないという会場からの声も聞かれた。

月間賞は金井文秋氏(大阪市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―天笑・月子)

(受付―飄云児・みつ子・義子)

## 席題「通う」 石川 勝選

秋たけなわ指の消毒通うはめ  
内科外科歯科に通つて日が暮れる  
かけがえない母だから看に通う  
淋しくて仲間ほしさに医者通い  
通つても仲間ほしさに目薬貰うだけ  
病院へバスで遊びに通つて  
帰国子女ところが通じほだされる  
キャンパスに通つて夢に酔うてはる  
單身赴任通いなれてる惣菜屋  
少女Aつぶさに通う落下物  
本校に変わり峠を二つ越す  
絵にならぬ百夜通いのたらい舟  
トンネルを掘つて通うて行くつもり  
遠い日のおもかけ通うティールーム  
ふるさとへ通う確かな風がある  
性こりもなく万馬券通う  
野菊に会うために遠まわりして通う  
道祖神亡母と似通うみめかたち  
通い妻ではない別姓夫婦です  
坂のぼりフランスパンが通つてくる  
街はモノクロ通う聖者の影走る  
離れ島最終便が通うてくる  
胸の奥まだ約束が通い合う  
淡路島千鳥の通う橋ができ  
夫婦です阿吽の呼吸で通い合う  
散歩道お地蔵さんに通います  
折紙に心が通い鶴が翔ぶ

満州  
冬葉  
稚代  
かずみ  
満州  
しげお  
久峰  
憲太郎  
稚代  
柳伸  
柳宏子  
鬼遊  
桂香  
狸村  
鹿太  
一三三  
シマ子  
寿美  
あやめ  
茜  
勇太  
利武  
寿子  
義子  
寿美  
路児  
みつ子

鳴き砂にこころ通わす胸の疵  
あの森へ通う日もないカラスの子  
カルチャーにせつせと通う妻怖し  
言葉知らぬが心通じるポランティア  
ロボットと私の違い血が通う  
海峡を通う小舟に犬も乗る  
赤い血が通うて温い話する  
かよい慣れた地道に唄う鬼あざみ  
山越える鬼とこころを通わせて  
頬を射る視線に熱い血が通う

澄子  
洋子  
典子  
文秋  
保州  
鹿太  
美代子  
弘直  
楓楽  
澄子

こころ丸くなるまで通う花の芯  
人情が通うと弾む指人形  
通い慣れた道へ無口な蟻の群れ  
少年の背骨に通う偉人伝

森子  
飄云児  
雅文

兼題「除く」 宮崎シマ子選  
三人が寄つたら一人除かれる  
うちの人酒を除けばいい男  
元も子も無くしてしまふ除草剤  
兄ちゃんがテートに邪魔と菓子をくれ  
日曜を除いて全部翺び回る  
ホクロー一つ除いて変わる男運  
美辞麗句除くくらしへさんま焼く  
遺産分け嫁のわたしは除かれる  
儂さがひしひし捨て石を除く

勝  
保州  
鹿太  
英子  
頂留子  
ルイ子  
澄子  
茜  
かすみ  
美代子

ブライドを除くと友が寄ってくる  
飛車角を除いた父に齒が立たず  
他人を除く身内ばかりで皆本音  
まつたけと蟹は除いてある家計  
除きたい鬼 平成に多すぎる  
風評を除いておんな自立する  
自家用の野菜は虫は手で除き  
取り除く罪の多いある男  
除かれるたびに頑固になる親父  
黒い疑惑 秘書の名前が除かれる  
進歩した医学に臓器切りとられ  
柵を除くと隣の芝生よく見える  
理由あって会から除く好きな人  
煩惱を除くつもりの写経堂  
マニキュアを除いて母の顔になる  
わたしだけはねのけされたのし袋  
均等法女らしさが除かれる  
肩書を除くとやさしい顔になる  
四捨五入わたしはいつも四捨の組  
剪定の鋏 いのちを惜しみつつ  
のいて下さいこはシルベシートです  
記憶から母のエプロン除けない  
女房の勤である人省かれる  
国防色除けば平和バラ色に  
母娘の会話弾んで父は除かれる  
欠点を除くと影が薄くなる  
嘘すべを除くと住みにくいこの世  
除かれた意見に光るものがある

人

武庫坊 鹿太 利武 度 森子 澄子 たもつ たず子 隆 柳弘 森子 月子 雅文 紫香 吸江 満津子 鬼遊 絹子 天笑 章久 寿美 みつ子 楓楽 ダン吉

微笑を除くと私に何も無い  
微 地  
取り除くつもりで出した手を咬まれ  
天  
愛という字から心は除けない  
輔  
勝気さを除けば嫁は福の神  
兼題「いつも」 榎本吐来選  
いつもどこかで聞える亡母の鈴がある  
飲めぬ酒いつも来ている話好き  
姑の小言はいつも斜めから  
お月さんいつも同じ顔でいる  
乾杯にいつも顔が悪なし  
レジの音いつも爽やか笑い顔  
剃りあどがいつもきりりと憎い人  
土だけはいつも素足にあたたかい  
ライバルがいつも私の前にいる  
六法をいつも座右に置き孤独  
もうそろそろ自慢ばなしに水を向け  
日向ぼこいつも顔があるベンチ  
いつもとは違う夫に妻の勤  
いつももの道でいつもの人に会う安堵  
ライバルが今日も来ている隅の椅子  
妻の風邪いつも小言出て治る  
影だけはいつもわたしを裏切らぬ  
一人になる覚悟はいつも胸にある  
枕二ついつものように並んでる  
怖いからいつもカミさんたてている

桂香 房子 保州 シマ子 洞庵 楓楽 ダン吉 隆 憲太郎 千津子 一風 保州 楓楽 一二三 鹿太 庸佑 保州 洞庵 正雄 寿美 森子 東雲 東雲

水ぐるまいつもの音に四季移る  
自尊心いつも抱いてる無位無冠  
いつもとは違う気配に歩を合わす  
いつ見ても何か薬を飲んでいる  
母はいつも手を洗うたか洗ったか  
きざな奴いづも楊枝をくわえてる  
突っこみとホケでいつもギャグを受け  
いつも出るジョークの出ない日の恐さ  
二日酔い いつも後悔する夜明け  
同じところでおんなじ石にけつまずく  
バンザイの頃はいつでも酔いつぶれ  
万策がつかればいつも酒になる  
おみやげは要らぬといつも念を押す  
いつも一緒にけんかをしています  
好きだからいつもデートは待たされる  
お仏壇いつもここにこ花が好き  
二次会のタクトはいつもぼくが振る  
人  
エリートのルールはいつも光ってる  
四捨五入 切られる方にいつも居り  
天  
朝めしをいつもと違う人と食べ  
軸  
二次会のいつもの顔に異常なし  
兼題「ひずみ」 安藤 寿美子 選

とし子 太茂津 千歩 寿美子 勝 紫香 一風 柳伸 希久子 天笑 勇太 冬葉 希久子 金太 かつみ 美津留 諷云児 あやめ 鬼遊 吐来 たず子

天と地のひずみか あちこちで地震  
失礼だが他家のもめごと面白い  
このひずみ地震がいくとなおるだろ

希久子  
義子  
紫香

目線少し下げるとひずみ消えてくれ  
値切られた分だけ柱ひずみ出し  
くい飲みの備前のひずみ父愛す

一風  
二三  
女

別れ際のひとこと温いお人柄  
ひとことが足らず誤解の種を播く  
ひとことと嫁さん実家へ行ったきり

たもつ  
風云児  
シマ子

核核肌 地球を裂いていくひずみ  
ペン肝臓が杜のひずみ皆知り尽す  
童宮が核のひずみで埋められる

たもつ  
悟郎  
雅文

教育のひずみ虹が一色足りません  
天邪鬼自己のひずみに気がつかず  
ワントンボずらすとひずみ取れました

二三  
女  
度

ひとことが温みて明日を生きたり  
ひとことが欲しくて熟れてゆくトマト  
箸はずむ主治医のくれたひとことに

森子  
楓楽  
雅代

さきのご雲地球がゆがむ力持つ  
夫婦別姓ひずみは伏せ夫夫婦  
食い違ふ話どこかにあるひずみ

洞庵  
澄子  
房子

口元が歪んで来たら中座する  
百点の男がはいり輪がひずむ  
ひずみ抱いてイブモンタンを聞いている

天笑  
しげお  
みつ子

ごめんなきいとひとこと言えは済むものを  
ひとことの重みが光る母の文  
飾らない友のひとこと胸をつく

一文  
狸村  
洞庵

音のひずみが弥陀の祈りをまどおせる  
辻棲を合わしたところからひずむ  
ひずみなどなくて豆腐が掬われる

武庫坊  
保州  
雅文

児を抱いて心のひずみに耐えている  
兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

しげお  
みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

房子女  
紫香  
重人

苛めの死軽くひずみと書いてある  
銅鐸の絵がひずんでるおおらかに  
農政のひずみを知っているミミズ

路児  
ダン吉  
雅文

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

東雲  
重人  
紫香

遺言書親子のひずみ触れぬまま  
ポケットにひずんだままの恋がある  
別姓で生きるリズムにあるひずみ

柳弘  
鹿太  
森太

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

保州  
文秋  
桂村

だんだんとひずみと出来る秋の森  
ひざ小僧だいた両手にあるひずみ  
キャッチボール子とのひずみを整える

勇太  
森太  
寿子

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

文秋  
桂村  
狸村

妻と母のひずみにはまりこんだ僕  
ふっ切れればひずんだころ丸くなり  
まんまるに見える満月にもひずみ

保州  
隆

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

洞庵  
澄子  
勝

日本丸どこかひずんでいませんか  
この辺で研がねばひずみ酷くなる  
意地悪な笑い袋にあるひずみ

正坊  
美津留  
桂香

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

正坊  
利武  
ルイ子

意地悪な笑い袋にあるひずみ

正坊  
美津留  
桂香

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

正坊  
利武  
ルイ子

意地悪な笑い袋にあるひずみ

正坊  
美津留  
桂香

兼題「ひとこと」 野村 太茂津 選  
美代子

みつ子

ひとことが強くこたえる過去を持つ  
ひとことが恨みも言わぬ水中花  
ひとことが不信を生んだ軽い口

正坊  
利武  
ルイ子

あの時のひとこと僕は忘れない

正坊

納得のいかめひとこと抱いて秋

稚代

天 的をつく一言放つ隅の席

隆

脇 脇役で台詞ひとことそれでよし

大茂津

兼題「無視」

橋高薫風選

無視された男が朝のパンを焼く

鹿太

新聞紙にくるんだものは無視できぬ

桂香

買いの袋下駄はき前かけはた目無視

満津子

妻に無視されてストレス干涸びる

愛論

核実験 核持ため国無視される

柳宏子

寒い夜赤提灯は無視できぬ

東雲

無視された意見が集う縄のれん

吐来

鬼瓦鳩も雀も無視してる

落児

無視されてからのやる気はほんまもん

頂留子

無視できぬ叫び八万五千人

正坊

無視してた男手に家事がかりつき

満州

無視できぬ位置にちよこんと妻がいる

澄子

助手席の妻を無視していませんか

たず子

月給振り込みそれから妻に無視される

一三三

先輩の転んだ坂は無視出来ぬ

洞庵

無視しても自慢話をつづけてる

シマ子

生きんとす花の一芽を無視できず

房子

無視されて無視した痛み分かります

とし子

同じ愚痴くり返す母無視できず

狸村

無視すれば腹も立たない鯛雲

典子

無視されて自動扉に立ちつくす

英子

無視された所で今日も咲いてます

章久

無視すると機嫌をとりにやってくる

希久子

無視されているとも知らず土産まで

たもつ

無視つづく僕は俯いてはいない

度

同人総会での意見について

過日の平成7年度同人総会における質問・提案について10月・11月の常任理事会で討議しましたので、その内容を報告いたします。

▽同人名簿について 平成8年発行の名簿では必ず「川柳塔社規約」を掲載する。12月発行の補正表にも規約を入れる。

▽領収書発行について 従来どおり振替用紙による送金には発行しない。現金・為替などの場合は領収書を送付する。

▽各賞の通知について 新年度から所属柳社(句会)代表者に通知するとともに、受賞者本人にも通知することとする。

▽各賞選考について 常任理事会で制定した「川柳塔社各賞選考規定」に基づいて選考を行っており、ここでは同一人に同一賞を授賞しないこと、路郎賞・川柳塔賞の選考委員および茴香の花選者は路郎賞の対象としないこと、自選集の作者はすべての賞の対象としないことを定めている。

▽路郎賞選考方法について 本年度は現行どおりとし、新年度からは作品群を対象とするなど、選考方法の検討を行う。

▽本社句会への投句について 投句廃止に反対する意見があったことを重視し、当分は現行のままとするともに、ひきつづき再検討を行うこととする。

(川柳塔社常任理事会)

満州

澄子

たず子

一三三

洞庵

シマ子

房子

とし子

狸村

典子

英子

章久

希久子

たもつ

度

ガン吉

森子

寿美子

しげお

文秋

薫風

人

地

天

軸

脇

鹿

桂

満

愛

柳

東

吐

落

頂

正坊

稚代

隆

大茂津

橋高薫風選

鹿太

桂香

満津子

愛論

柳宏子

東雲

吐来

落児

頂留子

正坊

無視してた男手に家事がかりつき

満州

無視できぬ位置にちよこんと妻がいる

澄子

助手席の妻を無視していませんか

たず子

月給振り込みそれから妻に無視される

一三三

先輩の転んだ坂は無視出来ぬ

洞庵

無視しても自慢話をつづけてる

シマ子

生きんとす花の一芽を無視できず

房子

無視されて無視した痛み分かります

とし子

同じ愚痴くり返す母無視できず

狸村

無視すれば腹も立たない鯛雲

典子

無視されて自動扉に立ちつくす

英子

無視された所で今日も咲いてます

章久

無視すると機嫌をとりにやってくる

希久子

無視されているとも知らず土産まで

たもつ

無視つづく僕は俯いてはいない

度

同人総会での意見について

過日の平成7年度同人総会における質問・提案について10月・11月の常任理事会で討議しましたので、その内容を報告いたします。

▽同人名簿について 平成8年発行の名簿では必ず「川柳塔社規約」を掲載する。12月発行の補正表にも規約を入れる。

▽領収書発行について 従来どおり振替用紙による送金には発行しない。現金・為替などの場合は領収書を送付する。

▽各賞の通知について 新年度から所属柳社(句会)代表者に通知するとともに、受賞者本人にも通知することとする。

▽各賞選考について 常任理事会で制定した「川柳塔社各賞選考規定」に基づいて選考を行っており、ここでは同一人に同一賞を授賞しないこと、路郎賞・川柳塔賞の選考委員および茴香の花選者は路郎賞の対象としないこと、自選集の作者はすべての賞の対象としないことを定めている。

▽路郎賞選考方法について 本年度は現行どおりとし、新年度からは作品群を対象とするなど、選考方法の検討を行う。

▽本社句会への投句について 投句廃止に反対する意見があったことを重視し、当分は現行のままとするともに、ひきつづき再検討を行うこととする。

(川柳塔社常任理事会)

満州

澄子

たず子

一三三

洞庵

シマ子

房子

とし子

狸村

典子

英子

章久

希久子

たもつ

度

ガン吉

森子

寿美子

しげお

文秋

薫風

人

地

天

軸

脇

鹿

桂

満

愛

柳

東

吐

落

頂

正坊

稚代

隆

大茂津

橋高薫風選

鹿太

桂香

満津子

愛論

柳宏子

東雲

吐来

落児

頂留子

正坊

無視してた男手に家事がかりつき

満州

無視できぬ位置にちよこんと妻がいる

澄子

助手席の妻を無視していませんか

たず子

月給振り込みそれから妻に無視される

一三三

先輩の転んだ坂は無視出来ぬ

洞庵

無視しても自慢話をつづけてる

シマ子

生きんとす花の一芽を無視できず

房子

無視されて無視した痛み分かります

とし子

同じ愚痴くり返す母無視できず

狸村

無視すれば腹も立たない鯛雲

典子

無視されて自動扉に立ちつくす

英子

無視された所で今日も咲いてます

章久

無視すると機嫌をとりにやってくる

希久子

無視されているとも知らず土産まで

たもつ

無視つづく僕は俯いてはいない

度

同人総会での意見について

過日の平成7年度同人総会における質問・提案について10月・11月の常任理事会で討議しましたので、その内容を報告いたします。

▽同人名簿について 平成8年発行の名簿では必ず「川柳塔社規約」を掲載する。12月発行の補正表にも規約を入れる。

▽領収書発行について 従来どおり振替用紙による送金には発行しない。現金・為替などの場合は領収書を送付する。

▽各賞の通知について 新年度から所属柳社(句会)代表者に通知するとともに、受賞者本人にも通知することとする。

▽各賞選考について 常任理事会で制定した「川柳塔社各賞選考規定」に基づいて選考を行っており、ここでは同一人に同一賞を授賞しないこと、路郎賞・川柳塔賞の選考委員および茴香の花選者は路郎賞の対象としないこと、自選集の作者はすべての賞の対象としないことを定めている。

▽路郎賞選考方法について 本年度は現行どおりとし、新年度からは作品群を対象とするなど、選考方法の検討を行う。

▽本社句会への投句について 投句廃止に反対する意見があったことを重視し、当分は現行のままとするともに、ひきつづき再検討を行うこととする。

(川柳塔社常任理事会)

満州

澄子

たず子

一三三

洞庵

シマ子

房子

とし子

狸村

典子

英子

章久

希久子

たもつ

度

ガン吉

森子

寿美子

しげお

文秋

薫風

人

地

天

軸

脇

鹿

桂

満

愛

柳

東

吐

落

頂

正坊

稚代

隆

大茂津

橋高薫風選

鹿太

桂香

満津子

愛論

柳宏子

東雲

吐来

落児

頂留子

正坊

無視してた男手に家事がかりつき

満州

無視できぬ位置にちよこんと妻がいる

澄子

助手席の妻を無視していませんか

たず子

月給振り込みそれから妻に無視される

一三三

先輩の転んだ坂は無視出来ぬ

洞庵

# 柳界展望

を獲得した。

〈きしせん賞〉

ビエロつてはにかむ顔も  
持っている 八十田洞庵  
〈文化祭賞〉  
真ん中に笑顔を持ってい  
る波紋 牛尾 緑良

諷云さんが相生市ふれあ  
いの祭典実行委員会会長賞、  
土橋螢さんが相生市長賞、  
小林妻子・月原宵明・桜井  
千秀の3氏が佳作に入選し  
た。

〈文部大臣奨励賞〉

★堺まつり協賛堺市民川柳  
大会は10月7日、堺市総合  
福祉会館で68名が参加して  
開かれ、次の本社同人2氏  
が秀句賞に輝いた。  
お断りします私が鬼にな  
る前に 田中 透太  
鬼になる勇気を母はふと  
ころに 池 森子

☆寝屋川市民川柳大会は11  
月3日、96名が参加して同  
市立総合センターで開かれ  
次の同人3氏が秀句賞を獲  
得した。  
ベテランの息ぬき誰も気  
がつかぬ 高田 博泉  
母さんが帯を締めると留  
守になる 浅野 房子  
無数の森を記憶の中に持  
つ兵士 藤村 亜成

横に在るだけで豊かにな  
る帽子 北川 茂子  
また、当日出句分では、  
土橋螢・門谷たず子の2氏  
が秀句賞に選ばれた。

★第23回東大阪市市民川柳大  
会は10月8日、同市立社会  
教育センターで開かれ、同  
人の田中正坊氏が市議会議  
長賞を獲得した。

★第7回兵庫のまつり・ふ  
れあいの祭典'95の川柳発表  
大会が11月5日、相生市民  
会館で開かれ、文部大臣奨  
励賞以下の各賞が表彰され  
た。本社同人では牧淵富喜  
子さんがふれあいの祭典典  
行委員会代表会長賞、川島

★富田林市民川柳45周年記  
念大会は11月5日、同市立  
中央公民館で一〇三名が参  
加して開かれ、次の同人2  
氏が秀句賞に輝いた。  
すこい美人のとりの席  
が空いている 高橋夕花  
税務署を出るとおなが  
空いてくる 小池しげお

★第45回岸和田市民川柳大  
会は10月21日、95名が参加  
して自泉会館ホールで開か  
れ、次の同人2氏が秀句賞

★第37回文芸まつりの入賞  
者表彰が11月12日、和歌山  
市庁舎大集会室で開かれ、  
同人の田中みねさんが市教  
育委員会賞、青枝鉄治さん

が産経新聞社賞、山口三千  
子さんが和歌山新報社賞、  
田中輝子・宮口克子・三宅  
保州の3氏が文化協会賞を  
受賞した。

★平成6年度宮城野賞は、  
12月31日締切。

★川柳新京都社の第10回誌  
上秀作競詠会の入賞者が決  
定した。一位は樋口仁、二  
本4-1-2-5・川柳噴煙吟  
社へ。非会員は発表誌代と  
して500円を同封するこ

と。

## 新同人紹介

吉 本 菁 風

— 薫風・満秋推薦

富 山 ルイ子

— 柳宏子・紫香・宵明・諷云児推薦

北 岡 波留吉

— 柳宏子・紫香・小路・諷云児推薦

★第4回・風のまち川柳大賞の作品募集が行われてい

る。課題は「風」で、選者

は齋藤大雄・尾藤三柳・宮

本めぐみ・森中恵美子・橘

高薫風・寺尾俊平の各氏。

応募句は官製ハガキ1枚に

3句まで、住所・氏名・柳

号・年齢・電話番号を記入

し、平成8年1月5日まで

者には次のとおり。雪―齋藤

に〒030-113 青森県

東津軽郡蟹田町役場・風の

まち川柳大賞係。平成8年

4月下旬に発表。

★時実新子の月刊『川柳大

学』創刊記念句会は、平成

8年2月11日午前11時から

神戸市・楠公会館（湊川神

社内）で開かれる。題と選

者は次のとおり。雪―齋藤

## 月刊川柳誌が二誌創刊

月刊川柳誌が2誌あいついで関西で創刊される。

一つは、12月創刊の『月刊オール川柳』で定価8

30円、創刊特集として全国一流作家競詠、記念エ

ッセイなどを企画、読者柳壇を設け、オール川柳賞

を創設することとしている。発行所は〒556 大

阪市浪速区恵美須西2-9-15 オール川柳社。

もう一つは、平成8年2月創刊の時実新子の月刊

『川柳大賞』で、A5判100頁、定価1000円

（〒240円）、時実新子新作十五句、会員自選・

川柳の森、新子選・桜の園の作品欄を設ける。発行

所は〒650 神戸市中央区下山手通8-15-1ラ

イオンズマンション元町Ⅲ505号室。

大雄▽土―大野風柳▽文―

尾藤三柳▽手―磯野いさむ

▽紫―橘高薫風▽命―藤本

静港子▽鐘―小松原爽介▽

愛―寺尾俊平▽雑詠―時実

新子謝選（各2句・午後零

時半締切）、会費2000

円。同日午後5時半から来

賓選者と新子を囲む懇親パ

―ティーを開く。

★第19回鳥取県川柳大会は

平成8年3月31日、鳥取県

東伯郡東郷町の国民宿舎・

水明荘で開く。兼題と選者

は、鳥―河内月子▽湧く―

原宣子▽弓―灰原泰子▽や

っぱり―奥田勝子▽芸―土

橋登▽気まま―金山夕子▽

流行―上田宣子▽普通―米

田幸子（各題2句）、締切

午前11時半、会費2000

円（作品集・昼食）、欠席

投句は1000円を添え、

3月20日までに鳥取県東伯

郡東伯町徳方597・新家

完司方、実行委員会へ。

## ▽出版△

■『私の百句―朝日なにな

柳壇入選句』（野村静雄著

橘高薫風・片岡つとむ序文

B6判68頁）

十二月八日は知らずクリ

スマス

■『翠洋―川柳合同句集

III』（翠洋会編集・発行、

B6判136頁）会報15

0号を記念し、会員32名の

各20句を収録。

■『川柳万画（まんが）』

（黒川紫香監修・岡村康裕

画文・B6判180頁・価

1200円）。

■『全国川柳作家年鑑―第

40回』（ふあうすと川柳社

刊・A5判348頁）13

87名の各7句を収録。

■『禱り―川柳第三句集』

（永田曉風著・B6判12

6頁・価2000円）柴田

午朗序文

自殺未遂 遠くに桃の熟

れる村

■植村客遊子遺句集『客遊

子』（B6判160頁・中

塚礎石編集）客遊子氏の川

柳とエッセー、追悼文・追

悼句を収録。

## ▽芳志△

■土橋はるお氏（鳥取県）

から快気祝として金一封を

拝受いたしました。

■増田君代さん（米子市・

故増田竹馬氏夫人）から亡

夫供養として金一封、拝受

いたしました。

## ▽訂正▲

■11月号P83上段末尾の

行（澎湖抄）「仲直り柿の

葉すしを買っておく」の作

者「藤北寺市 田中透太」

↓「藤井寺市 田中透太」

▽P85中段3行目（川柳）

「……昨年、」▽P114

「……昨年、」▽P114

第4段1行目の西口いわゑ

さん住所「西宮市東山台3

―10―9」↓「西宮市東山

台3―44―10―9」



# 大往生の増田竹馬さん

林 荒介

眼帯を取ればお里がそこに居る

おだやかな作品でお人柄そのもの。近所を散歩するのがやっと話しておられたが、俳画もお上手で、沢山の方々に差し上げておられた。また百人一首の会にも入っておられ、多彩な竹馬さんでした。

平成元年版『鳥取県川柳作家名鑑』に

役付きになって鳩派の群れに居る

水墨画余白が握る主導権

万葉の恋は不倫とは言わず

まだ修理出来ると外科はオベが好き

考える人のポーズで爪を切る

この数年前から作品の発表がなく、昭和の後期の『川柳塔』の中から選んで、勝手に掲載した十句の中の五句。お元気だったときに、竹馬さんを囲んで「長寿にあやかろう会」が持てなかったのが心残りです。

こうしていても竹馬さんの穏やかな面影が眼の奥にあります。赤崎や大山番傘の例会には何回か出席しておられたようですが、それも三十年も前の話。十年前に眼の手術をされたから、大山番傘の例会で二度か三度、お目に掛かったのが例会では最後になりました。

「川柳塔きやらばく」が三十余年前の、十人にもみたなかった「きやらばく川柳会」の頃からの同人でしたが、眼を思われてからは句会への出席もなく、おおかたの「川柳塔きやらばく」の現在の会員には面識もなく、名前の竹馬さんでした。

行年九十四歳。平成七年十月二日に眠るよ

うな、大往生だったと聞きました。  
この十年ばかりは川柳を発表されることもなく、ルーベを使って『川柳塔』誌を読んでみると、昨年お目にかかったときに聞きました。昭和四十九年刊行の同人句集『川柳塔』に

真つ直ぐに育つた松は絵にならず

ドック入り分解掃除して使い

二三度は部品取り替え古希達者  
理想像父と言いつける子がうれし

などが発表されていて、わたしの母、泉甫を

囲んで「長寿にあやかろう会」を催されたこともありました。「きやらばく」の発足当時からわたしの家が舞台でしたから、まだ川柳に係わっていなかった私にも、筒抜けになる「きやらばく」の川柳でした。

長年勤められた銀行も支店長で退職され、損保の代理店をされながら、五男三女に囲まれた円満なご家族だったと、もっぱらのご近所。竹馬さんの人柄もさることながら、奥さんの支えがあつてこそのご家庭。三人のお嬢さんも縁付かれて、銀行にお勤めのご長男との四世代家族。高校の先生や銀行マンのご子息で、十六人のお孫様と曾孫三人。

昭和五十九年発行の

誌『遺暦記念句集』『川柳塔』には

これからが人生 余白と言ふなこれ  
足跡を残そつゆつくり墨をする

一病を抱えて無理をせぬ長寿

## 12月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から ポーズ・道・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	7日(木)午後1時から 比 べる・列(共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入り 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時から 気 楽・数える・傷口	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 並 ぶ・大 胆・笑 う	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から あ く び・走 る・贈 る・白	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 市(いち)つなぐ・偶然・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から ピリオド・はやばや・破る	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	15日(金)午後6時から 平日・迷惑・餌・連続	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川柳会	16日(土)午後1時半から 敏感・踏む・弁当・本	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市 川柳 同好会	16日(土)午後6時から 別れ・丸・まさか・甘い	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
川柳 ねやがわ	17日(日) 正午から 急ぎ足・流れ・無惨・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 分ける・研究・陣・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(水) 正午から 走る・特売・消える・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
富柳会	21日(木)午後1時から 無・忘れる・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京 都 塔 の 会	22日(金)午後1時から 殻・綴じる・同士	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
はびきの 市 民 会 川柳	24日(日)午後1時から サンタ・恋・雰囲気・極楽	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 編集後記

まだあるが、疑問を感じたら辞書にあたること。

★文芸に漢字を制限することとはできないが、印刷物の場合は原則として新字体を用い、常用漢字の使用に努めたい。次のケースは、漢字よりも仮名が望ましい。

★出版物を編集・校正する仕事は文字とのたたかいてある。どんなに立派な本でも、ミスプリントが多ければ価値は半減する。そこでよく見かける誤用の例、↓印の前が誤字である。同志↓同志、「同志」という言葉はあるが、「:どつし」のときは「同志」と書く。気嫌↓機嫌、軽卒↓軽率、一諸↓一緒、水瓜↓西瓜、雑布↓雑巾、黙舌権↓黙秘権、感違い↓勘違い、衣更え↓衣替え、午后↓午後。

★次に仮名遣いの誤りだが、まず、送り過ぎるケース。隣り↓隣、光り↓光、俄か↓俄、初詣で↓初詣、送ら子↓幼子。その反対に送り足りないケース。老↓老い、暮↓暮れ、借↓借り、貸↓貸し、危い↓危ない。まだ

もよるが、「:する事」はこととしてはいいし、よく用いられる「有る」と「無い」も、ある・ないの方が表記上、適切だと思う。★このほか、云う↓言う、廻る↓回る、喰う↓食う、坐る↓座る―は改めたいし、「馴れる」と「慣れる」は意味が異なり、誤って「馴れる」がしばしば使われることにも留意してほしい。

今年中、拙い編集後記のご愛読に感謝したい。(正)

## ひとこと

### 敗戦五十年が問うもの

句会のおはなしで、戦争体験を聞くことがよくある。最近、「敗戦五十年、この先輩たちはかつての戦争を今、どのように」と思うようになった。侵略戦争の犠牲者だった朝鮮、中国の人民をべつ視する発言、天皇制軍隊の非人間性を懐古する。時には「戦争で死が恐ろしくなくなった。根性がついた」という話もあつた。草一本に至るまで軍国主義が強行された時代に「聖戦」と信じた人がいても不思議ではない。だが、「戦争は仕方なかった」あの時代に小林多喜二ら少なからぬ人たちが戦争に反対して捕われ殺された歴史の真実である。敗戦五十年、戦争は誰が起こし、誰が戦い、誰が死んだのか、なぜ戦争は防げなかったのか、今、問われている。(岩佐タン吉)

○六月号の編集後記に、近年句会での喫煙者が減つたことを書いた。締切は二か月前なので、四月二十四日出稿、その翌日の新聞を見てへえと驚いた。

○そんな折、ある週刊誌にその理由のひとつが紹介されていた。それは「一mgタバコ」のヒットらしい。これは過去最高だったとのこと。のたばこは、体に悪いタール、ニコチンとも普通のものに比べて十分の一。○調査によるとこれが曲者ありますように。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（2月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

## 「川柳塔」への投句について

- ① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
- ② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。
- ③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。
- ④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

## 作品募集

川柳塔 (8句) 橋高薫風選  
 水煙抄 (8句) 西田柳宏子選  
 渺湖抄 (3句) 小出智子選  
 茴香の花 (3句) 八木千代選  
 吟課題 (3句) 「景色」 武田帆雀選  
 「飾る」 瀬戸まさよ選  
 「みかん」 菱田満秋選  
 初歩教室 「許す」 (3句) 吉岡美房担当

2月号発表 (12月15日締切)

3月号

課題吟 「艶」「乗る」「ワープロ」  
 初歩教室 「開く」

## 本社12月句会

とき 12月7日(木) 午後5時半  
 ところ メンズファッションセンター3F  
 中央区内本町1-1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
 おはなし 野村太茂津  
 兼題 「破る」 池森子選  
 「汚い」 板尾岳人選  
 「客」 高杉鬼遊選  
 「ごめん」 西田柳宏子選  
 「万歳」 橋高薫風選  
 席題 1題 当日発表 各題2句以内  
 会費 500円

## 本社1月句会 8日(月) 予定

兼題 「コーナー」「可能」「同じ」  
 「芯」「風邪」

## 夜市川柳募集

第7回「境界」 柏原幻四郎選  
 ハガキに3句 12月末締切  
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## NHK川柳作品募集

課題 「こども」 森中恵美子選  
 ハガキに3句 12月10日締切  
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
 「文芸部」川柳係  
 発表 12月23日(土) 午前11時5分からラジオ第1放送(予定)

## 西日本文字放送作品募集

課題 「歌」 森中恵美子選  
 ハガキに3句 12月15日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
 大手前ウサミビル3階  
 西日本文字放送 川柳係

〒545

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番  
 発行所 川柳塔社  
 電話 (〇六)六一九一四番

大阪市阿倍野区三軒町二一〇一六  
 ウエムラ第2ビル202号室

印刷所 藤原童心社  
 発行人 橋高薫

平成七年十二月一日発行

一年分 七千九百円(同)

半年分 四千円(送料共)

定価 六百円(送料76円)

# 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。十九回の歴史を持つ全日本川柳大会、十回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞつてご参加ください。

## 課題と選者（各題2句・連記）

- 「源流」 坂本 柳峯——片岡つとむ 共選  
「すんなり」 小松原爽介——荻原 柳絮 共選  
「姿」 森本 清子——近藤 季男 共選  
「ナース」 小出 智子——越郷 黙朗 共選  
「海」 ちば東北子——仲川たけし 共選

参加費 2000円〔投句料・「平成柳多留」第3集代〕

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・世界経済広報センター会長賞・全日本川柳協会

会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切 平成7年12月30日（土）

発表 平成8年6月・第20回全日本川柳熊本大会

参加方法 所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求くだされば送ります）

〒530 大阪市北区天神橋一丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 352-2210

## 賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで  
住居の事なら何でも相談できる店



# 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14  
TEL (06) 330-0006(代)  
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21  
TEL (06) 388-6166(代)  
FAX (06) 388-6886